詞を聞て静かに出かゝり、「如何に申候」と云ふ所にて幕を離れ、見合せ幕離れにて踏み止め、「これ〳〵御覽候へ」にて脇連より籠と文を受け取り、「さては我君御位に」と諷ひ出すなり。

○仕手は品よくすらりとしたる所を諷ふべし。

○「急ぎ見參らせ候はん」此處にて仕手右へとり入替り舞臺へ入り、中へ行き正面にて下に居、籠を左に置き兩手にて文を開き見て「我應神天皇の」と諷ひ出すなり。

○「我應神天皇の孫苗を繼ながら」此文は諷ひ方に於て熊野と大差なし、然れども其位と心持とは大に相違せり、熊野は平の宗盛に仕へ、此仕手は皇子に仕へし者にて、其文は君より贈はり且つ戀慕の情を含んで、讀む心を眞に持ち謹て讀み、熊野は母より病を知らする文にて哀傷の情を專とするなり、彼是其趣きを異にす、故に其心持にて諷ふべし。

○此文の諷ひ出しは引立てすらりと諷ひ、「毎日に伊勢を拜し奉りし」より乘を付けてさらりと諷ひ、「賴めたゞ」より替へて諷ふべし。

○「君と住ほどだに有し」此初同は確かりと淋しく諷ふべし、然れども道行の事なればすらりとしたる所を諷ふべし、「花の跡とて」より替へて乘て諷ひ出すべし、仕手は此地にて中入するなり、

○素袍脇、
　子方
　面、直面、初冠、箔、大口、單狩衣、腰帶、扇、

○「君の惠みも高照す」此次第は品能く確かりと諷ふべし。

○「大迹邊の皇子」此處の「邊」の字は仕手は「め」と諷ひ、脇は「べ」と諷ふべし。

後仕手
　面、增、唐織脫掛、平元結　腰帶、水衣、扇、

○連女、
　面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織脫掛、水衣肩取る、花籠、

○仕手は扇持ち一聲越して連を先に立て出、橋掛りに行かゝり諷ふ。

○後仕手は三井寺、櫻川等とは異なりさらりとしたる中に濕とりと運の具合を付けて其位を諷ふべし。

○「など情なく敎へ給はぬぞや」此處は仕手しをる型あり、心持を付けて諷ふべし。

○「玉章を」此處はすらりと乘て寬たりと諷ふべし。

○「宿雁金の旅衣」此處は引立て諷ふべし。

○「君がすむ越の白山」此處は少し調子を控へてすらりと諷ひ出し、「高間の山のよそにのみ」よりさらりと諷ふべし。

○「爰は近江の海なれや」此地は道行なれば乘てすらりと諷ふべし。

○「こがれ行く旅を忍ぶの摺衣」此地は引立てすらりと諷ひ出し、「鹿の起臥」とたつぷりと、「たへかねて」とずかりと、「猶かよひゆく」と乘て諷ひ出し緩めて諷ひ、「秋草の」とすらりと運び、「野くれ」と入グリに諷ひて少し緩め、「露分て、とすらりと、「玉穗の宮に着にけり」とずかりと諷ひ句讀にして少し呼吸を取り、返しを諷ひ出すべし。

○「さこそ心はならの葉の」此處は、「ならの」と出して大きく諷ひ、「風も亂るゝ露霜の」とさらりと諷ふべし。

○「みゆきの御前に」此處は「御前に」と押へてすらりと張て諷ふべし。

○「ふしぎやな其樣人に替りたる」此處に懸て諷ひ出し、「そこのき候へ」とずかりと諷ふべし。

○「何と君の御花筐を」此處は懸て諷ひ「打落されたるとや」とずかりと、「荒いまゝしの」と扱て心持を付け、「御事や候」と確かり諷ふべし、

○「我等は女の狂人なれば」此處より以下、連との掛合は次第に詰めて諷ふべし。

○「我よりも猶物狂よ」此處は「物」に力を入れ、「ぐるひ」の「ひ」の廻しを小さく廻し、彈て止め地へ渡すべし。

○「恐ろしや」此地は運て具合を付けて諷ふべし「あらけなや」とたつぷりと「土に落し給はゞ」と運て「天のとがめも」と緩め、「たちまちに」とすらりと諷ひ「罰あたり」と懸て出し、「我ごとくなる」と入グリに諷ひ、「ともの物狂と」と具合を付け、「いはれさせ給ふな」とずかりと「人に云はれさせ給ふな」と緩めて具合を付け「かゝ樣に申せば」より改めて諷ひ出し、「此君いまだ」より替へて心持を付け、「南無や天照」より確かりと諷ひ、「御手を合させ」とたつぷりと、「忘れ筐までも」と諷ひ少し呼吸を取り、「なつかしや戀しや」とすがりと諷ふべし。

○「陸奥のあさかの沼の花かつみ」此處はすらりと諷ふべし、「爰に來てだに」と乘て諷ひ出し、たつぷりと諷ひ、「唯いたづらに」と入グリに諷ひ、「望む猿の」とたつぷりと具合を付け、「ごとくにて」と懸て諷ひ、「さけびふして」と込めて懸てずかりと進み「泣居たり」と少し緩め返しより段々と靜めて諷ふべし。

○「いざや狂はん諸共に」此處は「諸共に」と出して諷ふべし。

○「御幸に狂ふはやし社」此處は確かりと諷ふべし。

○舞曲、二段曲、

○此曲は確かり諷ふべし、「されば共なか〳〵」より替へて諷ふべし。

○「御思ひは增れ共」此處は六文字の合方なり。

○「夜ふけ、人靜まり」此處より改めて諷ひ出し「夜ふけ」とずかりと諷ひ、短かく切り少し呼吸を取り、「人靜まり」と少し靜めて諷ひ、「あるか」と突込てずかりと諷ひ止め呼吸を取り、「なきかに」と諷ひ出すべし。

○「漂渺悠揚としては又」此處は引立て諷ふべし、「又」とヤアの間を引かずに確かり止め「尋ぬべき人なし」とすらりと諷ふべし。

○「李夫人が住なれし」より以下さら〳〵と諷ふべし。

○「餘りの事に胸ふさがり」此處より引立てさらりと諷ふべし。

○「はじまりける」此處は「り」の字へ輕く出して當り「る」の止めを彈て地へ渡すべし。

○「有難やかくばかり」此地はすらりと諷ひ出し「君の」と確かりと止め「御心ぞ」と確かりと諷ひ出すべし。

○「御遊も既に時過て」此處より揚氣にさら〳〵と乘て諷ふべし。

源氏供養

○脇、大口僧、三人、

○脇次第名乘共確かりと諷ふべし。

○「時も名も花の都を立出て」此處は寛たりと確かり諷ひ出し、「音羽の瀧を」より替へて諷ふべ

し。

前仕手

面、増、鬘、鬘帯、箔、唐織、扇、

○呼び掛け。

○「なふ〳〵安居院の法印に」此處は歩みながら謡ふ所なれば乗を付けてのんびりと謡ふべし。

○此仕手は品よく寛たりと謡ふべし。

○「恥かしや色に出るか紫の」此處は締めて確かりと謡ふべし。

○初同は濕とりと謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手。

面、増、長絹、緋大口、腰帯、扇、

○後仕手は一聲二段聞て出、一の松にて開き謡ふ。

○後仕手は普通緋の大口を着すれども五十四帖入と小書のある時は緋の指貫を着用するなり。

○「ねもせてあかす此夜半の」此地はすらりと運て謡ひ出し、「月も心せよ」と外してずかりと謡ひ、「石山寺の」より緩め「鐘の聲」と心持を付けて静めて打切に謡ひ、「夢をも誘ふ」より改めて謡ひ出すべし。

○「花染ぎぬの色がさね」此處はすらりと引立て謡ふべし。

○「爰に數ならぬ紫式部」此處は浮やかにすらりと謡ふべし。

○舞曲、二段曲。

○此曲は静かにさらりと謡ふべし。

○「うつ蟬の空しき此世を」此處より改めて謡ひ出すべし。

○「唯すべからくは」此處は懸て謡ひ「秋の風きえずして」より替へてさら〳〵と謡ふべし。

○「眞木柱のもとにゆかん」此處は六文字の合方と

云ふ、鉢木の「雪ほうじて寒きにも」と同様の合方なり、「梅が枝の」とずかりと、「匂ひにうつる我心」と替へて少し静めて謡ひ出し、「藤のうら葉に」よりさら〳〵と謡ふべし。

○「樂しみさかえを浮舟に」此處は「さかえを」の「え」と「を」の間にて浮かして謡ふべし。

○「身の來迎を」此處は入グリに謡ひ、「紫式部が」と輕く、「たすけ給へと」と入グリに謡ふべし。

○論議は寛たりと謡ふべし。

○「夕には影もなし」此處は地へ渡す所を彈て止め、地は直ぐ付けて「朝顔の」と謡ひ出すべし。

○「能々物を案ずるに」此處は静かにさら〳〵と謡ひ、「是も思へば夢のよと」と少し静め以下段々に静めて謡ふべし。

山姥

○素袍脇、三人、

○脇、次第名乗共さらりと謡ふべし。

○「都を出てさゞ浪や」此處はさらりと謡ふべし。

○「梢波立鹽こしの」此處もさらりと謡ふべし、「雲路うながす三越路の」より改めて謡ひ出すべし。

連女

面、小面、鬘、鬘帯、箔、唐織着流、扇、

○「實や常に承る」此連の詞は確かり謡ふべし。

○「迚も修行の旅なれば」此處は中吟を弱く謡ひ「かちはだしにて參り」より強く謡ふべし。

前仕手。

面、曲見、鬘、鬘帯、箔、厚板、唐織、扇、

○仕手は呼び掛けて出、「聽て參らふずるにて候」と云ふ脇の詞を聞て内へ入り、中にて下に居、脇へ向き「今宵御宿」と謡ふなり。

○仕手は總て内に凄愴の氣を含て謡ふべし。

○「なふ〳〵旅人御宿參らせうなふ」此處にて狂言の説賦あり、故に素謡の時にも其心得にて呼吸を取り少し間を置て、「是はあげろの山とて」と謡ひ出すべし。

○「今宵御宿參らする事」此處も少し間を置て謡ひ出すべし

○「よし足曳の」此處はさらりと謡ひ出し、「山姥が」と緩めて確かりと、「山廻りするぞ」よりすらりと、「荒面白や候」と静めて謡ふべし。

○「恨申に來りたり」此處は確かりと謡ひ、「道を極め名を立て」と緩め、「世上萬德の」よりさら〳〵と「至らざらんと」と静め、「恨をいふ山の」より替へて緩めて謡ひ、「聲をあげろの」とたつぶり、「山姥が」と出して心持を付け引て切り、「靈鬼なく〳〵」より段々に静めて謡ふべし。

○「すはやかげろふ」此處はずかりと謡ひ出し、「夕月の」と緩めて確かりと謡ひ、「さなきだに」と改めて調子を替へ押へて確かり謡ふべし。

○初同は濕とりと謡ふべし、「いふかと見れば」より替へてさらりと謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、山姥、姥髪、箔、唐織坪折、半切、腰帶、扇、撞木杖

○後仕手は杖をつき、頭越一聲にて出、一の松にて開き謡ふ。

○後仕手は强みに確かりと謡ふべし。

○「寒林に骨をうつ」此處より張て謡ひ、「靈鬼なく〳〵」より少しさらりと「前生の業を恨む」と確かりと謡ひ、「深夜に花を供ずる」より替へて静かに、「万箇」と扨て「目前の境界」と確かり出し、「けんかべう〳〵として」と静め、「巖峨々たり」と强く大きく、「山又山」と確かりと大きく謡ふべし、此處にてイロへあり、茲にて仕手は舞臺へ入り、「いづれのたくみか」と謡ひ出すなり、故に素謡にても少し間を置き此處より別に謡ひ出しさらりと謡ふべし。

○「創りなせる」此處より替へて、「誰が家にか」より又別に替へて謡ふべし。

○「怖しや月もこぶかき」此處は懸て謡ふべし。

○「迚もはや穂に出初めし」此處は確かりと謡ひ「氣色にもしろしめさるべし」より强みに謡ふべし。

○「鬼一口の雨の夜に」此地は確かりと謡ふべし「我身の上に」より替へて謡ひ出すべし。

○「一聲の山鳥羽をたゝく」此處は、「羽を」と力を入れ「たゝく」とずかりと謡ふべし。

○「よし足曳の山うばが」此次第は静かに確かり謡ふべし。

○「夫山といつぱ」此處は引立てさらりと謡ふべし。

○「谷深ふして水遠し」此處は「水遠し」と心持を付けて押へて確かりと謡ふべし。

○「けいへんかまくちて」此處は「けい」と下より謡ひ出し「へん」と押して上るなり、茲は少し締めて、「鳥驚かずとも」とり段々静めて謡ふべし。

舞曲、二段

○此曲は總て確かりと謡ふべし、「柳山姥は」より改めて謡ひ出すべし、仕手は茲より立つ。

○「佛法あれば、世法あり煩惱あれば」此處は、「世法あり」にて息繼に謡ふべし。

○「柳は綠」此處はずかりと謡ふべし。

○「扨人間に遊ぶ事」此處より改めて謡ひ出し、「休

む重荷に」より確かりと謡ふべし。
○「又或時は織姫の」此處より替へて段々に運て謡ふべし。
○「世は空蟬の唐衣」此處は前の上端よりは輕くすらりと謡ふべし。
○「足曳の、山廻り」此處は大きくたつぷりと謡ふべし。
○「一樹の蔭一河の流れ」此處は餘りさら〳〵謡はず、調子を少し扣へて乘て謡ふべし。
○「暇申て」此處より乘て謡ふべし。
○「ちりつもつて」此處は「ちり」と確かりと「つもつて」と詰めて「山姥となれる」とすらりと運び「鬼女が有樣」より段々に進て謡ひ「行末も知らず」より段々に靜めて謡ふべし。

通盛

脇、着流僧、二人
○此脇は大口僧にあらざれども位ある僧なれば名乘道行其外總て確かりと謡ふべし。

前仕手
面、朝倉尉、尉髮、熨斗目、水衣肩取る、腰帶、扇、擢掉

連女
面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、釣掉
○一聲にて連を先に立てゝ出、連は釣掉を擔ぎ船の胴の間に乘り、仕手は艫に乘て掉を持ち正面して謡ひ出す、但し船は脇の道行の謠濟て常座へ出す、
○此仕手は重くならぬ樣にさらりと謡ふべし。
○「うきながら心のすこし慰むは」此初同は靜かに濕とりと謡ふべし。
○「笘よりくゞる夜の雨の」此處は「笘より」の「よ」の字へ產み字を出して輕く當り「雨の」と當らずにいきなり中に下げて謡ふべし。

○「音する物は」此處よりさら〳〵と謡ひ「楫音を靜めからろを押へて」仕手掉へ手を掛け少し扣へる心持あり、其具合を謡ふべし「からろ」と強く謡ひ「ら」の字へ出して當り「ろ」と小さくハ子「をさへて」と弱く崩して謡ひ「聽聞せばやと」と下二に謡ふべし。
○「實有難や此經の」此地は濕とりと謡ふべし。
○「龍女變成と聞時は」此地は確かりと謡ふべし。
○「や、諸共に御物語候へ」此處は「仰の如く或は討れ」と脇へ向て謡ひ「小宰相の局こそ」と謡ひて不圖心付て連へ向き「や」と謡ふ所なれば輕く「や」と謡ふべし。
○「去程に平家の一門」此處は引立てさらりと謡ふべし。
○「蜑の小船に乘りうつり」此處は「小船に」と小さくクルべし。
○「西はと問へば月の入」此地は濕とりと謡ふべし。
○「涙も共に曇るらん」此處は「涙も共に」と句讀に謡ひ「曇るらん」と締めて謡ひ「乳母なく〳〵」より運び「御衣の袖に」より進て「老人も同じ」より靜めて謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手
面、中將、黑垂、梨子打、白鉢卷、唐織單法衾、大口、腰帶、扇、太刀
○後仕手は出端にて出、內へ入り脇へ向き合掌して謡ふ。
○「今者已滿足」此處は確かりと謡ふべし。
○「ふしぎやなさもなまめける」此處は懸て謡ふべ

し。

○「今は何をかつゝむべき」此處は引立てすらりと謳ふべし。

居曲

○此曲は餘り重くならぬ樣靜かにさらりと謳ふべし、「名殘をしみのおさかづき」より改めて謳ふべし。

○「數行虞氏が淚も」此處は少し張て謳ひ「他人より猶はづかしや」と少し緩めて謳ふべし。

○「岡部の六彌太」此處は替へてすらりと謳ひ「忠澄と組て討れぬと聞ゆ」茲は「聞ゆ」と締め「天晴通盛も」と改めて少し緩めて謳ふべし。

○「すはあれを見よ能き敵に」此處は「能き敵に」と出して確かりと謳ふべし。

○「近江の國の住人に」此地は乘てさらりと謳ふべし。

○「讀誦の聲を聞く時は」此地もさら〳〵と謳ふべし。

檜垣

○此謠は當時は素謠のみにて能には演ぜざるに付裝束、面、型等は記さず。

○脇、名乘は確かりと謳ふべし。

○「南西は海雲漫々として」此サシは景色を謳ふ所なれば其心して謳ふべし。

○「三年が間は居住つかまつつて候」此處は「居住つか」と强みに、「ま」の字より崩して弱めて謳ふべし。

○「かげ白河の水くめば」此處は押へて靜かに濕とりと老女の位を謳ふべし。

○「爰は所も白河の」此處は少し調子を引き上げて謳ひ、「値遇を運ぶ」より替へて謳ふべし。

○「年ふれば我黑髮も白河の」此處は中聲にてすらりと謳ふべし。

○「そもみつ輪くむと申は」此初同は濕とりと淋しく謳ふべし。

○「老てかゞめる姿をば」此處は「老て」と謳ひて切り切らずに謳ひ「みつ輪くむと」と句切て「申なり」と締めて謳ひ出し打切に謳ふべし。

○「其しるしをも」此處より改めて謳ひ出すべし。

○「扨は古の檜垣の女」此脇は確かりす謳ひ、「ふしぎや早く」の待謠も寬たりと謳とべし。

○「あら有難の」此處の句の終りの引きは張て謳はず。

○「誰か生死の」此處の廻は大きく廻して謳ふべし。

○「ふしぎやな聲を聞ば」此處は少し懸て謳ふべし。

○「老の姿ぞ恥かしき」此處は句の終りを中に下げて謳ふべし。

○「荒痛はしの御有樣やな」此處は中聲を押へて謳ひ、「はや〳〵うかひ給へ」此處は少し懸てすらりと謳ふべし。

○「其水湯となつて」此處は强みに謳ひ「隙もなけれども」と弱めて謳ふべし。

○曲も濕とりと謳ふべし。

○「實や有し世を」此處より改めて謳ふべし。

○「何とか白拍子」此處は「何とか」と寄せて謳ふべし。

○「よし〳〵夫とても」此處より改めて謳ふべし。

○「あさましながら」此處は下より出さず押へて上より謳ふべし。

○「むかしにかへれ白河の波」此處より乘て謳ふべし。

○「水のあはれを知る故に」此處は乘を外して謡ふべし。

○「はこぶあしたづの」此處より以下靜かに濕とりと謡ふべし。

富士太鼓

脇、大臣烏帽子、狩衣、大口

○脇名乘其外總て句讀の息繼を寛たりと確かりさらりと謡ふべし。

仕手

面、曲見、鬘、鬘帶、箔、腰卷箔、腰帶、水衣肩取る、笠、扇

物着、烏甲、舞衣

子方

面、直面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流

○次第二段にて仕手は扇を持ち笠を冠り子方を先に立て出、橋掛りにて向合ひ謡ふ。

○「ねられぬ儘に思ひ立つ」此處は餘り重くならぬ樣濕とりと謡ひ、「月落かゝる山城も」より替へて謡ふべし。

○「富士がゆかりと申は」此處は仕手、「如何に案内申候」と謡ひて案内を乞ひ、狂言との掛合濟み、舞臺へ入る時脇より謡ひ懸ける。

○「何と富士は討れたると候や」此處は懸て謡ふべし。

○「されば社思ひ合せし」此處はすらりと謡ふべし。

○「さしも名高き」此初同は引立てすらりと謡ひ出し、「富士はなど」の「など」にて靜め、「煙とは」と確かり、「なりぬらん」とすらりと、「今は歎くに」より少しさらりと「思ひ子を」と少し靜め、「見るからにいとゞ猶」と少しずかりと「すむ涙は」より段々に靜めて謡ふべし。

○「今迄は行へもしらぬ」此處は「是を見て心を慰め候へ」と脇、舞衣を仕手へ渡す、仕手は受け取て正面下に居て謡ひ出すなり、茲は口說なり。

○口說の謡ひ樣常の通り。

○「誠にしるき烏甲の」此處は仕手舞衣を見る型あり心持を付けて謡ひ、「痛はしや」より替へてさら〳〵と謡ひ、「其面影は」と舞衣を見る型あり茲も心持を付けて謡ひ「身にそへど」と確かりと謡ふべし。

○「乘てよりかく有べきと」此地は靜かに謡ひ出し「神ならぬ身を」より替へて謡ひ、「歎くぞ」のヤヲの間を引かずに謡ふべし、茲にて物着となり長絹烏甲を着け作物を見て謡ひ出すなり、此處より謡ひ樣替るなり。

○「夫の敵よいざうたふ」此處は「いざ」と出して謡ふべし。

○「いざやねらはん諸共に」此處も「諸共に」と出して謡ふべし。

○「よするや時の聲立て」此地より一聲なり、乘て謡ふべし。

○「猶も思へば」此處は少し強みに謡ひ「ふじが幽靈」より少しさらりと謡ひ、「よしなの恨や」と謡ひて呼吸を取り「もどかしと」と確かりと謡ひ出すべし。

○「持ちたるばちをば」此處は「劒と定め」と少し強みに謡ふべし。

○「四方へばつと」此處は「ばつと」と強みに謡ひ「散るかと見えて」と柔かに謡ふべし。

○「太鼓の役は」此處は彈て謡ひ出し、「本より聞ゆる」の「る」の廻しを消して息繼にし「名の下むなしからず」と謡ひ少し呼吸を取り「たぐひ

なや」と謡ひ出すべし。

○「修羅の太鼓は」此處はさらりと謡ひ「泰平樂を撃うよ」とたつぷりと立派に謡ふべし。

○「うれしや今社は」此處は替へて引立て謡ひ出し、「うたれて音をや」と少し静め、「我には」とたつぷりと謡ひ「は」の字を浮かして抜き「はるゝ」と具合を付けて謡ひ、「涙こそ上なかりけれ」と静めずに謡ふべし。

○「是迄なりや人々よ」此處は静かに謡ひ出し「亂れ髪」より運で謡ひ「うき人の」と入グリに謡ひ「見置てぞ歸りける」より段々に静めて謡ふべし。

小鹽

素袍脇、三人

○脇次第名乘其外さら〳〵と謡ふべし。

○「今を盛とゆふ花の」此處はすらりと謡ひ出し「神もまじはる」より替へて謡ふべし。

前仕手

面、三光尉、尉髪、熨斗目、水衣 肩取る、腰帶、櫻の枝

○仕手は一聲にて櫻の枝を擔ぎ出、内へ入り常座に立て謡ふ。

○此仕手は品よくさら〳〵と謡ふべし。

○「をかしと社は」此初同は少し確かりと謡ふべし。

○「都邊はなべて錦と」此地はさらりと謡ひ「實や大原や」より替へて謡ふべし。

○「名殘をしほの山深み」此地は少し寛たりと謡ひ「語るも昔男」とずかりと「哀ふりぬる」と少し緩めて謡ふべし。

○論議はさら〳〵と謡ふべし。

○「天も花にや」此處より引立てすらりと謡ひ「かげらふ」と入グリに謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、中將、初冠、縒、色鉢卷、箔、單狩衣、指貫、込大口、腰帶、扇

○後仕手は一聲にて出、内へ入り常座にて開き謡ふ。

○後仕手は若かくさら〳〵と謡ふべし。

○「ふしぎやな今迄は」此處は懸て謡ふべし。

○「けふこずはあすは雪とぞ」此地は段々にすらりと謡ふべし。

舞曲

○此曲はさらりと謡ふべし。

○「又はから衣」此處より替へて謡ひ「行へは」と入グリに謡ふべし。

序の舞、三段

○「山風吹きみだれ」此地は陽氣にさら〳〵と謡ひ「散まよふ」と少し静めて謡ひ「櫻に結べる」より引立て謡ふべし。

芦刈

素袍脇、三人

○脇次第名乘共さらりと謡ふべし。

○「よど船や」此處はすらりと謡ひ出し「なほ行末は渡邊や」より替へて謡ひ出しさらりと謡ふべし。

連女

面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、扇

○「實や家貧にしては」此處は濕とりさらりと謡ふべし。

仕手

面、直面、放髪、段熨斗目、水衣着取る、大口、腰帯、扇、笠

○一聲にて仕手笠を冠り芦を擔ぎ出、一の松にて開き諷ふ。

○此一聲は位早し、靜かなる一聲は松風、早き一聲は芦刈なりと昔より云ひ習はせり。

○「鹽たるゝ我身の方はつれなくて」此地は餘り重く諷はずすらりと諷ふべし「月のしたあし」茲は押へて押し上て諷ふべし。

○「我も昔は」此處は引立てたつぷりと諷ひ出し「も」の字へ出して輕く當り「昔は」と浮かして中に落して諷ひ、「よしとて」と强みに輕く「召れ候へ」と弱めて崩して諷ふべし。

○「あしといふ」此處は「と」の字へ出して輕く當るべし。

○「むつかしや難波の浦の」此處は初同よりさらりと諷ふべし。

○「芦をとりはこびて、此市に出る」此處はまたぐ間なり。

○「あら何ともなや」此處は輕く諷ひ出し「忝くも仁德天皇」と少し確かり諷ふべし。

○「あれ御覽ぜよみつのはまに」此處より替へて諷ひ出し「名にしおふ難波津の」とさらりと諷ふべし。

○「名にしおふ難波津の」此處より「つれ〳〵もなき心面白や」迄を笠の段と云ふ。

○「目の前に見えたる有樣」此處の「有樣」の「ま」の廻しを小さく廻し「あれ御覽ぜよ」と具合を付けて諷ふべし。

○「面白や心あらん」此處は少し緩めて輕く諷ひ「難波わたりの」とたつぷりと「つれ立て」と彈て諷ひ出し「海士の小船なるらん」と輕くすらりと諷ふべし。

○「雨に着る」此處は引立てすらりと諷ひ出し。「難波津の春なれや」より剛吟に諷ひ、「難波女の」より乘て諷ふべし。

○「古簾」此處は「だ」の字の引きを引て跡へ當り當てゝから又少し引て「れ」へ移るべし。

○「さのみは何をかつゝみ井の」此地は濕とりと諷ひ出し「押明て出ながら」とずかりと「面なの我姿や」と心持を付けて諷ひ「三年の過しは」より替へて諷ふべし。

舞曲

○此曲は少しさらりと諷ふべし。「然れば目に見えぬ」より改めて諷ひ出すべし。

○「今は恨も波の上」此處は引立てすらりと諷ふべし。

立拜掛り男舞

是界

前仕手

面、直面、放髪、頭巾、篠掛、厚板、大口、水衣、腰帯、小刀、珠數、扇

○前仕手は次第にて出、内へ入り大小へ向き諷ふ。

○次第名乘共さら〳〵と輕く諷ふべし。

○「名にしおふ豐芦原の國津神」此道行は懸てさらりと諷ひ出し「そなたも知るく」より替へて諷ふべし。

○「山の姿杉の木立」此處は「山の姿」と扱て諷ふべし。

○「螳螂が斧とかや猿猴が月に」此處は取て强みに

○「浮寢わする〻難波江の」此地は祝言なれば引立てさら〳〵と諷ふべし。

少し懸て謡ひ出し、「猿猴が月に」と句讀に謡ひ少し呼吸を取て「あひ同じ」と謡ひ「かくは知れども」より替へて謡ひ出し、「便を」と入グリに謡ふべし、

○「夫明王の誓約」此地は高くさらりと謡ふべし。

居曲

○此曲は静かにさらりと謡ふべし、「今此事を歎かずば」より替へて謡ひ出し、「行者の床を」と入グリに謡ふべし。

○「かくては時刻うつりなん」此地より位を替へて強く、「南につゞく」より又替へて位急に進て謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

脇、大口僧、三人

○「勅を受け」此脇は位を付けて確かりと謡ふべし。

○「梢の嵐吹しをり」此地は締めて寛たりと確かり謡ふべし。

後仕手

面、大癋見、赤頭、色鉢巻、大頭巾、厚板、狩衣、半切、腰帶、羽團扇、

○後仕手は大癋にて羽團扇を持ち出、内へ入り常座にて開き謡ふ。

○後仕手は總てずかりと謡ひ出し締めて寛たりと謡ふべし。

○「ふしぎや雲の、うちよりも」此地は乗て確かりと謡ひ出し、「天然動きなき」より段々進て謡ふべし。

○「聽我說者得大智惠」此處は脇、仕手を珠數にて打ち直に謡ひ出す所なり、此處は位急にずかりと謡ふべし、但し茲は乗を外して謡ふべし。

○「其時御聲のしたよりも」此地は乗てさら〳〵と謡ふべし。

○「明王諸天は扨おきぬ」此處は少し静めて謡ふべし。

○「南に男山」此處より段々進て謡ひ「姿は雲路に」より段々静めて謡ふべし。

芭蕉

脇、大口僧、一人

○脇の名乗は確かりと句讀を寛たり謡ふべし。

○「夕部の空もほの〳〵と」此處は確かりと淋しき所を謡ふべし、茲は一種の待謠の如き所なれば乗を付けずに濕とりと謡ふべし。

前仕手

面、曲見、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、珠數、木の葉

○前仕手は次第にて右に珠數、左に木の葉を持ち出、内へ入り大小へ向き謡ふ。

○「芭蕉に落て松の聲」此處は調子を扣へて濕とりと謡ふべし。

○「風破窓をいて燈消やすく」此處は次第よりは少し調子を引立て静かに濕とりと謡ひ、「秋の夜すがら」よりさらりと謡ふべし。

○「風破窓をいて」此處は「破窓を射て」なり「破窓於て」に非らず。

○「見ぬ色の深きや法の」此處は押へて濕とりと謡ふべし。

○「迚も姿を見え參らすれば」此處は中聲を押へて少し強みに謡ふべし。

○「惜まじな月も假寢の」此初同は静かに濕とりと謡ふべし。

○「燈を背けて向ふ月のもと」此地は初同よりは少し引立てさらりと謡ひ「されば柳はみどり」より替へて謡ふべし。

○論議も静かに濕とりと謡ひ「恥かしやかへるさの」より仕手立て型あり、茲より少し引立て具合を付けて謡ふべし。

○「思へば鐘の聲」此處は仕手右へ廻りかゝり鐘の聲を聞て心持あり、具合を付けて確かりと謡ひ「諸行無情と」とすらりと謡ふべし、此處にて仕手は鐘の聲を聞き入て静かに中入するなり。

後仕手

面、曲見、長絹、色大口、腰帶、扇

○後仕手は扇を持ち一聲にて出、内へ入り常座にて開き謡ふ。

○後仕手は前仕手よりも淋しき中に少し浮やかなる所を謡ふべし。

○「荒物すゞの」此處の「の」字の引は浮かさずに押へて謡ふべし、

○「有難や妙なる法の敎には」此處は濕とりと謡ひ「かばかりは」より替へて謡ふべし。

○「庭のもぜ」此處は地謠を離れて謡ひ少し呼吸を取り「山蔭のみぞ」と謡ひ出すべし。

○「いや人とは恥かしや」此處は取て謡ひ出し少しすらりと謡ひ「誠は我は非情の精」と確かりと謡ひ「芭蕉の女と」と乘て謡ふべし。

○「女とて」此處は輕く地へ渡すべし。

○「さなきだに」此處は少し懸てすらりと謡ひ「花ぞめならぬに」と少しずかりと。「袖の」と確かりと止め少し呼吸を取て「ほころびも」と謡ひて切り切らずに謡ひ「はづかしや」と心持を付けて謡ふべし。

○クリ地は調子を扣へて寛たりと謡ふべし。

舞曲

○此曲は静かに濕とりと謡ふべし。

○「水に近き」此處はずかりと謡ひ出し、「樓臺

は」とこかずに確かりと謡ひ、「實に目の前に」と輕く「そよかゝる秋と」より段々に静めて打切に謡ふべし、但し茲は素謠には打切に謡はずと雖も其心持にて少し静めて謡ふべし。

○「身は古寺の軒の草」此處より改めて謡ひ出し「忍ぶとすれどいにしへの」と心持を付けて静め、「もろくも落る」と具合を付けて謡ふべし。

○「よしや思へば定めなき」此處は押へてすらりと謡ひ出し、「唯月ひとり伴ひ」より替へて謡ひ「起ふし」と入グリに謡ふべし。

序の舞

○「是も芭蕉の葉袖をかへし」此處は確かりと謡ふべし。

○「返す袂も芭蕉のあふぎの」此處の「の」の廻しを消して息繼に謡ひ「かぜ」と引かずに切り呼吸を取り「ばらゝと」とたつぷりと謡ひ以下濕とりと謡ふべし。

○「芭蕉は破れて、のこりけり」此處の謡ひ止めを張らずに押へて謡ふべし。

通小町

脇、着流僧、一人

○此脇は通盛と同樣に大口にあらざれども位を取て確かりと謡ふべし。

連女

面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流

○連は次第にて出、内へ入り大小に向き謡ふ。

○此次第は位静かなる次第なれば謠も濕とりと謡ふべし。

○是は市原野のあたりに住」此處はすらりと謡ふべし。

○「花の名にある櫻麻の」此地は重くならぬ樣にす

らりと諷ひ出し静かにさらりと諷ふべし。
○「恥かしやおのが名を」此處は少し間を置て諷ひ出し、濕とりと諷ふべし、此地にて連は後見座へ寇ぐ。
○「かゝる不思儀なる」此處はさらりと諷ひ出し「爰に思ひあはする事の候」より少し替へて諷ふべし。
○「秋風の吹くにつけても」此處はさらりと諷ひ「あなめ〳〵」と少し静め、「小野とは云はじ薄生けりとあり」とさらりと前の句へ付く樣に諷ひ、「是小野の小町の歌なり」と替へて諷ふべし。
○「此草庵を立出て」此處は静かに寛たりと諷ひ「座具をのべ」より替へて静めて諷ふべし。
○一聲にて幕上るを見て連は後見座より立て常座へ行き脇へ向き「うれしの御僧の弔ひやな」と諷ひ掛けるなり、此處は引立てすらりと諷ふべし。

仕手

面、痩男、黒頭、白鉢巻、厚板、色大口。水衣、腰帶、扇、かつぎ、熨斗目、笠

○仕手は一聲にて扇を押し小袖をかつぎ出、一の松にて踏み止め諷ふ。
○「いや御僧」此處は締めて確かりと諷ふべし。
○「猶も其身は迷ふとも」此地は寛たりと柔かに諷ふべし。
○「つゐめど我も穂に出て」此處は返しの「我も」にて確かりと句讀に諷ひ、息を繼て「穂に出て」と諷ひ出すべし、此處は最初の「穂に出て」にて小袖を後へ脱ぎ捨て、返しにて扇を開き「尾花招かば」と連へ向き二つ招ぐなり。
○「さらば煩惱の」此處は「さらば」と切て息を繼ぎ「煩惱の」と諷ひ出すべし。
○「犬となつて」此處は「なつて」と廻して確かりと切り呼吸を取り「うたるゝと」と彈て諷ひ出し「はなれじ」と心持を付けて力を入れ少し懸て確かりと諷ふべし。
○「うたるゝとはなれじ」此處は仕手「なつて」と諷ひて打合せする型あり、故に少し間を置て「うたるゝと」と諷ひ出すべし。
○「袂を取て」此處は左の手にて連の袖を取り、「引とむる」と引く心故、「袂を」とずかりと、「取て」と詰めて力を入れ確かりと諷ひ「引とむる」の「る」の產み字を弱めて地へ渡すべし。
○「本より我は白雲の」此處は引立てすらりと諷ふべし。
○「誠と思ひ」此處は懸て諷ふべし。
○「山城の木幡の里に」此地は寛たりと諷ふべし。
○「笠にみの」此處は少し間を置て諷ひ出すべし。
○「袖を打ち拂ひ」此處は左の袖を出して見る型あり、少し間を置て諷ひ出し「袖を」と扱て緩めて確かりと諷ひ「打拂ひ」と具合を付けて諷ふべし。
○「目に見えぬ」此處は右受け見廻す型あり、茲も少し間を置て諷ひ出すべし。
○「身獨にふる涙の雨か」此處は少しゆるめ開き樣に笠を兩手にて持ちかざす型あり、「身獨にふる」と懸て諷ひ出し、「涙の雨か」と心持を付けて諷ふべし、此處にイロへあり故に素謠にても少し間を置き、「あら暗の夜や」と諷ふべし。
○「月をば待らん」此處は「ら」の字へ出して當てゝ諷ふべし。
○「われをば待たじ、空ごとや」此處は強みに懸て諷ふべし。
○「我ためならば」此處は前ゝ替へて弱く乘てすら

りと諷ひ出すべし。

○「夜もあけよたゞ」此處は懸て諷ひ出し、「たゞ」の廻しを消して息を繼ぎ呼吸を取て「獨り寢ならば」と乘を外してずかりと諷ひ出し、確かりと止めて又呼吸を取り「つらからじ」と具合を付けて諷ふべし。

○「か樣に心を盡しつくし」此處は調子を少し控へて靜かに寛たりと諷ふべし。

○「姿は如何に」此處は呼吸を取り「姿は」とずかりと諷ひ「如何に」と確かりと諷ふべし。

○「藤ばかま」此處は「かま」と寄せて諷ふべし。

○「待らんものを」此處は少し間を置て諷ひ出し、乘を外してずかりと諷ふべし、

○「くれな井のかりぎぬの」此處はすらりと諷ひ出し「引つくろひ」と靜めて打切に諷ひ、「飲酒は如何に」より改めて諷ひ出し、靜かに寛たりと諷ふべし。

天皷

脇、バサラ、側次大臣、一人

○脇、名乘語り其外總て句讀を確かりと切り、寛たりと諷ふべし。

前仕手

面、小尉、尉髮、小格子、水衣、腰帶、扇

○前仕手は扇を持ち一聲二段にて出、幕を離れ正面踏み止めて諷ふ。

○「露の世に」此一聲は靜かに濕とりと諷ふべし。

○「傳へ聞孔子は鯉魚に別れて」此サシも濕とりと諷べし。

○「よしさらば思ひ出じと思ひねの」此處は少し調子を張り氣味に押へて確かりと諷ひ「唯何故の浮身の」より替へて諷ひ出し濕とりと諷ふべ

し。

○「いや〳〵是も心得たり」此處は少し間を置て諷ひ出し「重ねてうしなはれん」と少し引立てゝ「よし〳〵夫も」よりさらりと諷ふべし。

○「荒歎くまじや」此處は「まじや」の「じや」より強めて「頓て參り」と強く「候べし」と崩して弱く諷ふべし。

○「いや〳〵左樣の宣旨ならず」此脇の謠一バイに仕手は見合せ舞臺へ入り常座にて正面へ踏み止め「たとひ罪には」と諷ひ出すなり。

○「たとひ罪には」此處は確かりと諷ふべし。

○初同は仕手の位を受けて確かりと諷ふべし。

○「老人が事をば」此處は強みに諷ひ「あるべく」の邊より弱めて崩して諷ふべし。

○クリ地は少し調子を押へて確かりと諷ふべし。

居曲

○此曲は靜かに濕とりと諷ふべし。

○「唯いのちなれや明暮の」此處は「いのちなれや」と諷ひて句切り呼吸を取て「明暮の」と締めて諷ふべし。

○論議は靜かに寛たりと諷ひ「老の歩みも」より締めて確かりと諷ふべし。

○「打てばふしぎや其聲の」此處は心持を付けて諷ひ「心耳を澄す」と確かりと「聲出て」とすらりと「實も親子の」と替へて少し引立て諷ひ「君も哀と」と緩め「龍顏に御涙を」より締めて諷ふべし、「老の歩みも」よりは型も謠も心持多く大切の諷ひ所なれば心して諷ふべし。

○「さらば老人は私宅に歸り候べし」此處にて仕手中入するなり。

○「糸竹呂律の聲々に」此處はさらりと諷ひ、「頃は初秋の空なれば」より替へて諷ひ「水滔々ど

「いて」より又替へて確かり諷ふべし。

後仕手

面、十六、黒頭、白鉢巻、箔、唐織坪折、半切、腰帯、團扇

○後仕手は團扇を持ち一聲二段にて出、内へ入り常座にて開き諷ふ。

○「荒有難の御弔ひやな」此一聲はサシコトの一聲なり、乗て若くさら〳〵と諷ふべし。

○「浮ひ出たる」此處は具合を付けてたつぷりと諷ふべし。

○「不思議やなはや更過る」此處は懸て諷ふべし。

○「打ならす其聲の」此地はさらりと諷ふべし。

樂、五段（太鼓なし）

○「面白や時もげに」此處よりさらりと乗て諷ふべし、「二星の屋かたの前に」此邊より段々に進て、「人間の水は南」よりさらりと進て諷ふべし。

右近

脇、風折

○脇次第名乗共引立てさら〳〵と諷ふべし。

○「雲の行くそなたやしるべ櫻狩」此處はすらりと諷ひ出し、「行へもみゆる梢より」より替へて諷ふべし。

前仕手

面、泣増、鬘、鬘帯、箔、唐織坪折、色大口、腰帯、扇

連女、四五人

面、小面、鬘、鬘帯、箔、唐織着流

○前仕手は一聲にて扇を持ち出、先づ連二人車の前方の左右に立ち、仕手車に入り、跡の連二人は車の後方の左右に立て諷ひ出す。

○此仕手は前後共さら〳〵と諷ふべし。

○「ひをりせし右近の馬場の」此處はすらりと諷ひ出し、「松も木高き」より替へて諷ふべし。

○「見もせぬ人や花のとも」此地はさらりと諷ふべし。

○「相宿りしてもろ人の」此處にて仕手は車より出て少しゆるめ「榻立て木の本に」にて中へ出、正面に下に居るなり。

○「實や花のもとに」此處より改めて諷ひ出し、「いざ〳〵なれてながめん」と静めて打切に諷ひ、「百千鳥」より又改めて諷ひ出しさらりと諷ふべし、玆にて仕手立て窕ぐ。

○論議はさら〳〵と諷ふべし。

○「車も立や」此處は入グリに諷ふべし。

○「まつことありや有明の」此地はさらりと諷ひ「天照神にては」とずかりと諷ひ「神と夕の空晴て」より替へて引立てすらりと運て諷ふべし、住手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、泣増、黒垂、天冠、色大口、舞衣、腰帯、扇

○後仕手は出端二段にて出、内へ入り堂座にて開き諷ふ。

○達拜掛り中の舞、三段

○「月も照そふ花のそで」此地は乗てさらりと諷ひ、「花に戯れ」より運て諷ひ「糸ざくら」と少し緩めて諷ふべし。

○「治まる都の花ざかり」此處は少し静めて諷ひ返しよりさらりと諷ふべし。

女郎花

脇、着流僧、一人

○脇名乗道行其他何れも寛たりと諷ふべし。
○「又是なる野べに女郎花の」此處より替へて諷ふべし。
○「扨も男山麓の野べに來て見れば」此處はすらりと諷ふべし。
○「色をかざり露を含んで」此處は「含んで」と當らずにいきなり中に下げて諷ひ、「虫の音迄も」と押へて張て諷ふべし。

前仕手

面、朝倉尉、尉髮、熨斗目、水衣、腰帶、扇

○呼び掛け
○「ましてや是は男山」此處はすらりと諷ふべし。
○「荒心なの旅人やな」此處は「心なの」と强みに諷ひ「旅人やな」と弱めて崩して諷ふべし。
○「をしみ申こそ理りなれ」此處は取て諷ひ出し「此野べの花守にて候」と替へて諷ふべし。
○「折とらばたぶさにけがる」此處は阿漕の「伊勢の海」の諷ひ方と同樣なり。
○「あゝ詭しくも所の古歌をば」此處は少し懸て諷ひ「女郎花うしと見つゝぞ」と外して諷ひ出すべし、和歌の諷ひ樣は前の「折とらば」の所と同樣なり。
○「なまめき立る女郎花」此初同は濕とりと少しさらりめに諷ひ「彼邯鄲の」より替へて諷ふべし。
○「聞しにこえて貴く」此處は仕手の詞に直ぐ付けず少し間を置て諷ひ出すべし。
○「久方の月のかつらの男山」此地はさらりと諷ふべし。
○「岩松そばだつて」此處より替へてすらりと諷ひ「三千世界」と二つともカンに諷ふべし。
○「なふ〳〵女郎花と申事は」此處は「なふ〳〵」と「女郎花」とを分けて諷ふべし。

○「荒何共なや」此處は輕く諷ひ出し、「是成は男塚」と替へて心持を付けて諷ひ、「又こなたなるは女塚」と又具合を替へて諷ひ、「此男塚女塚について」と又替へて、「是は夫婦の人の」と脇へ向くなり、此處は具合を替へて外して諷ふべし。
○「小野の頼風と申し人」此處は寛たりと諷ひ出し「頼風」と出して諷ふべし。
○「恥かしやいにしへを」此處は濕とりと諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。
○「一夜臥」此待謠は寛たりと諷ひ「南無幽靈」より替へて諷ふべし。

後仕手

面、若男、黑垂、風黑折、厚板、長絹、大口、腰帶、扇

連女

小面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流

○後仕手は扇を持ち出端一段半で連を先に立てゝ出、連は内へ入り中に立ち、仕手は一の松にて開き諷ふ。
○後仕手は乘てさら〳〵と諷ふべし。
○「あふ廣野人稀なり」此處は懸て諷ひ出し、「我古墳ならで」と込めて諷ふべし。
○「かへらばつれよ」此處は「かへらば」と「つれよ」とを別になる樣に分けて諷ふべし。
○「消にしたまの」此處より乘てすらりと諷ひ出し段々に運て「御法やな」と確かり諷ふべし。
○「影の如くに亡魂の」此處は懸て諷ふべし。
○「わらはゝ都に住し者」此處は引立てさら〳〵と諷ふべし。
○「驚き騷ぎ行みれば」此處は「行きみれば」とずかりと諷ひ少し間を置き「あえなき死骸ばかり

なり」と諷ひ出すべし。

○「賴風心に思ふ樣」此處は少し確かりと諷ひ出し「扨は我妻の」よりさらりと諷ひ「草の袂も我袖も」と押へて張り輕く諷ひ「此花恨みたる」より替へて諷ひ「夫のよれば靡きのき」と强みに懸てずかりと諷ひ息繼にして「又立のけば」と込て諷ひ出し「もとのごとし」とすらりと諷ふべし。

○「爰によつて貫之も」此處は輕くさらりと諷ふべし。

舞曲

○此曲はさらりと諷ふべし。

○「つゝいて此河に身を投て」此處は引立て諷ふべし。

○「邪淫の惡鬼は身を責て」此地は乘てすらりと諷ひ出し段々に進て諷ふべし。

○「つるぎは身を通し」此處は「とつし」と詰めて諷ふべし。

○「盤石は骨を碎く」此處は「碎く」と寄せて强みにずかりと諷ひ「たわむまで」の「で」の引きより弱め「花の一時を」より乘を外して替へて諷ふべし。

關寺小町

脇、着流僧、四人

○脇次第名乘通行其外總て位を取て確かりと諷ふべし。

仕手

面、小町、姥鬘、鬘帶、箔、腰卷箔、腰帶、唐織坪折、扇、杖

○大小座着仕手作物に入りて出、引廻しを卸して諷ひ出す。

○「あしたに一鉢を得されども」此サシは押へて確かりと諷ふべし。

○「人更に若き事なし」此處は下二に諷ひ「終には老の」より中に直して諷ふべし。

○初同は濕とりと諷ふべし。

○「世中物うかりしに」此處は「物う」と强めて「かりしに」と弱めて諷ふべし。

○「古ことのまた思はるゝ」此處より乘て諷ふべし。

○「うつらふ物は世中の」此地は初同より少しさらりと諷ふべし。

○「さそふ水あらば」と少しすらりと諷ひ「今も」と確かりと諷ひ止め「いなむとぞ」と靜めて諷ふべし。

居曲

○此曲は靜かに濕とりと諷ひ「戀しの昔や」と具合を付けて諷ひ、「哀げに」より改めて諷ひ出すべし。

○「こや玉を敷し」此處は「こや」と切り「玉を敷し」と諷ふべし。

○「逢坂の」此處はカンに諷ひ「是生」と之もカンに諷ふべし。

○「つよからずつよからぬは」此處は四ッ地の間なり。

○「織女の織絲竹の手向草」此地は少しさらりと諷ひ、「迚も今宵は七夕の」より替へて諷ふべし。

子方

面、直面、放髮、金元結、箔、長絹、大口、腰帶、扇

○「荒面白の只今の童舞の袖やな」此處は强みに諷ふべし。

○「七返しにてや」此處は「七返しにてや」と强み

に「有るべき」と弱く謡ふべし。

○序の舞、休息あり。

○「立舞袂は」此處はカンに謡ふべし。

○「はづかしの杜の」此處は乗を外して謡ふべし。

二人靜

○此曲は護法、千引と共に「品により仕舞にのみ相勤め申候」とあり、故に絶體の廢曲にあらざれば茲に記す事とせり。

○脇名乗其外總て句讀の息繼を寛たりと謡ひはつきりと謡ふべし。

○「見渡せば、松の葉白き」此連は引立てさらりと謡ふべし。

○「木のめ春雨ふるとても」此處はすらりと謡ひ出し「春たつと云ばかりにや」より替へて謡ふべし。

○前仕手、呼び掛け

○仕手は前後共品よく濕とりと謡ふべし。

○「夕風まよふあだ雲の」此地は濕とりと謡ふべし、能の時は仕手此地にて中入するなり。

○「何まことしからずとや」此處より前と全く替へて仕手の位に謡ふべし。

○「櫻は花にあらはるゝ物を」此處は引立てすらりと謡ふべし。

○「河よどちかき山蔭の」此處より本の連の位に直して謡ふべし。

○「海路心に任せず難風吹て」此處は「難風」と確かり出して謡ふべし。

舞曲、二段曲

○此曲は靜かにさらりと謡ふべし。

○「誠に一榮一らく」此處より替へて謡ひ出し「去るにても三芳野の」と又替へて謡ふべし。

○「もろこしの佐國は花に身を捨て」此處は引立てすらりと謡ふべし。

○「それのみならずうかりしは」此地はさらりと謡ふべし。

○「思ひ返せば古の」此處より乗てさらりと謡ふべし。

○「物部の」此處は乗を外してずかりと謡ふべし。

○「物ごとに浮世の習ひなればと」此處は引立てすらりと謡ひ「雪にふきなす」より替へて謡ふべし。

三輪

脇、着流僧、一人

○此脇は大口僧にあらざれども位ある僧なれば確かりと謡ふべし。

前仕手

面、曲見、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、珠數、木の葉

○前仕手は次第にて右に珠數、左に檜の葉を持ち出、内へ入り大小へ向き謡ふ。

○「三輪の山本道もなし」此次第は濕とりと謡ふべし。

○地次第にて正面へ向き「實や老少」とサシを謡ひ出す事常の通り。

○「山頭には寄る孤輪の月を戴き」此處は寛たりと謡ひ「山田もる僧都の身こそ」より替へてさらりと謡ふべし。

○「秋寒き窓の内」此地は三番目物の如く靜かに濕とりと謡ひ「かどはむぐらや」と句讀に謡ひ「とぢつらん」と靜めて具合を付けて謡ひ「下樋の水音も」より替へて謡ふべし。

○此曲は三番目に使ふ事あり、脇能にする時は總

て位少しさらりとなると知るべし。

○「訪らひきませ」此處はたつぷりと諷ふべし。

○「杉立る門をしるしにて」此處は濕とりと諷ふべし、仕手は此地にて作物へ中入するなり。

○「此草庵を立出て」此待謠は調子を扣へて寛たりと諷ふべし。

○「杉村ばかりたつなる」此處より替へて諷ふべし。

○「三つの輪は清く清きぞ」此處は阿漕の「伊勢の海」と云ふ所と諷ひ方同樣なり。

後仕手

面、泣增、金風折、鬘帶、長絹、色大口、腰帶、扇、幣

○後仕手は作物の内床机に掛りコイ合聞て諷ひ出す。

○後仕手は寛たりと乘てさら〳〵と諷ふべし。

○「女姿と三輪の神」此處は初同よりさらりと諷ふべし。

○「ちはや掛帶引かへて」此處にて仕手作物の後より出るなり。

○「裳の上にかけ」此處はずりと諷ひ「御影あらたに」と替へて寛たりと諷ふべし。

舞曲

○此曲は靜かにさらりと諷ひ「唯同じくは」より改めて諷ひ出すべし。

○「契りし人の姿か、其糸の三わげ」此處はまたぐ間なり。

○論議は靜かに寛たりと諷ふべし。

神樂

○「神は跡なく入給へば」此地はさらりと諷ふべし。

○「八百萬の神達」此處はさらりと諷ひ「神樂を奏して」より乘る心に諷ふべし。

○「天照大神」此處は太鼓の頭を聞て諷ひ出し、「まだとこ闇の」より乘を外してさらりと諷ふべし。

○「面白やと神の御聲の」此處は乘て諷ふべし。

○「思へば伊勢と三輪の神」此處よりはつきりと諷ふべし。

安宅

緣、直垂、烏帽子、上下

○脇の名乘はさらりとはつきり諷ふべし。

仕手

面、直面、放髮、頭巾、篠掛、厚板、大口、水衣、腰帶、少刀、珠數、扇

子方

面、直面、放髮、頭巾、篠掛、厚板、大口、水衣、腰帶、少刀、珠數、扇

連、十人

面、直面、放髮、頭巾、篠掛、厚板、大口、水衣、腰帶、少刀、珠數、扇

笛、經、金剛杖、笠

○次第にて子方、仕手、仕手連と一同出、内へ入り向合ひ諷ふ。

○此次第は懸て勢よく諷ふべし。

○「篠懸の、露けき」此處は必ず切て句讀に諷ふべし。

○「主從以上十二人」此處より上歌迄段々に詰めて諷ふべし、仕手は「いまだならはぬ」より付けて諷ふべし。

○「時しも頃は」此處は少し寛たりと諷ひ出し、返しより少し運て、「是や此行くも歸るも」とずかりと「別れては」と靜め「知るも知らぬも」よ

りさら〳〵と運て「浪路遙に行舟の」より乘て寛たりと諷ふべし。

○「氣比の海」此處より引立て段々に懸て諷ひ、「なびく嵐の」より烈しく進て諷ふべし。

○「言語同斷、是はゆゝしき御大事にて候」此處は懸て諷ひ「是は誠に一大事の」より替へてはつきりと諷ふべし。

○「我等が心中には」此連は懸てずかりと諷ふべし。

○「畏て候」此處は取て諷ひ「我等を始め」より替へてはつきりと諷ふべし。

○「實や紅は園生に植ても隱なし」此處は「頓て御立あらふずるにて候」と諷ひ子方、仕手連一同立て子方を見て諷ひ出す所なれば少し間を置て諷ひ出し、前と替へて立派にすらりと諷ふべし。

○「よろ〳〵として歩み給ふ」此地は調子を押へて濕とりと諷ふべし。

○「我等より跡に引さがつて御通り候へ」此處は取て確かりと諷ひ呼吸を取り「皆々から渡り候へ」と替へてずかりと諷ふべし。

○「承り候、是は南都東大寺」此處も取て輕く落付て諷ひ「先勸に御入り候へ」と替へて立派に諷ふべし。

○「夫は何故御留候ぞ」此處は少し懸て諷ふべし。

○「委細承り候」此處は落付て諷ふべし。

○「其きつたる山伏が判官殿か」此處は少し間を置て諷ひ出し強く懸てずかりと諷ふべし。

○「扨ては我等をも是にて」此處は落付て諷ふべし。

○「言語道斷」此處は懸て諷ひ「皆々近ふ渡り候へ」と替へて懸て諷ふべし。

○「いて〳〵最後の」此處は少し間を置て諷ひ出し

前と替へて立派に諷ふべし。

○「疑ひあるべからず」此處は「ある」より出してずかりと諷ふべし。

○「唵阿毘羅吽欠と」此處は少し緩めて諷ひ出し「珠數さら〳〵と」よりずかりと諷ふべし。

○「元來勸進帳もあらばこそ」此處は具合を付けて諷ひ「笈のなかより」より替へてはつきりと諷ふべし。

○勸進帳。

○「高らかにこそ」此處は引立てすらりと諷ひ、「夫れ」と靜めて切り「つら〳〵」と呼吸を取て諷ふべし。

○「おもん見れば」此處は押へて確かりと「長夜の」と大きく立派に「ながき」とずかりと「夢」とずかりと落し「驚かすべき」と懸てずかりと「人もなし」と靜めて打切に諷ひ「爰に中頃」と改めて諷ひ出し「御名をば」より段々に運び「涕泣眼に」とすらりと「荒く」と出してはつきりと「涙玉を貫く」と強くずかりと諷ひ「思ひを」と替へて靜め「善路に」より又替へて立派に張てたつぷりと「建立す」と確かりと諷ふべし、能や一調の時には茲にも替の打切あり「斯程の靈場の」より替へてずかりと「かなしみて」と具合を付け「一紙半錢の」と替へてすらりと「此世にては」よりずかりと運び「敬て申と」より替へて引立て確かりと「讀上たり」と引かずに諷ひ止むべし。

○「關の人々肝を消し」此處は懸て大きくずかりと諷ふべし。

○「恐をなして通しけり」此地もずかりと諷ひ出し返しも靜めずにずかりと諷ふべし。

○「急て御通り候へ」此處は懸て諷ひ、仕手の「心

得申候」と云ふを聞て、少し間を置き「いかに是成強力」と謡ひ出すべし。

○「すは我君をあやしむるは」此處は懸て謡ふべし。

○「あゝ暫く」此處は懸て大きく謡ひ「あはてゝ事を仕損ずな」と替へて落付て「やあの強力は何とて通らぬぞ」より替へて懸て謡ふべし。

○「何と人がひとに似たるとは」此處は輕くさらりと謡ふべし。

○「判官殿に似申たる強力めは」此處は立派にはつきりと謡ひ「腹立や日高くは」より改めて謡ひ出し「につくし憎し」と力を入れて確かりと「いで物見せて」より懸て謡ふべし。

○「や、強力をとゞめ」此處は強く謡ふべし、

○「盗人ぞうな」此處は強くずかりと謡ふべし。

○「かたゝは何故に」此地はさら〳〵と謡ひ「いさみかゝれる」より懸て「有様は」より烈しく進で一氣に謡ひ「みえたる」と少し緩めて謡ふべし。

○「さきの闕をば」此處は少し間を置て謡ひ出し落付て謡ひ「如何に申上候」より替へて謡ふべし、

○クリ地は寛たりとさらりめに謡ふべし。

居曲。

○此曲は靜かにさらりと謡ふべし。

○「ことわり給ふ」此處は入グリに謡ふべし。

○「心なくれそくれはどり」此處は懸て立派に謡ふべし。

○「あやしめらるな面々と」、此地はさらりと輕く謡ふべし。

○「面白や山水の」此處は少し靜めてすらりと謡ふべし。

○「落て巖に」此處はずかりと謡ひ「ひゞくこそ」と確かりと謡ふべし。

○「なるは瀧の水」此地は懸てずかりと謡ふべし。

○男舞。三段。

○キリは乘て勇ましくさら〳〵と謡ふべし。

○「のがれたる心地して」此處は普通の走りの如く「の」の字を引て謡はず「のがれ」と寄せて謡ふべし。

東　北

○脇、着流僧、三人、

○脇次第名乘道行其外總て長閑に寛たりと謡ふべし。

前仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、扇、

○前仕手、呼び掛け。

○「是こそ和泉式部の植置し軒端の梅にて候へ」此處は内へ入り常座に立て脇へ向き謡ふ所なり、此前は歩みながらに謡ふ所なれば乘を付けて謡ふべし。

○「年月をふるき軒端の」此初同は重くならぬ樣靜かにさらりと謡ふべし。

○論議は寛たりと謡ふべし。

○「休らうとみえし儘に」此處は輕くすらりと謡ひ「我こそ梅のあるじよと」と引立て謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○「夜もすがら軒端の梅の蔭に居て」此待謠は寛たりと謡ふべし。

後仕手

面、增、鬘、鬘帶、長絹、緋大口、腰帶、扇、

○後仕手は一聲越して出、内へ入り當座にて開き謡ふ。

○「荒有がたの」此處は靜かに濕とりと諷ふべし。
「荒有がたの」の「の」の產み字を張て諷ふべし。
○「門の外」此處は込て諷ふべし。
○「か樣によみし事」此處より替へて諷ふべし。
○「中々の事火宅は出ぬ」此處は取て諷ひ出すべし。
○舞曲。
○此曲は靜かにさらりと諷ふべし。
○「庭には」此處より替へて諷ふべし。
○序の舞、三段、
○「色こそみえね」此地は打上頭に付て寬たりと乘て諷ふべし。
○「是までぞ花は根に」此處は乘を外して中聲にすらりと諷ふべし。
○「火宅とや」此處は入グリに諷ふべし。

錦木

○脇、着流僧、三人、
○脇次第名乘共寬たりと諷ふべし。
○「いづくにも心とめじとゆく雲の」此道行はすらりと諷ひ出し寬たりと諷ふべし「奥はそなたか」より替へて諷ふべし。
○前仕手
面、直面、放髮、段襞斗目、大口、水衣肩取る、腰帶、扇、錦木、
○連女。
面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、
○仕手は扇を挿し錦木を持ち、次第にて連を先に立てゝ出、橋掛りにて向合ひ諷ふ、
○此次第は脇の次第より輕き次第なれば其心得にて諷ふべし。

○「實や流れては妹背の中の」此處はすらりと諷ひ出し輕く諷ふべし。
○「細布の色こそかはれ」此處より替へて諷ふべし、茲にて連より先に内へ入り、仕手は舞臺の中に立つ。
○「千度百夜」此處は入グリに諷ふべし、
○「悔しき賴なりけるぞ」此處は「ぞ」と確かりと止め、少し呼吸を取て返しを諷ひ出すべし。
○「此錦や細布の」此處は「此錦木」と押へて張て諷ふべし。
○「錦木はたてながらこそ」此初同はすらりと諷ひ出し「はたばりもなき身にて」とずかりと「歌物語り」と替へて緩めて諷ひ「實や名のみは」より替へて諷ふべし。
○語りはさら〳〵と諷ひ、「又此山蔭に」より替へて諷ふべし。
○「あふいで〳〵さらば」此處は取て諷ひ出し「こなたへ入らせ給へとて」とすらりと諷ふべし。
○「けふの細道分暮して」此地は輕くさらりと諷ふべし。
○「秋寒げなる夕間暮」此處は少し押へて確かりと諷ふべし。
○「狐すむなる」此處は入グリに諷ふべし。
○「是ぞと云ひ捨て」此處は仕手、脇へ向て進み、直に右へ小廻りする型あり、心持を付けて諷ひ「塚の内にぞ入りにける、夫婦は塚に入にけり」と塚の側にて正へ開き作物へ中入するなり、茲は「入にける」と諷ひて少し呼吸を取り「夫婦は塚に」と諷ひ出すべし、連は後見座へ寃ぎ下に居るなり。
○連は出端にて立ち常座へ出て直に脇へ向き「如何に御僧」と諷ひ出すなり。

後仕手。

面、三ヶ月、黒頭、白鉢巻、厚板、法被、半切、腰帯、扇、錦木、

○後仕手は作物の内にて床机に掛り、出端一段聞て「今こそは」と謡ひ出すなり。

○後仕手は強みにさら〳〵と謡ふべし。

○「顯れ出るを御覽ぜよ」此處にて引廻卸す。

○「ふしぎやなさも古墳と見えつるが」此處は懸て謡ふべし。

○「いで〳〵昔を顯さんと」此處にて仕手作物より出窕ぎ、錦木を持ち常座に立つ。

○「ちよう」「ちよう」此處は仕手の謡ふ所は「ら」の字をはつきりと力を入れて謡ふべし。

○「きりはたりちよう〳〵」此地は具合を付けてさらりと謡ふべし。

○舞曲。

○此曲はさらりと謡ふべし。

○「夜は既に明ければ」此處は仕手東の方を見上げ「すご〳〵と立歸りぬ」と右へ廻る型あり、茲は「明ければ」と息繼に謡ひ「すご〳〵と」と靜めて心持を付けて謡ひ「去る程に」より改めて謡ひ出すべし。

○「荒つれなつれなや」此處は錦木を捨てゝショル型あり、茲は心持を付けて强みに確かりと謡ひ、段々と靜めて謡ふべし。

○「千束になりぬ今社は」此處はずかりと謡ふべし。

○「嬉しやな」此處もずかりと謡ふべし。

○中の舞、三段、

○「舞を舞ひ」此處は打上頭を聞て謡ひ出し、確かりと謡ふべし。

○「織るは細布」此處は乘を外して謡ふべし。

○「とり〳〵様々の」此處は打上頭を聞て謡ひ出しさらりと乘て謡ふべし。

雲林院

○脇、掛素袍、大口、

○脇次第名乘共確かりと謡ふべし。

○「花の新に開くる日初陽潤へり」此處はすらりと謡ふべし。

○「松蔭に煙をかづく尼が崎」此處は靜かに寛たりと謡ひ「咲やこの花」より替へて謡ふべし。

前仕手、

面、笑尉、尉髮、小格子、水衣、腰帯、扇、

○前仕手、呼び掛け。

○仕手は前後共品よく寛たりと謡ふべし。

○「それかあらぬか」此處は乘て謡ひ出し「木のした」とたつぷりと謡ひ「あら」とたつぷりと「心もとなと」と少し運て「ちらしつる」と確かりと謡ふべし。

○「春風は花のあたりをよぎてふけ」此處は阿漕の「伊勢の浦」の所と謡ひ方と同様なり。

○「實や春の夜の一時を」此處より替へてはつきりと謡ひ「折らせ申事は候まじ」と乘て少し懸る氣味に謡ふべし。

○「實枝を惜むは又春のため」此初同は濕とりと謡ひ出し「惜むもこふも」より替へて謡ふべし。

○「我名を何と夕ばえの」此地は濕とりと謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手、

面、中將、初冠、綏、色鉢巻、箔、單狩衣、指貫、込大口、腰帯、扇、

○後仕手は扇を持ち一聲二段聞て出、内へ入り常座にて開き謡ふ。

○「ふしぎやな雲の上人」此處は少し懸て諷ふべし。

○舞曲。

○此曲は靜かに確かりと諷ひ、「抑日の本の」より替へて諷ひ「忍び出るや二月の」と心持を付けて確かりと「たそがれ月も」と乘て諷ひ出し「落るは涙かと」と心持を付けて諷ふべし。

○「思ひ出たり夜遊の曲」此處はコイ合を聞て諷ひ出し、靜かに寛たりと諷ふべし。

○「返す眞袖を、月やしる」此地は寛たりとのんびり諷ふべし。

○序の舞、三段、

○「松の葉のちりうせず」此處は地の謠へ直ぐ付けず、少し間を置て諷ひ出し、乘を外して諷ふべし。

○「末の世までも情しる」此處より濕とりとさら〳〵諷ふべし。

盛久

○脇、直垂、上下、

○脇名乘其外何れも句讀の息繼ぎを寛たりと諷ひ確かり諷ふべし。

仕手

面、直面、放髮、厚板、大口、腰帶、袈裟、珠數、經、小刀、扇、

○大小座着て仕手は經を懷中し右に珠數を持て出、脇座へ行き床机に掛り「如何に土屋殿、清水の方へ輿を立て給はり條へ」と諷ひ夫より角カケて「南無や大慈大悲の」と諷ひ出すなり。

○「南無や大慈大悲の」此處は靜かに確かりと諷ひ「猶頼みあり」と心持を付けて諷ふべし。

○「荒御名殘をしや」此處は心持を付けて靜めて諷ふべし。

○「いつかさて」此一聲は寛たりと押へて諷ふべし。

○「音に立ぬも」此處は地の調子に付かず込めて諷ひ出すべし。

○「見渡せば柳櫻を」此處はすらりと諷ふべし。

○「我なまじひに弓馬の家に生れ」此處は前と替へて少しずかりと諷ひ「思はざる外の旅行の道」よりさら〳〵と「いつ歸るべき」より段々に靜めて諷ふべし。

○「爰は誰をか松坂や」此處は少し濕とりと諷ひ「是や此」とずかりと諷ひ出し「行くも歸るも」よりさら〳〵と諷ふべし。

○「勢田の長橋うち渡り」此處は少し具合を付けたつぷりと諷ひ「さのみ」と入グリに諷ひ「あつたの浦の」より替へて諷ふべし。

○論議は道行なれども餘り調子を張らずに濕とりと諷ふべし。

○論議濟て仕手は右へとり、地の前へ行き、角カケ床机に掛り「夢中に道あつて」、と諷ひ出すなり。

○「夢中に道あつて」此處は押へて確かりと諷ひ「實やそことも知らざりし」よりさらりと「塵中の夢」と心持を付け「一寸の光陰」より緩めて弱く「實や故郷は」より替へて強く「我ひとり」と心持を付け「鎌倉山の雲霞」と替へて押へ「實かゝる身の」と心持を付けて緩め「習ひかや」と靜めて諷ふべし。

○「あつぱれとうきられればやと思ひ候」此處は「とう」と出して諷ひ「う」へ產み字を出して小さく當り「きられればやと」と確かりと諷ふべし。

○「此曉かしからずは」此處は「此曉か」と扱て「然らずば」と出して諷ふべし。

○「明夜かと仰出されて候」此處も「明夜かと」と

扱て諷ふべし。

○「偖は拔群の遲速にて候」此處は少し懸て諷ひ出し「扨も此程土屋殿の御芳志」より替へて諷ひ「我此年月」より改めて諷ひ出すべし。

○「有難や大慈大悲は」此處は脇の詞へ直ぐ付けず少し間を置て諷ひ出すべし、

○「願はくは無緣の慈悲をたれ」此處はすらりと諷ひ出し「誰れか賴まん」と靜め「二世の願望」より替へて崩してさらりと輕く「大聖の誓約」より又替へて少し張る心にて「あらざらんや」と靜め「或遭王難」より替へて張て確かりと「刀尋」と靜めて「段々壞」と押へて確かりと諷ふべし。

○「實たのもしや」此處は少し懸て諷ひ「種々諸惡趣」より崩してさらりと諷ひ「生老病死苦」と締め「以漸」より弱めて諷ふべし、但し茲は下二の如くに諷はず普通の中の節扱ひに諷ふべし。

○「此文の如くば」此處は確かりと諷ひ「命は惜まず」より次第に締めて諷ふべし。

○「昔在靈山の」此處は押へて濕とりと諷ひ「三世の利益」より改めて諷ひ出し「盛久が終の道」より段々靜めて諷ふべし。

○「盛久も待まうけたる事なれば」此處は少し懸て諷ひ出し「左には金泥の御經」緩めて心持を付け「右には思ひの珠の緒の」と具合を替へて諷ふべし、此處は「左には」と經を出して見「右には」と珠數を出して見る型あり。

○「夢路を出る曙や」此地は押へて濕とりと諷ひ返しより少しさらりと諷ふべし。

○「盛久頓て座になほり」此處は確かりと諷ひ「清水の方は」より替へて諷ふべし。

○「盛久も思ひの外なれば」此處は少し懸て諷ひ「たゞ茫然と」と具合を付けて諷ふべし。

○「臨刑慾壽終」此處は懸て諷ひ「刀尋」と確かりと諷ふべし。

○「經文あらたに曇りなき」此地はすらりと輕く諷ひ出し「荒有難の」と緩め「御經や」と靜めて打切に諷ひ「聽て此由聞召」より改めて諷ひ出しさらりと運び、諷ひ止めも餘り靜めずに諷ふべし。

○「如何に盛久御前にて候」此處は仕手後見座へ寃ぎ、物着濟み、梨子折、白鉢卷、直垂を着し立て舞臺中央へ出る時、脇より諷ひ掛けるなり、茲は懸て諷ふべし、但し素謠の時は地の謠ひ止めへ直ぐ付けて諷ひ出すべし。

○居曲。

○此曲は濕とりとおさめて諷ひ「本より大慈大悲の」より改めて諷ひ出し、「夢は即覺にけり」と具合を付けて「盛久貴く」より靜めて改めて諷ひ出すべし。

○論議はさらりと諷ふべし「其時盛久は」此處は確かりと諷ひ「感涙をとめかね」とたつぷりと柔かにクリ「詮方もなき」と少し靜めて諷ふべし

○「種は千世ぞと」此處は引立てすらりと諷ふべし。

○「有難し〳〵」此處は取て輕く諷ふべし。

○「治まりなびく時なれや」此處は懸て諷ふべし。

○男舞、三段、

○「酒宴なかばの春の興」此地は乘てさらりと諷ふべし。

道成寺

○脇、大口僧、三人、

○脇名乗語り其外何れも句讀の息繼を寛たりと確かり諷ふべし。

前仕手。

面、曲見、鬘、鬘帶、平元結、扇、物着、前折烏帽子、

○仕手は次第にて出、内へ入り作り物に向ひ諷ふ。

○「月は程なく入しほの」此處は寛たり諷ふべし。

○「あれにまします宮人の」此處は物着にて烏帽子を着け橋掛りへ行き、振り返り鐘を篤くと見てすら〳〵と内へ入り常座に踏み止めて諷ひ出すなり、さらりと諷ふべし。

○「花の外には松ばかり」此處はさらりと諷ふべし。

○地次第は前より調子を押へて低くさらりと諷ふべし。

○「道成の郷」此處は素謠には諷はず。

○「山寺のや」此處は懸てすらりと諷ふべし。

○急の舞。

○「春の夕ぐれ」此處は強くすらりと諷ふべし。

○「入相の鐘に」此地は打上頭に付て諷ひ出し、ずかりと諷ふべし。

○「去程に〳〵」此處は少し緩めて諷ふべし。

○「人々眠れば」此處は押へて確かりと諷ふべし。

仕手は茲にて脇及び脇連を見廻し「思へば此鐘」よりすらりと進て「龍頭に手を掛け」と兩手を鐘へ掛け拍子二つ踏み「飛ぶとぞ見えし」にて其儘飛び込み鐘落るなり「失にける」此處はずかりと詰めて諷ふべし。

○「昔此所に」此處より語りとなる、茲より緩急を付け確かりと諷ふべし。

○「中央に大日大聖不動」此處は「不動」とずかりと諷ひ、句讀を短かく諷ひ止むべし。

○「うごくか動かぬか」此處は句讀を確かりと切りさらりと諷ふべし。

○「何の恨みか有明の」此處は「有明の」と出して諷ふべし。

○「撞かねこそ」此處はスラりと諷ふべし。

○「すは〳〵動くぞ」此地は乘て寛たり確かりと諷ひ「鐘樓に引上たり」とたつぷりと諷ひ「あれ見よ蛇體は」より進て「顯れはたり」と緩めて諷ふべし、茲にて鐘上り仕手出るなり。

後仕手。

面、眞蛇、鱗箔、腰帶、腰卷箔、平之結、唐織、坪折、扇、打杖、

○「謹請東方青龍清淨」此處は位急に具合を付けて諷ひ「深淵に飛てぞ入にける」と諷ひ、少し呼吸を取り「望たりぬと」より替へて緩めて諷ふべし。

唐船

○素袍脇、一人、

○脇名乗其外何れも句讀の息繼を寛たりと諷ひ確かり諷ふべし。

○唐子、二人、

面、直面、放髮、バサラ、厚板、大口、側次、腰帶、扇、

○一聲の内に狂言舟を一の松の所へ出し、唐子二人出て舟に乘り向合ひ諷ふ。

○「唐土船の楫枕」此一聲はさらりと諷ふべし。

○「是は唐土明洲の津に」此處はさら〳〵と諷ふべし。

○「明洲河を押わたり」此處はすらりと諷ひ出し「浪路はるかに」より替へて諷ふべし。

○唐子二人は脇の「御歸り候はゞ引き合せ申候べ

し」と聞て立ち後見座へ寃ぎ居る。

仕手

面、靈尉、尉髮、小格子、水衣肩取る、腰帶、鞭、綱、唐團扇、

○日本子、二人、

面、直面、放髮、箔、腰卷箔、腰帶、扇、鞭、綱、

○一聲にて仕手は左に綱、右に鞭を持ち日本子二人を先に立て出、子方一の松にて踏み止め正面する時「如何にあれなる」と子方を見て行きかかり諷ひ出すなり、日本子二人も左に綱右に鞭を持つ、

○此一聲は前の一聲より位靜かなる事勿論なり。

○「よし我のみか天の原」此處は「み」の字へ產み字を出して輕く當るべし。

○「たなばたの、たとへにも似ぬ」此一聲は寬たりと大さく確かり諷ふべし。

○「名ぞしるき」此處は込で諷ふべし。

○「是は唐士明洲の津に」此處は押へて柔かに諷ふべし。

○「荒故郷戀しや」此處は仕手一足引て曇る型あり茲は心持を付けて諷ひ「かくて年月を送る程に」より改めて諷ふべし。

○「夫れも戀しく又是もいとほしい」此處は「夫れも戀しく」と少しすらりと諷ひ「又是も」と押へて確かり諷ふべし、要するに「夫れも戀しく」と「又是も」とを分けて諷ふべし。

○「あれを見よ野飼の牛の聲々に」此地は濕とりとのんびり諷ひ「いはんや人倫に」より替へて乘て諷ふべし。

○論議は寬たりと乘て諷ふべし。

○「唯今尉が牽て行く」此處はカンに諷ふべし、クリの廻しの產み字を長く引て諷ふべし。

○「松原や末に」此處は入グリに諷ふべし。

○「さん候餘りに多き」此處は「多き」と確かり扱て諷ふべし。

○「やあ如何にあれなるは」此處は脇の謠へ直ぐ付けず少し間を置て諷ひ出し懸て諷ふべし。

○「是は夢かやゆめならば」此處は少し懸て諷ふべし。

○「春宵一刻其價」此地はさらりと諷ひ出し「子程の寶」より少し緩め「唐士は心なき」より替へて諷ひ出しさらりと「たうとや箱崎の」と少し緩め「神も納受」より締めて諷ふべし。

○「實々出船のならひとて」此處は確かりさらりと諷ひ出し「こなたへ」と扱て「來り候へ」と出して諷ふべし。

○「中にとゞまる父ひとり」此處は「ひ」の字を當てゝ「ひとり」と出して詰めて諷ふべし。

○「たつきも知らず」此處はさらりと諷ひ出し「たとへば親の」より改めて諷ひ出し緩めて諷ひ「うつばりの燕も」とずかりと「皆子ゆゑこそ」より靜めて諷ふべし。

○居曲、

○此曲は上端を靜かに濕とりと諷ひ「岩ほに」より立て合掌し「既にうき身を投げんとす」と正面へすら〳〵と出、子方四人に留られて止まり「唐士や」と唐子へ「日の本の」と日本子へ「是を如何にと悲しめば」と心持あり、「さすが心もよわ〳〵と」と跡へ下り平臥してシヨル型あり、故に茲は「船にも乘るまじ」と押へて確かり諷ひ「岩ほに上りて」とカンにたつぷりとクリ「投げんとす」と少し懸り「唐士や日の本の」と具合を付けて運び「子供は左右に」と心持を付け

て運び「是を如何にと」と緩め「さすが心もよわ〳〵と」より段々と靜めてふ諷べし。

○「是はまことか」此處はすらりと諷ふべし。

○「有難の御事や」此地は寛たりと諷ひ出し「かくて餘りの嬉しさに」より改めて諷ひ出し、「暇申して唐ひとは」とずかりと「棹のさす手も舞の袖」とさらりと諷ひ「皷の」より强く諷ふべし。

○「かくて餘りの嬉しさに」此處より祝言の心にて諷ふべし。

○樂、五段、船中にて舞ふなり、

○「陸には舞樂に乘じつゝ」此地は乘て寛たりと諷ふべし。

邯鄲

仕手。

面、邯鄲男、黑頭、白鉢卷、唐織、法被、

半切、腰帶、袈裟、珠數、唐團扇、

○大小座着、作り物屋臺を出し、狂言の口明濟て皷次第を打出す。

○仕手は右に唐團扇、左に珠數を持ち、次第二段聞て出、内へ入り大小へ向き諷ひ出す。

○「住馴し國を雲路の」此處はすらりと諷ひ出し「野暮山くれ」より替へて諷ふべし。

○次第道行共さらりと諷ふと雖も脇の謠の如くならぬ樣に注意して諷ふべし。

○「一村雨のあま宿り」此初同は濕とりと確かり諷ふべし。

○「思ひよらずや王位には」此處より夢中の謠なれば具合を替へて諷ふべし。

○「こはそも何と夕露の」此邊より段々に氣を懸ける心持にて諷ふべし。

○「玉のみこしに法の道」此地は初同よりすらりと

諷ひ出し「夢とは白雲の上人と成ぞ」より靜かに濕とりと諷ふべし。

○「有難の氣色やな」此處は來序になり仕手臺へ上り、脇正面へ向き平臥し居り、來序打上て諷ひ出すなり、此處はさらりと諷ひ「千貨萬貨の御寶の」より改めて諷ひ出すべし。

○「國土安全長久の」此地は引立てさら〳〵と諷ひ「菊のさかづき」とずかりと「めぐれや盃の」より替へてさら〳〵と諷ふべし。

○脇、三人、大臣、バサラ、側次、子方、

金風折、箔、長絹、大口、腰帶、扇、

○「我宿の」此處は輕くすらりと諷ふべし。

○「菊の白露」此處はクリの直りより强く諷ふべし。

○「呑ば甘露もかくやらんと」此處よりさら〳〵と諷ふべし。

○樂、五段、三段は臺の上、二段は臺の下にて舞ふなり。

○「いつまでぞ」此處は引立てすらりと諷ふべし。

○「月人男の舞なれば」此處は少し間を置て諷ひ出し乘を外して諷ふべし。

○「四季折々は目の前にて」此處は次第に進て諷ひ「面白やふしぎやな」と少し緩めて諷ふべし。

○「かくて時すぎ頃されば」此地はすらりと諷ひ出し「誠は夢のうちなれば」より段々に進て諷ひ「覺にけり」と少し緩めて諷ふべし。

○「蘆生は夢さめて」此處は押へてすらりと諷ふべし。

○「つら〳〵人間の」此處は靜かに濕とりと諷ふべし。

○「南無三寶」此處は少し間を置て諷ひ出し、ずか

りと諷ふべし。

○「望みかなへて」此處より靜めて諷ふべし。

殺生石

○沙門脇、一人、

○脇次第名乘共何れも位を付けて確かりと諷ふべし。

○「雲水の身はいづくとも」此處はすらりと諷ひ出し確かりと諷ふべし「結びこめたる」より替へて諷ふべし。

前仕手。

面、萬妃、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、扇、

○前仕手、呼び掛け。

○「かく恐しき殺生石とも」此處はすらりと諷ふべし。

○「那須野の原に立石の」此初同は濕とりと諷ひ出し「物冷じき秋風の」より改めて諷ひ出し「枝に啼つれ」と入グリに諷ふべし。

○居曲。

○此曲は靜かに確かりと諷ふべし「雲の上人立騷ぎ」より替へて諷ふべし。

○「立歸り夜に成て」此地はさらりと諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○「急々にされ〳〵」此は返しの「され」より普通の詞の出しの如くに詰めて「され」と强く張て諷ふべし。

後仕手

面、小飛天、赤頭、色鉢卷、厚板、法被、半切、腰帶、扇

白頭にて演ずる時には泥小飛天

○後仕手は出端一段にて作物の內机床に掛り諷ひ出すなり。

○「石に精あり」此處は確かりと諷ふべし。

○「像を今ぞ顯はす石の」此地は乘て確かりと諷ふべし。

○「ふしぎやな此石二つにわれ」此處は懸て諷ふべし。

○「今は何をかつゝむべき」此處も懸て諷ふべし。

○「頓て五體を苦しめて」此地はさらりと運て諷ひ「其後勅使たつて」と少し靜め、返しよりさら〳〵と諷ひ「是犬追物」と少し緩め「はじめとかや」とすらりと諷ひ「兩介は狩裝束にて」と少し緩め返しより又さら〳〵と運て諷ひ「鬼神の姿は失にけり」と靜めて諷ふべし。

野宮

脇、着流僧、一人

○脇名乘サシ共寬たりと諷ふべし。

○「伊勢の神垣」此處は道行なり、茲より替へて寬たりと諷ふべし。

前仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、扇、木の葉

○仕手は次第にて右に扇左に木の葉を持ち、內へ入り大小へ向き諷ふ。

○「花に馴こし野々宮の」此處は靜かに濕とりと諷ふべし。

○サシは少しすらりと濕とりと諷ふべし。

○「野々宮の杜の木枯秋ふけて」此處は靜かに濕とりと諷ひ「きてしもあらぬ」より替へて諷ふべし。

○「人社しらぬ宮所を淸め」此處は中音にすらりと諷ひ出し「とく〳〵」と輕く諷ひ心持を付けて强みに諷ひ「歸り給へ」より弱く諷ふべし。

○「神垣はしるしの杉もなき物を」此處は阿漕の「伊勢の海」の謡ひ方と同様なり。

○「紅葉かつちり」此處は「か」の字へ産み字を出して輕く當てゝ謡ふべし。

○「うら枯の草葉にあるゝ」此初同は静かに濕とりと謡ひ「光りは」と入グリに謡ひ「荒淋し宮所」と静めて具合を付け呼吸を取て「あらさびし」と締めて返しを謡ひ出すべし。

○クリ地は少し調子を扣へて静かにすらりと謡ふべし。

○「まだ絶々の中なりしに」此處は「まだ」と切り切らずに謡ひ「絶々の」と心持を付けて締めて謡ふべし。

居曲

○此曲は静かに濕とりと謡ふべし。

○「さびしき道すがら」此處は「さびしき道すがら」と少しずかりと謡ひ「秋のかなしみも」と緩めて謡ひ「かくて君爰に」より改めて謡ひ出すべし。

○「心の水に誘はれて」仕手は此處より立て型あり。

○「ことの葉は」此處は入グリに謡ひ「ためしなき」とおさへて張り「ものを」と句讀に謡ひ「親と子の」と静めて謡ふべし。

○論議は少し引立てすらりと謡ふべし。

○「夕暮の秋の風」仕手は此處より立て型あり。

○「影かすかなるこのしたの」此處は心持を付けて謡ひ「黒木の」と押へて張りたつぷりと謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○「かた敷や杜の木蔭の」此待謡は静かに寛たりと謡ふべし。

後仕手

面、増、長絹、緋大口、腰帶、扇

○後仕手は扇を持ち一聲越して出、内へ入り常座にて開き謡ふ。

○「ふしぎやな月の光りも」此處は懸て謡ふべし。

○「如何なる車と問はせ給へば」此處より以下は引立てすらりと謡ふべし。

○「人々ながえに取つきつゝ」此地は運てさらりと謡ひ「身の程ぞ思ひ」より緩めて確かりと「よしや思へば」より改めて謡ひ出し締めて謡ふべし。

○「身は猶」此處は入グリに謡ふべし。

序の舞、三段

○「野の宮の」此處は外して謡ふべし。

○「小柴垣」此處は地の謡へ直ぐ付けず少し間を置て外して謡ひ出すべし。

○「唯夢の世と」此處はカンに謡ふべし。

○「りん〳〵として」此處は「と」の字を呂に下げ「風茫々たる」と懸て「野の宮の夜すがら」と進で謡ひ、呼吸を取て「なつかしや」と締めて謡ひ出すべし。

○「爰は元來」此處は仕手合掌して「神風や伊勢の」と作物へ行き左の手を作物の柱に掛け「鳥居に出入姿は」と右の足を作物の向へ出し直に跡へ引き跡へ下り「神は受ずや」と作物へ巻サシ直に小角取りして「思ふらんと」と左廻り「また車にうち乘て」と脇座より仕手柱の方へ向き乘込み拍子二つ踏み「火宅の門をや」と常座の方へ行き扇かへし右小廻して開き留めるなり。

○「爰は元來」此處は乘てすらりと謡ひ出し「内外の鳥居に出入姿は」と心持を付けて謡ひ「また車にうち乘て」と替へて静めて謡ふべし此處の「うち乘て」の「う」の下げ方は前の「りん〳〵と

「して」の下げ方と同じく呂に下げて謡ふべし。

○「火宅のかど」此處は「かど」と二字とも引かずに謡ひ止むべし。

百萬

素袍脇、一人
子方
面、直面、放髪、箔、長袴、扇

○脇次第名乗其外何れも句讀を寛たりと謡ひさらく謡ふべし。

仕手
面、曲見、鬘、鬘帯、前折烏帽子、箔、腰巻
箔、腰帯、長絹、笹、扇

○仕手は扇を挿し笹を持ち、狂言の念佛二つ程聞て出、内へ入り常座にて狂言へ向き謡ひ掛けるなり

○「南無阿彌陀佛」此處より太鼓打出すなり、仕手の謡ふ「南無阿彌陀佛」は二つ共「阿」の字へ産み字を出して當てゝ謡ふべし。

○「南無阿彌陀佛」此地の二度目は懸て謡ふべし。

○「人はあま夜の月なれや」此處より乗を外してさらりと謡ふべし。

○「是かや春の物狂」此處より狂亂の心なり。

○「亂れ心か戀種の」此處にて拍子を捨て太鼓の頭を聞て「ちから車に」と謡ひ出すなり。

○「實や世々ごとの」此處より笹の段と云ふ。

○「いづくをさしてひかるらん」此處は「ひかる」の「か」の廻しを小さく廻して謡ふべし。

○「實百萬が姿は」此處は謡ひ出しの「げ」の字へ扱て當り「げに」と寄せて「百萬が」と押へて張るべし。

○「うつし心かむらがらす」此處は「むらがらす」と

寄せて謡「す」の字を殘して「すゥ」と延ばして謡ふべし。

○「うかれと人は、とひもこで」此處は「うかれと人は」と謡ひ呼吸を取て「とひもこで」と確かりと謡ふべし。

○「若も我子に廻りやあふと」此處は「も」の字と「や」の字へ輕く當てゝ謡ふべし。

○「車に法の聲たてゝ」此處は「に」の字へ産み字を出して輕く當り「法」の「の」のハ子を當らずに浮かして「り」にて中に下げて謡ふべし。

舞曲、二段曲

○此曲は靜かにさらりと謡ふべし。

○「一方ならぬ思ひ草」此處より替へて謡ひ出し「面かげ」とずかりと謡ひ少し呼吸を取て「淺ましき」と心持を付けて緩めて謡ひ「姿なりけり」とずかりと謡ふべし。

○「かくて月日を送る身の」此處より又替へて謡ひ出し「花のうきゝの龜山や」と押へて確かりと謡ひ出し、「かざしぞ多き」と入グリに謡ひ「かれよりも是よりも」より替へて謡ふべし。

○「安居の御法と申も」此處は前の上端より輕く引立てすらりと謡ふべし。

○「いはんや人間の身として」此處は彈て謡ひ止めて句讀に謡ひ「などかは」とまたぐ間に謡ふべし。

○「あら我子」此處は込てクルべし。

○「是程多き人の中に」此處は靜かにすらりと謡ふべし。

○「我子戀しや」此處より乗て謡ひ「南無釋迦」より段々と運て謡ひ「逆縁ながら」より進て「誓ひにあはせて」と謡ひ少し呼吸を取て「たび給へ」と少し緩めて謡ふべし。

○「恨めしやとくにも名乗り」此處はすらりとはつきり諷ふべし。

○「荒恨めしとは思へども」此處は「荒恨めしとは」に非らず「荒恨めし、とは思へども」なれば「荒恨めし」と句切て「とは思へども」と出して諷ふべし。

○キリは三井寺のキリと同樣の諷ひ方なり、さら〳〵と諷ふべし。

自然居士

仕手

面、大喝食、喝食髪、箔、水衣、大口、腰帶、掛絡、珠數、扇

○初めに狂言出て口明あり「說法御演候へや」と狂言の諷ふを聞て仕手は左に珠數右に扇を持ち幕離れにて「今日の居士が」と諷ひ出すなり。

○狂言「相觸れ申て候」と諷ふを聞き內へ入り、大小前中にて床机に掛り「いで〳〵說法演んとて」と諷ふ。

○此仕手は調子を押へて寬たりと諷ふべし。

○「謹み敬て白」此處は寬たりと諷ひ「一代教主」より少しさらりと「總神分に」より段々靜めて諷ふべし。

子方、女

面、直面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、文

○子方は文懷中して左の袖に小袖を掛けて出「盤若心經」の謠一バイに一の松にて踏み止めるを狂言見付、けて諷ひ縣け、文と小袖とを子方より受取り、子方を連て內へ入り、脇正面にて仕手の方へ向き下に居らせ、夫より狂言は仕手の前へ小袖を置き、脇正面へ來り、仕手へ向き「如何に申候、是成雅き人の諷誦御上候御覽候へ」と諷ふ。

○身のしろ衣恨めしき」此初同は濕とりと寬たり諷ふべし「かずの聽衆も」此處は入ダリに諷ふべし。

素袍脇、二人

○脇は少し强みを持てさら〳〵と諷ふべし。

○脇連「心得申候」と諷ひて子方を引立て脇座へ連れ行き下に居らせる。

○「何と唯今のをさなき者を」此處は狂言が「是は如何な事、何と致さう、急で居士へ此由申さう、如何に居士へ申候、最前の幼なき人をあらけなき男が二人して引立て參りて候」と諷ふを聞て諷ひ出すなり、是より以下の掛合は狂言との問答なれば調子を扣へてさら〳〵と諷ふべし。

○「あゝ暫く」此處は狂言が「左樣の者ならば大津松本へ參らふずる間、某が追付き留め申さう」と諷ふを聞て扇にて狂言を指して諷ひ出すなり、茲は大きく確かりと諷ふべし。

○「いや〳〵說法には道理を演ん爲なり」此處は狂言が「是は御最にて候へども、居士の御出あらば七日の說法が無にならうずるはいかに」と諷ふを聞て諷ひ出すなり。

○「商人は惡人すは」此處は「商人は惡人」と確かりと諷ひ「すは」と寄せて急に出して諷ふべし。

○「善惡の二道爰に極りたり」此處は「善惡の二道」と上より出して「爰に」と押へ「極りたり」と出して諷ふべし。

○「今日の說法是迄なり」此處は寬たりと諷ひ「願以此功德」よりさら〳〵と諷ふべし。

○「佛道修業のためなれば」此地より一聲なり乘て諷ふべし。

○「今出て」此處は懸て强くさらりと諷ふべし。

○「船なくとても説く法の」此處は寛たりと謡ふべし。

○「なふ其船へ物申さう」此處は少し懸て謡ひ出すべし。

○「我も旅人にあらざれば」此處は輕く謡ふべし。

○「あゝ音高し」此處は懸て謡ひ出し「何と〳〵」とずかりと謡ふべし。

○「道理〳〵」此處は扱て大きくたつぷりと謡ひ返しをずかりと謡ひ「よそにも人や白浪の」より替へて謡ふべし。

○「水の煙の霞をば」此處は取て輕く謡ふべし。

○「一としほ二しほなんどいへば」此處は「一としほ二しほなんどゝ」と何もなしに謡ひ「いへば」と急に出して寄せて謡ふべし。

○「今漕そむる舟なれば」此處は少し懸てすらりと謡ふべし。

○「是は自然居士といへる」此處は取て寛たりと謡ひ「恨の爲に來りたり」と心持を付けてすらりと謡ふべし。

○「御ひが事とも申さばこそ」此處も寛たりと謡ふべし。

○「荒腹立や去りながら」此處は懸て謡ふべし。

○「引立みれば」此處は懸て謡ふべし。

○「口にはわだのくつはをはめ」此地は少し懸てさらりと謡ふべし。

○「あらいとほしの者や」此處は取て謡ひ出し、「あら」と大きく扱て「いとほしの」と出して謡ひ「嫌てつれて歸らふずるぞ」と確かりと謡ふべし。

○「彼者を給はり候へ」此處は落付て謡ふべし。

○「委細承り候」此處は取て寛たりと謡ひ、「か樣に身を徒になす者に行逢」より少しさらりと謡ふ

べし。

○「舟より御をりなくば」此處は強く懸て謡ふべし。

○「拷訴とは」此處は取て緩めて謡ふべし。

○「命をとらふ」此處は懸て強く謡ふべし。

○「元より捨身の行」此處は外して緩めて謡ひ、少し間を置て呼吸を取て「命を召れ候へ」と落付て謡ふべし。

○「いや〳〵りようじには」此處は寛たりと謡ふべし。

○「や、船頭殿のお顏の色こそ」此處は「や」と下にて外して謡ひ「船頭殿の」と輕く謡ひ出すべし。

○「面々は餘りにつれなう」此處は脇の「是を召して一さし御舞候へ」と聞て物着になり、烏帽子を着、立て脇へ向き謡ひ出すなり、故に此處は少し間を置て謡ひ出し、寛たりと謡ふべし。

○「志賀唐崎の一つ松」此處は脇の謠へ直ぐ付けず少し間を置て懸てすらりと謡ふべし。

○「つれなき人の、心かな」此處は少し靜めて謡ふべし。

中の舞、三段
舞曲

○此曲は藤榮の曲より確かりと謡ふべし。

○「又蜘といふ虫」此處より替へて謡ひ「立ちくる蜘の振舞」と少し張り氣味に寛たりと謡ひ「たくみて舟を作れり」とさらりと「黄帝是に召れて」より替へてさら〳〵と謡ふべし。

○「かの佛の」此處より語りとなる、語りは寛たりと句讀の息繼をたつぷりと謡ひ、段々に乘て謡ふべし。

○「さゞ浪や」此地は乘て段々に運て謡ふべし。

露光量違いの為重複撮影

○「散々に御なぶり候程に」此處は懸て強みに諷ふべし。

○「本より鼓は浪の音」仕手は脇の「此上は案内なしに連れて御入候へ」と聞て、立て後見座へ寃ぎ、鞨鼓を付け撥を持ち正へ直す時に脇より諷ひ掛けるなり、即ち此一句は脇が諷ふなり。

○「本より鼓は浪の音」此處は仕手撥を分け持ち正面へ出、「よせては岸を」と下を卷指し「どうどはうち」と拍子一つ踏み開き「あま雲まよふ鳴る神の」と高く指し廻し、鞨鼓を打ちながら橋掛りへ行き「とゞろ〳〵となる時は」と一の松にて振り返り「ふり來る雨は」と正面を高く見廻し「はら〳〵〳〵と」と撥にて欄干を四つ打ち「をざさの竹のさゝらをすり」と内へ踏み止め「狂言ながらも」と寃ぎ、撥捨て扇ぬき、開き持ち「船のうちより」と子方を卷指し出て子方へ手を掛け送り「ていとうど打ち連れて、共に都に上りけり」と右へ小廻して正面へ開き此曲を終るなり。

○「本より鼓は浪の音」此地は乘て次第に進て諷ひ「はら〳〵〳〵と」と押へて具合を付けて諷ひ「岸によせくる」より乘を外して「船の中より」より別に出して緩めて諷ふべし。

内之部　終

外の巻

露光量違いの為重複撮影

○「散々に御なぶり候程に」此處は懸て強みに諷ふべし。

○「本より鼓に浪の音」仕手は脇の一此上は案内なしに連れて御入候へ」と謂て、立て後見座へ寵ぎ、鞨鼓を付け撥を持ち正へ直す時に脇より諷ひ掛けるなり、即ち此一句は脇が諷ふなり。

○「本より鼓は浪の音」此處は仕手撥を分け持ち正面へ出、「よせては岸を」と下を卷指し「どうどはうち」と拍子一つ踏み開き「あま雲まよふ鳴る神の」と高く指し廻し、鞨鼓を打ちながら橋掛りへ行き「とゞろ〳〵となる時は」と一の松にて振り返り「ふり來る雨は」と正面を高く見廻し「はら〳〵〳〵と」と撥にて欄干を四つ打ち「をざさの竹のさゝらをすり」と内へ踏み止め「狂言ながらも」と寵ぎ、撥捨て扇ぬき、開き持ち「船のうちより」と子方を卷指し出て子方へ手を掛け送り「ていとうと打ち連れて、共に都に上りけり」と右へ小廻して正面へ開き此曲を終るなり。

○「本より鼓は浪の音」此地は乗て次第に進て諷ひ「はら〳〵〳〵と」と押へて具合を付けて諷ひ「岸によせくる」より乗を外して「船の中より」より別に出して緩めて諷ふべし。

内之部　終

外の巻

謡曲指針（外の巻）

放生川

脇　大臣三人

脇次第名乗共高砂の通り

○「曇りなき都の山の朝ぼらけ」此處はすらりと謡ひ出し「淀の繼橋かけまくも」より替へて謡ふべし。

前仕手

面　小尉、尉髪、小格子、水衣肩取る、腰帶

水桶、杖、扇、

連男

面、直面、放髪、段鬚斗目、水衣、腰帶、扇

（1）

○眞の一聲高砂の通り

放生川

○二の句其外高砂の通り

○「取いる、此うろくづを放さむと」此初同は少し靜かに確かりと謡ふべし。

居曲

○此曲は靜かに確かりと謡ふべし。

○「されば、にや宗廟の」此處より改めて謡ひ出すべし。

○「其外里かぐら」此處は少しずかりと謡ふべし。

○論議は濕とりと謡ふべし。

○「代々に仕へし古へも」此處は少し押へて位を取り確かりと謡ふべし。

○「送りむかへて神德を」此地は濕とりと靜かに謡ひ仕手は「武氏の神は我也と」より立つなり。

○「名乗も敢ず男山」此處より替へて引立て謡ひ、「山上さしてあがりけり」より段々に静めて謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、舞尉、初冠、白垂、色大口、色鉢巻、厚板、狩衣、腰帯、扇

○後仕手は出端二段にて静かに出、内へ入り常座にて開き謡ふ。

○後仕手は寛たり確かりと謡ふべし。

○眞の序の舞

○「さては神代も和歌をあげ」此處は前の論議より少しさらりめに濕とりと静かに謡ふべし。

○「花の冠をかたふけて」此處は寛たりと謡ひ、「さのみは何と」と少し替へて謡ふべし。

籠

○居曲

○此曲はさらりと謡ふべし。

○「去程に味方の勢」此處より替へて謡ふべし。

○論議は寛たりとさら〳〵謡ふべし。

○「鶯宿梅の」此處は入クリに謡ひ、「宿らせ給へ」とたつぷりと「我も又」と少しずかりと「世を鶯の」とたつぷりと「ねぐらは」とすらりと「此花よとて」と少し心持を付けて謡ひ、以下段々に静めて謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○詩謠は寛たりと謡ふべし。

後仕手

面、平太、梨子打、白鉢巻、黒垂、厚板、唐織、法被、半切、腰帯、太刀、扇、紅梅の枝

○後仕手は本越一聲にて扇を持て出、一の松にて開き謡ふ。

○「さつて生田の」此處は「さつて」と大きく謡ひ「名にしおへる」と崩して輕く謡ひ「血は涙鹿の」と替へて強く謡ふべし。

○「月をも日をも」此地は乗て次第に運で謡ふべし。

○「ふしぎやな其樣いまだ若武者の」此處は懸て謡ふべし。

○「今は何をかつゝむべき」此處は乗て引立てはつきりと謡ふべし。

○「御身たつとき人なれば」此處より替へて謡ふべし。

○「跡とひ給へといはんとすれば」此處は「すれば」と寄せてずかりと謡ふべし。

○「紅煙の旗をなびかし」此處はさらりと謡ひ出し次第に運で謡ひ「暫く心を静めて見れば」と少し静め、返しよりさら〳〵と段々に運び「敵の兵

脇　着流僧

○脇次第名乗共寛たりとさら〳〵謡ふべし。

○「旅心つくしの海の船出して」此處は寛たりと謡ひ出し「煙も見えし松原の」より替へて謡ふべし。

前仕手

面、直面、放髪、段熨斗目、大口、掛素袍、腰帯、扇、杖

○次第二段にて出、内へ入り大小へ向き謡ふ。

○此仕手は若くさら〳〵と謡ふべし。

○「實や名將の古跡といひ」此處は改めすらりと謡ふべし。

○「名をとめし主は花の景季の」此初同は寛たりと謡ふべし。

○「去程に平家は去年播磨の室山」此處は懸て引立て謡ふべし。

是を見て」より替へて謡ひ「向ふ者をば」邊より次第に運び「能々とひて」より靜めて謡ふべし。

藤

脇　着流僧二人

○脇次第名乘共寛たりと謡ふべし。
○「雪はるゝ白山風も長閑にて」此處はすらりと謡ひ出し寛たりと謡ひ、「青葉に見ゆる」より替へて謡ふべし。
○「又あれなる湖は」此處より替へて謡ひ「又是なる松に」と又具合を替へて謡ふべし。
○「常盤なる松の名たてに」此處は阿漕の「伊勢の海」の謡ひ方と同樣なり。

前仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、唐織、扇

○呼び掛け
○「花を賤しく岩代の」此處は仕手橋掛の長短見合せ内へ入り常座に立て謡ふ所なり、是迄は歩みながら謡ふなれば乘て謡ふべし。
○此仕手は品よく寛たりと謡ふべし。
○「田枯の浦や」此處は阿漕の「伊勢の海」の謡ひ方と同樣なり。
○「あら心なの旅人やな」此處は「あら」とたつぶり謡ひ、「心なの」と强めて謡ひ、「旅人やな」と弱めて崩して謡ふべし。
○「敷島の」此處は「しき」の「き」の字へ產み字を出して輕く當てゝ謡ふべし。
○「田枯の浦そこさへ匂ふ藤波を」此初同は靜かに寛たりと謡ひ「實や思へば君ならで」より替へて謡ふべし。
○論議はさらりと寛たり謡ひ「精也とゆふ千鳥」とすらりと謡ひ「汀に」と入グリに謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。
○詩謠は長閑に寛たりと謡ふべし。

後仕手

面、增、長絹、緋大口、腰帶、扇、黑垂、天冠

○後仕手は扇を持ち一聲越して出、内へ入り常座にて開き謡ふ。
○「ふしぎやな夜も更過て」此處は懸て謡ふべし。
○「法の身の」此處は「のり」の「り」の字へ產みを字出して輕く當てゝ謡ふべし。
○「うるほひは木により藤の如くなり」此地は初同より少し引立てさらりと謡ひ、「成佛」と入グリに謡ふべし。
○「實や春を送るに」此クリ地は引立て浮やかにさら〳〵と謡ふべし。

舞曲

○此曲は靜かに濕とりと謡ふべし。
○「一葉散ては秋なりと」此處より改めて謡ひ出すべし。
○「しられしられて」此處は入グリに謡ふべし。
○序の舞三段
○「いろ紫の」此處より以下浮やかに寛たりと謡ふべし。

籠太鼓

素袍脇一人

○脇名乘其外何れも强みにはつきりと謡ふべし。

仕手

面、曲見、鬘、鬘帶、色無唐織、扇

○「科人を召こめらるゝ上は」此處は狂言の呼び出し濟て幕上げ出、二の松にて止まり謡ふ。

○此仕手は餘り重くならぬ樣、靜かに輕く謡ふべし。

○「如何に女」此處は仕手内へ入り中へ行き下に居るを見て脇より謡ひ掛るなり。

○「今の女を引たてゝ」此初同は確かりと強みにさらりと謡ふべし。

○「急ぎ籠者になすべしと」此處にて仕手は狂言の引立てる時に立ち作り物へ入り正向き下に居る。

○「實や思ひ中にあれば」此處は濕とりと謡ひ出し「つゝめども」と替へてずかりと謡ひ、込てクルべし。

○「やあ如何に女」此處は懸て謡ふべし。

○「人の心の」此處はすらりと謡ひ出し「花ならば」と少し緩めて具合を付け「風の狂ずる」よりさら〳〵と謡ふべし。

○「なほ安からぬ」此處は少し緩めて具合を付け「思ひの闇のせんかたなさに」とずかりと「物に狂ふは」より靜めて具合を付けて謡ふべし。

○「是社かたみよ」此處はずかりと謡ひ出し「よ」の字へ產み字を出して輕く當り「なつかしや」と心持を付けて謡ふべし。

○「無漸や我妻の」此地は靜かにさらりと謡ひ出し「出まじや雨の夜の」とずかりと謡ひ「盡ぬ名殘ど悲しさ」と靜め「西樓に月落て」より改めて謡ひ出すべし。

○「なふ心が亂れさむらふぞや」此處は替へて謡ひ出し「なふ」の「ふ」の字へ輕く當てゝ謡ふべし。

○「みだるゝは」此處より又替へて謡ひ出し「柳の髪か春雨の」とずかりと謡ふべし。

○「みだるゝは」此處にて仕手作り物より出、「涙にむせぶ」とシヲリながら寃ぎ夫よりイロエとなる。

○「なふ〳〵是なる皷は」此處は懸て謡ふべし。

○「面白し〳〵」此處は脇の謠を受けて込めて謡ふべし。

○「時守のうちます皷」此處は阿漕の「伊勢の海」の謡ひ方と同樣なり。

○「君は遲くて」此處より替へて乘て謡ひ「來んまでぞ」と乘を外して謡ふべし。

○「なふ此皷を撞て心が慰みたう候」此處は懸て謡ふべし。

○「皷の聲も音に立てゝ」此處は脇の謠へ直ぐ付けず、少し間を置て謡ひ出すべし。

○「皷の聲も時過て」此地は少し押へて謡ひ出し乘てさらりと謡ひ、「ひき離れ」と少し彈て謡ひ「やわら〳〵」と輕く謡ふべし。

○「戀と云ふ事も、恨みといふ事も」此處は同じにならぬ樣に謡ふべし。

○「九つの〳〵」此處は彈て謡ひ出し「あら戀し我妻の」と句讀に謡ひ「面影に立ちたり」と心持を付けて乘て謡ひ出し「うれしや責てげに」と少し替へて引立てすらりと謡ひ「二世のかひも有べけれ」とずかりと「此籠出る」と少し緩めてたつぷりと謡ひ「なつかしの此籠や」と謡ひ少し呼吸を取て「荒なつかしの此籠」と謡ふべし。

○「松浦の川や西の海」此處は引立てすらりと謡ふべし。

○「みだ誓願の誓ひかや」此地はすらりと乘て謡ひ出し「荒有難の」より緩めて謡ひ「軈て時日をうつさず」よりさら〳〵と謡ふべし。

國栖

脇　法被、大口
子方
面、直面、初冠、單狩衣、扇、大口、箔、腰帶

○一聲越して子方與かき二人、脇と出内へ入り正面先の中に立ち諷ふ。
○脇一聲ッシ其外何れもはつきりさら〳〵と諷ふべし。
○「をしか臥なる春日山」此處はさらりと諷ひ出し「よしやしばし社」より替へて諷ふべし。
○「先此所に御座をなされうずるにて候」此脇の詞濟で、子方脇座へ行き床机に掛り、夫より後見二人にて船を持ち出し常座の上に置く、前仕手。

面、三光尉、尉髮、熨斗目、水衣、腰帶、腰簑、扇、擢掉
連女。
面、姥、鬘、鬘帶、姥髮、箔、厚板着流、水衣肩取る、釣掉

○前仕手はアシライにて連を先に立てゝ出、連、仕手と船に乘り、後見より擢掉を渡す。
○「祖母や給へ」此處は懸てずかりと諷ふべし。
○「さも清見原の天子とは」此初同はさらりと諷ふべし「か程賤しき柴の戸の」より替へて諷ふべし。
○「釣掉をさし置て」此處にて仕手掉を捨て船より上り脇正へ行き下に居るなり、連も船より上り仕手の下に居る。
○「よし野の國栖と」此地はすらりと諷ひ出し「此御代よりの」と少し緩め「遵栄のあつ物」より

さら〳〵と諷ふべし。
○「いや〳〵昔も」此處は取て諷ひ出し「其如く此君も」より替へて諷ふべし、茲は「其如く」と扱て「此君も」とずかりと出して諷ふべし。
○「二度都に還幸あらば」此處は「幸」と大きく扱ひ「あらば」とずかりと諷ひ「此魚もなどかいきざらんと」と強みに懸てずかりと諷ふべし。
○「此魚もなどかいきざらんと」此處は「いきざらんと」と出して諷ふべし。
○「岩ぎる水に放せば」此地は懸てずかりと諷ひ、「思し召れよ」の諷ひ止めも靜めずにずかりと諷ひ止むべし。
○「たのもしく思し召れよ」此處は「さ」の下げを當らずにずかりと下げ「よ」の廻しを小さく廻して短かく止むべし。
○此曲の仕手と狂言との掛合は素謠に諷ふてもよろし。
○「何清見ばらひ」此處は輕く諷ふべし。
○「清見ばらひならば」此處は「ば」の字を少し引て切り「あの」と扱て「河下へ行け」とずかりと諷ふべし。
○「あら聞なれずの人の名や」此處は外して練て具合を付けて諷ひ「惣じて此山は都卒の内院にもたとへ」と替へてはつきりと諷ふべし。
○「又五臺山青凉山とて」此處は引立てすらりと諷ふべし。
○「遠くつゞける吉野山」此處は取て諷ひ出すべし。
○「はや是までぞとうかへらしめ」此處は「とう」と引て確かり切り「かへらしめ」とずかりと諷ふべし。
○「是はほす船ぞとよ」此處は落付て輕く諷ふべ

し。

○「何此船をさがさうとや」此處は少し懸て謡ひ出し「身こそ賤しう」と扱て「思ふとも」とずかりと「孫もあり」と扱て「ひこもあり」とずかりと「あの谷々峰々より出合て」と少し懸て「此狼藉人を打留候べ〳〵」と懸てずかりと謡ふべし。

○仕手は「此所にてはにつくい者なるぞとよ」と腰を立て急度見「孫もあり」と角カケ左の手にて指を折り「あの谷々峰々より」と立て右の手にて右の下を指し左の手にて左の上を指し「打留候へ〳〵」と二つ打合す型あり、故に其具合を謡ふべし。

○「なふ聞こしめせ追手の武士は」此處は仕手常座へ行き狂言の入りし跡を篤くと見て連へ向き謡ひ出すなり、茲は少し間を置て静かに謡ふべし。

○「えいと」此處は仕手と連と二人にて船を引起す型あり、茲は「え」と押へて確かりと「い」と張り「と」と捨てゝ謡ふべし。

○「船引き起し玉體の」此地は寛たりと謡ひ出し「かひなき御命」とずかりと「たすかり給ふ」と静めて謡ふべし。

○「夫れ君は舟臣は水」此處も少し引立て寛たりと謡ふべし。

○「身は十善の」此地は濕とりと謡ひ「かはるも同じ」より替へて謡ひ「夫婦の老人は」此處は必ず消し廻しに謡ふべし。

○「去程に更静まりて」此處より改めて謡ひ出し「いかにとしてか」より替へて謡ひ「三吉野なれや」より改めて謡ひ出し引立て謡ふべし、仕手と連は此地にて中入すなり。

天女

面、小面、鬘、鬘帯、黒垂、天冠、箔、長絹大口、腰帯、扇

○下り端二段開て天女出、一の松にて露取り内へ入り常座にて開き、達拜。

○下り端舞三段

○「處女子が〳〵」此處は猩々の「老せぬや」と同じ謡ひ方なり「音樂に」より強めて謡ふべし、仕手は扇を持ち此地の内に出、地謠一パイに一の松にて止まる。

後仕手

面、大飛天、赤頭、厚板、狩衣、腰帯、半切扇、かつぎ小袖

○「王をかくすや」此處は強く確かり謡ふべし。

○「則姿を顯はして」仕手は此處にてかつぎ小袖を後へ脱ぎ捨てゝ内へ入るなり。

○「一足をひつさげ」此邊より段々に運てさらりと謡ふべし。

和布刈

脇、風折、寄狩衣

○脇名乗さし共はつきりとさら〳〵謡ふべし。

○「春の野に出て摘む若菜」此處はすらりと謡ひ出し「心をいたし樣々に」より替へて謡ふべし。

前仕手

面、小尉、尉髪、小格子、水衣肩取る、腰帯扇、釣掉

連女

面、小面、鬘、鬘帯、箔、唐織着流

○眞の一聲高砂の通り。

○二の句其外高砂の通り。

○「所ははやともの」此處はさらりと謡ひ出し「甲斐あるべしや」より替へて謡ふべし。

○「ふしぎやな夕かげ過る」此處は悪て諷ふべし。
○「あきらかなれや天地の」此地は静かにさらりと諷ふべし。
○「海原やはかたの海も」此地は濕とりと諷ふべし。

居曲

○此曲はさらりと諷ふべし。
○「其後潮さしひきの」此處より替へて諷ふべし。
○論議は寛たりさらりと諷ひ「翁は老の波に」より替へて心持を付けて諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

天女

面、小面、鬘、鬘帯、黒垂、天冠、箔、長絹
大口、腰帯、扇

○天女は出端二段聞て出、内へ入り常座にて開くを見て「みぎはに神幸」と地より諷ひ掛けるなり、此地は乗て寛たりと諷ふべし。
○天女の舞三段
○「去程に〳〵」此地はずかりと諷ひ出し「沖より龍神」より進て諷ふべし。

後仕手

面、黒髭、赤頭、龍臺、厚板、法被、半切、
腰帯、打杖

○早笛二段にて一の松にて開き「龍神すなはち顕れて」の返しにて内に入るなり。
○後仕手はさらりと諷ふべし。
○「はらふや潮瀬に」此地はさらりと次第に進て諷ふべし。
○「神主たいまつふりたてゝ」此處はさらりと輕く諷ひ、地は押へて諷ひ「御鎌をもつて」よりさら〳〵と諷ふべし。

望月

前仕手

面、直面、素袍、少刀、扇

○大小座着仕手出、内へ入り常座にて諷ふ。
○仕手の名乗其外確かりとさら〳〵諷ふべし。

連女

面、曲見、鬘、鬘帯、箔、唐織着流、杖

子方

面、直面、放髪、厚板、大口、腰帯、太刀、
扇、羯鼓

○次第二段にて子方連と出、橋掛りにて向合ひ諷ふ。
○此連は次第サシ道行共普通の連よりも確かりと諷ふべし。
○「先かう御通り候へ」此處にて連、子方二人とも地の前へ行き角カケ下に居、夫より仕手は一の松へ行き正面へ向き「旅人は信濃國よりと」と諷ひ出すなり、故に茲は少し間を置て別に諷ひ出し「やがて名乗御力をつけ申さばやと存候」と諷ひて内に入り、連の前に下に居、「如何に申上候」と諷ふ、故に茲も少し間を置て別に諷ひ出し「是こそいにしへ御内に有し」と張てはつきりと諷ひ、「嬉しさの涙おぼへずこぼれ候」と心持を付けて確かりと諷ふべし。
○「扨はいにしへの小澤の刑部」此處は引立てすらりと諷ひ「今は何をかつゝむべき」より替へてさら〳〵と諷ふべし。
○「父に逢ひたる心地して」此處は中音を少し高めに諷ふべし。
○「別れし主君の面影の」此處は調子を押へて心持を付けて確かりと諷ふべし。

○「こはそも夢か現かと」此處も前の「父に逢ひたる」の所と謡ひ方同樣なり。

○「今迄は行へも知らぬ旅人の」此初同は押へて濕とりと謡ふべし。

脇、掛素袍

○脇は次第二段にて出、橋掛りにて次第を謡ひ名乘濟て狂言に宿所の事を命じる、狂言は常座へ來り案内を乞ふ。

○「言語道斷」此處は懸て謡ひ、「唯今此屋へ望月が着て候」より替へてさら〳〵と謡ふべし。

○「何望月と申か」此處は懸て謡ふべし。

○「暫く」此處は受けて直ぐ謡ひ出し少し間を置て「程が近う候」と謡ひ、又少し間を置て「なふ〳〵望月が着て候」と改めてはつきりと謡ふべし、

茲は仕手「暫く」と謡ひて立ち子方へ行き兩手を掛け「程が近う候先づ此方へ渡り候へ」と子方を引立て一の松へ連れ行き子方と連に向ひ、「なふ〳〵」と謡ひ出すなり。

○「嬉しやな望みしことのかなふよと」此處は引立てすらりと謡ふべし。

○「めくらの姿に出立ば」此處は「出立ば」と確かりと出して謡ふべし。

○「彼蟬丸の古へ」此地は初同と具合を替へて濕とりと謡ひ「今の身の上も」と少しずかりと「思ひは如何で」と緩めて具合を付けて謡ひ「かゝるうき身の」より改めて替へて謡ひ出し「盲目の」と入グリに謡ふべし。

○「一萬箱王が親の敵を打たる所を」此處は懸て一氣に謡ふべし。

○「いや〳〵苦しからぬ事」此處は取て謡ひ出し二段に出して謡ふべし。

○「爰に河津の三郎が子に」此處は脇の謠へ直ぐ付

けず少し間を置て寛たりと謡ふべし。

○「五や三の頃かとよ」此地は押へて輕くさらりと謡ふべし。

○「既に日行き」此處は「日行き」と當らずに押へて張りたつぷりと謡ひ「時來つて」とずかりと謡ひ、以下さら〳〵と謡ひ、「實哀にぞ」より靜めて具合を付けて謡ふべし。

居曲

○此曲はさら〳〵と謡ふべし。

○「劍をひつさげ繩を持」此處は心持を付けて謡ひ「走りかゝつて御首を」と少しずかりと、「打落さんと申せば」と少し緩めて謡ふべし。

○「いまいまし」此處はすらりと引立て謡ひ出し地も仕手の位を受けてさらりと謡ふべし。

○「ぬいたる刀をさやにさし」此處は「さやにさし」より進て謡ひ「敵を討せ給へや」とずかりと謡ひ捨つべし。

○「いざうたふ」此處は地の謠へ掛けて懸てずかりと謡ふべし。

○「あゝ暫く」此處は懸て謡ひ出し「何を御騒ぎ候ぞ」と落付て謡ひ「八撥を打うと申事にて候」と替へて具合を付けて謡ふべし。

○「其内にをさなき者に八撥を御擊せ候へ」此處にて仕手は心を殘して右へとり中入するなり。

○「吉野龍田の花紅葉」此處は子方後見座へ寃ぎ羯鼓を付け常座に立て謡ひ出すなり、茲は引立てすらりと謡ふべし。

○羯鼓三段

○「獅子とらでんは時をしる」此處より太鼓打出すなり。

後仕手

面、直面、紅覆面、厚板、大口、坪折、少刀

腰帶、赤頭、金扇付ける

○仕手は亂序になり出、一の松にて止まり欄干へ足を掛けて頭を振る所にて太鼓頭を重ねて打ち、夫れより太鼓流しを打ち内へ入り舞臺中央にて伏す、此處より獅子舞となる。

○獅子舞九段

○九段とは「懸り」「地の手」「地の手」「小返し」「小返し」「カンの手」「呂の手」「大返し」「留め」以上九段を云ふ。

○「餘りに祕曲の面白さに」此地は乘てすらりと謡ひ出し、次第に位進み「去程に〳〵」より替へて少し緩め、「目を引き袖を振り」より又次第に進み「敵を手ごめに」より更に一層進てずかりと謡ひ捨つべし。

○「抑おのれは何者ぞ」此處より以下脇、子方、仕手の掛合は次第に詰めて強く懸て氣合の拔けぬ樣に謡ふべし。

○「此年月の恨みの末」此地は引立てすらりと謡ひ出し「思ふ敵を」と具合を付けて緩め「討たりけり」と確かりずかりと謡ふべし。

○「角て本望とげぬれば」此處より以下引立てさら〳〵と謡ふべし。

半蔀

脇、着流僧

○脇名乘其外何れも句讀の息繼を寛たりとさらさら謡ふべし。

○「敬曰立花供養の事」此處は替へて謡ひ出すべし。

前仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、扇

○仕手は扇を持ちアシライ三つ程聞て出、内へ入り常座に立て謡ふ。

○此仕手は品能く寛たりと謡ふべし。

○「常はさふろふまことには」此處は「まことには」と出して謡ふべし。

○「五條あたりと夕顏の」此初同は靜かに濕とりと謡ひ「面影」と入グリに謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、唐織、長絹、緋大口腰帶、扇

○後仕手は狂言の語り濟て作り物を常座の上へ出し、一聲一段聞て出、作り物へ入りて謡ふ。

○此後仕手の一聲は乘て謡ふべし。

○「さらでも袖をうるほすは」此地は濕とりと謡ふべし。

○「窓燈に向ふ」此地は靜かに寛たりと謡ふべし。

○論議は寛たりと謡ふべし。

○「草の半蔀押し明て」此處にて仕手は作り物の正面より出るなり。

舞曲

○此曲は靜かにさらりと謡ひ「猶夫よりも」より替へて謡ふべし。

○「をり〳〵尋ね」此處は入グリに謡ふべし。

○「折てこそ」此處は寛たりと大きく謡ふべし。

○序の舞三段

○「ほの〴〵見えし」此地は太鼓頭に付て謡ひ出し以下靜かに濕とりと謡ふべし。

○「鐘もしきりに」此處は「鐘も」と謡ひ切り切らずにして「しきりに」と詰めて心持を付けて謡ふべし。

○「また半蔀の」此處は入グリに謡ふべし。

小袖曾我

仕手
面、直面、折烏帽子、厚板、直垂上げ、大口
腰帶、少刀、扇、弓矢
時宗
面、直面、折烏帽子、厚板、直垂上ゲ、大口
腰帶、少刀、扇、弓矢
連男、二人、太刀持
素袍
連女
面、曲見、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、扇
連男
太刀持、一人

○初めに大小座着、母、太刀持出、母は脇座へ行き下に居、太刀持は其下に下に居るなり。

○次第二段にて、仕手、時宗、連男二人と出、内へ入り、向き合ひ謡ふ。

○次第サシ下歌上歌其外何れも勢よくさらりと謡ふべし。

○母は普通の連より調子を扣へて確かりと謡ふべし。

○「いつしか親子の御歳れ」此處は寛たりと謡ふべし。

○「高間の山の峰の雲」此初同は引立てすらりと謡ひ出し「同じ子に同じはゝその」より替へて謡ふべし。

○「いつしか守乳母まで」此處はさらりと謡ひ出し「心がはりし」とたつぷりと謡ひ「春日野の」とずかりと以下さらりと謡ふべし。

○「今思ひ出したり」此處より替へて謡ふべし。

○「御誓言に蔀遺戸を」此處は乘てすらりと謡ふべし。

○「立てそへられて忙然と」此地はさらりと謡ふべし。

○「みす几帳もをりたり荒」此處は「をりたり」と當らずにいきなり下げ「荒」と確かり出して謡ふべし。

○「招かれて山のかせぎ」此地はすらりと謡ひ出し「泣々來りたり」とずかりと「打れても親の杖」とさらりと「なつかしければ」と具合を付けて緩めて謡ふべし。

○「先畏つたると申候へ」此處は輕く取て謡ひ「某存る仔細の候間」と替へて確かりと謡ふべし。

○「惣じて祐成をも寔は思ひ」此處は引立てすらりと謡ふべし。

居曲

○此曲は靜かにさらりと謡ふべし。

○「恨み顏にて」此處は入グリに謡ふべし。

○「此程時宗が」此地はさらりと謡ひ出し「餘りの嬉しさに」より改めて引立てすらりと謡ひ出すべし。

○「高き名を、雲井にあげて富士の根の」此處は引立てすらりと謡ふべし。

○男舞、三段

○「舞のかざしの其ひまに」此處より以下勇しく、さら〳〵と謡ふべし。

高野物狂

前仕手
面、直面、放髮、段裏斗目、掛素袍、少刀、
太刀、腰帶、珠數、扇

○仕手は次第二段にて珠數を持て出内へ入り常座にて大小へ向き謡ふ。

○次第名乗其外何れも確かりと諷ふべし。
○「昔在靈山名法華」此處は濕とりと諷ふべし。
○「視眼慈衆生」此初同は靜かに濕とりと諷ふべし。
○初同の内に狂言出て地謠濟て仕手へ文を渡し說賦あり、仕手は之を受け取り「荒心許なや」と諷ふ。
○文の諷ひ樣は、諷ひ出しを輕くずかりと諷ひ、句讀を確かりと諷ふべし。
○此文はすらりとはつきりと諷ふべし。
○「然るに、一子出家すれば」此處より改めて諷ひ出し「思ひ」と諷ひ切り切らずに「切りつゝ」と出して力を入れて確かりと諷ひ「父母に別れし」より替へて諷ひ出し、「御名殘こそ惜う候へ」と靜め「かまひて尋ね給ふなよ」と改めて諷ひ出し「かならず〳〵」と出して別に諷ひ「唯名殘こそ惜う候へ」と靜め「墨衣」より替へて調子を下げはつきりと諷ひ、「さすが世を」と少し緩めて諷ふべし。
○「恨めしの御事や」此地はすらりと諷ひ出し、「三世の道の」邊より次第に運び「今は散りゆく」より改めて諷ひ出し濕とりと諷ひ「行へは」と入ゞりに諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。
○中入に作り物を見付柱の際に出す。
脇、着流僧、一人
子方
面、直面、角帽子、熨斗目、水衣、腰帶、珠數、扇
○次第二段にて子方、脇と出、内へ入り、向合ふ。
○「昨日重ねし花の袖」此次第は强くずかりと諷ふべし。

後仕手
面、直面、折烏帽子、厚板、大口、水衣肩取る、腰帶、扇、笹に文付る
○後仕手は一聲越して出、笹に文を付けたるを持ち一つ松にて開き諷ふ。
○「薄墨に書く玉章と見ゆるかな」此處は乘てすらりとはつきりと諷ふべし。
○「我も主君の御ゆくへ」此處は「も」の字へ產み字を出して輕く當り「主君の」と延びぬ樣に確かりと諷ひ「御ゆくへ」とすらりと、以下さらりと諷ふべし。
○「陸奥紙に」此處は「がみ」と寄せて確かり張て諷ふべし。
○「呼ぶ子鳥」此處は替へて乘てすらりと諷ふべし。
○「さそはれし、花のゆくへを尋ねつゝ」此處はすらりと懸て諷ふべし。
○「肌身に添ふる此文を」此處は仕手笹に付けたる文を見る型あり「肌身に添ふる」と込てクり、「此文を」と具合を付けてたつぷりと諷ふべし。
○「朝もよひ紀の關越へて」此地はすらりと諷ひ出し「爰も筑波の山やらんと」と「と」の廻しを消し廻しに諷ひ「我かたを」と心持を付け緩めて諷ひ出し「思ひ出の」とさらりと諷ふべし。
○「立のぼる雲路の」此處は靜めて諷ひ「爰はいづく高野山に」の「に」の字を確かりと止め、「來てみれば」とずかりと諷ひ「たうとやな」と心持を付けて確かりと締めて諷ひ「或は念佛」とたつぷりと「物ぐるひの」とすらりと、「狂ひさむる心の」とずかりと懸て輕く諷ふべし。
○「いつかさて」此處は乘てさらりと諷ひ出し、返しの地もさらりと諷ひ「などか」とたつぷりと

「主君に」と當らずにいきなり下げ「念頃に」とたつぷりと諷ひ「三鈷の松の本に」とさらりと諷ふべし。

○「不思議やな姿を見れば」此處は懸て諷ふべし。

○「實能御覽ぜられて候」此處は落付てすらりと諷ふべし。

○「是は御利益とも覺えぬ物かな」此處は取て込めて諷ひ出し「人をも尋ね」の「ひ」を押へ「と」と張て諷ふべし、茲は「ひと」と延びぬ樣に詰めて諷べし。

○「歸り出よの御說敎」此處は「歸り」と押へてたつぷりと張り「り」の字を浮かして產み字を輕く下げ「出よの」と別に出して、ハネを確かりとハネて「御說敎」と輕くすらりと諷ひ「心得ず」と强めに「こそ候へ」と弱めて崩して諷ふべし。

○「心得ずこそ候へ」此一句は輕く諷ふべし。

○「入定るとは入定よなう」此處は落付て諷ひ、「忝も高野の內にて」より替へてはつきりと諷ひ、「高野に參るは順義ならずや」と少し懸て諷ふべし。

○「いや」此處は「い」と押へて產字を張て「いィ」と長く延びぬ樣に短かく諷ひ、直ぐに「や」の字へ移るべし。

○「あふ殊勝なり」此處は懸て諷ふべし。

○「昔薩埵の印明を授かり」此處は寬たりと諷ふべし。

○「大師の待給ふは」此地は押へて濕とりと諷ふべし。

舞曲

○此曲は靜かに濕とりと諷ひ「然れば即身」より改めて諷ひ出し「深々たる奧の院」と締めて確かりと諷ひ「深山鳥の聲聞て」と具合を付けて諷ふべし。

○「谷峯の風」此處は「谷」と下をサシ、「峯の風」と上を見る型あり、故に茲は「谷」と輕く「峯」と確かりと諷ひ「谷」と「峯」とを分けて諷ふべし。

○「法の秒名」此處は乘て諷ひ出し「心耳に」と入グリに諷ひ「となへ」とたつぷりと押へて張り「聲は高野にて」と少しずかりと「靜かなる」と緩め「靈地なりけり」と少し靜めて諷ふべし、茲は普通の曲止の如くに靜めて諷はず「尋ねこし」と間を置かずに曲止めへ直ぐ付けて强みにずかりと諷ふべし。

○中の舞三段

○「霞の奧の、高野山」此處は押へて確かりと諷ふべし。

○「花壇上」此處より乘てさらりと諷ふべし。

○「彼よりも是よりも」此處は「彼よりも」の「よ」と「り」とを寄せて「り」にて下げ「是よりも」は前と同じく「よ」と「り」とを寄せて「よ」にて下げて諷ふべし。

○「物狂ひ〳〵」此處は「物ぐるひ」の「ぐ」と「る」とを寄せて「る」にて下げ、返しは「物」の「も」と「の」とを少し引き、「ぐ」にて當らずに下げて諷ふべし。

○「荒忘れや」此處は「わすれや」と「わ」の字を當らずに下げて「や」の字を引かずに短かく止むべし。

○「高野の內にては」此處は乘を外してさらりと諷ふべし。

○「忘れて狂ひたり」此處より運で諷ひ「ゆるさせ給へ御聖」の返しより靜めて諷ふべし。

○「忘れて狂ひたり」此處は入ぐりに謡ふべし。
○「不思議やなあれにましますは」此處は取て謡ひ出しさらりと謡ひ「御情なや候」と確かりと謡ふべし。
○「是はふしぎの」此脇は寛たりとはつきり謡ふべし。
○「さん候」此處は「さ」の字へ當てゝ謡ひ、謡ひ止めを輕く止めて地へ渡すべし。
○「三世の契り」此處はさら〳〵と謡ふべし。
○「本より誠の狂氣ならず」此處より替へて謡ひ「軈て元結」と押へてたつぷりと張り「御供申志」より次第に靜めて謡ふべし。

大江山

山伏脇、數人

○脇一聲サシ其他何れも强みに懸てさら〳〵と謡ふべし。
○「月の都を立出て」此處はすらりと謡ひ出し、「惠にもるゝ方あらじ」より替へて謡ふべし。

前仕手

面、童子、白鉢卷、黑頭、厚板、緋大口、唐織、坪折、腰帶、唐團扇

○前仕手は狂言の呼び出し濟て唐團扇を持ち幕離れにて狂言へ向き踏み止め「童子とよぶは如何なる者ぞ」と謡ふ。
○仕手は「中門のわきの廊に留め申候へ」と謡ひて内へ入り、臺へ上り平臥して「如何に客僧達」と謡ひ出すなり。
○「神だにも」此處は「かみ」の「み」の字へ產み字を出して輕く當り「だ」と當らずに浮かして「に」と中に下げて謡ふべし。
○「一兒二山王とたて給ふは」此初同はすらりと謡ふべし。

○「陸奥の安達が原の」此地はすらりと謡ひ出し「いざ〳〵酒を呑うよ」より改めて謡ひ出し「扨おさかなは何々ぞ」より替へて謡ふべし。
○「實まこと〳〵」此處は少し懸て謡ひ出し。「呑酒は數そひぬ」より替へて謡ひ、「興がる」と入ぐりに謡ひ「うち見には」より替へて謡ひ「猶々廻る」より又替へて「足もとはよろ〳〵と」とずかりと「雲折敷て」と輕く入ぐりに謡ふべし仕手は此地にて中入するなり。
○「其長二丈ばかりなる」此地は確かりと謡ひ出し「兼て期したる」より替へて謡ひ「心をひとつにして」より又替へてすらりと謡ひ出し「稻妻震動」と替へて確かりと締めて謡ふべし。

後仕手

面、シカミ、色鉢卷、赤頭、厚板、法被、半切、腰帶、打杖

○「情なしとよ客僧達」此處は仕手作り物引廻しの内にて打杖を持ち謡ふ、茲は懸て謡ふべし。
○「山河草木震動して」此地は乘て確かりと謡ふべし、此地の返しにて作り物の引廻しを卸す。
○キリは乘て强みにさら〳〵と謡ふべし。

野守

山伏脇、一人

○脇、次第名乘道行其外何れも强みにさら〳〵と謡ふべし。

前仕手

面、三光尉、尉髮、熨斗目、水衣、腰帶、杖

○仕手は杖をつき、一聲越して出、内へ入り常坐に踏み止め謡ふ。
○「春日野の」此一聲は强みにすらりと謡ふべし。

○「是に出たる老人は」此處はさらりと諷ひ、「有難や慈悲萬行の」より替へてはつきりと諷ふべし。

○「むかし仲麿が」此處も强みにすらりと諷ふべし。

○「立よれば實も野守の水鏡」此地は强みにすらりと諷ひ出し「實やしたひても」より改めて諷ふべし。

○語りは句讀を確りと切り寛たりと諷ふべし、「何しに御鷹の水の底に」よりすらりと諷ひ「實もまさしく水底に」と懸て諷ふべし。

○「あるよと見えて白ふの鷹」此地は懸て强みに諷ひ「鷹は木居に」より靜めて諷ふべし。

○「扨こそはし鷹の」此地はさらりと諷ひ出し、「誠にかしこき時代とて」より替へて諷ひ、「叡慮に」と入グリに諷ひ、「老の思ひ出の」より段々靜めて諷ふべし。

○論議は寛たりとさら〳〵諷ふべし、仕手は此地にて作り物へ中入すなり。

○「かゝる奇特にあふ事も」此處は强みに確かりと諷ひ、「祈りけり」と捨てゝ諷ひ「我年行の」より替へて少し靜めてさらりと諷ひ、「南無歸依佛」と替へてすらりと諷ふべし。

後仕手

面、小癋見、赤頭、唐織、厚板、法被、半切腰帶、扇、鏡

○後仕手は作り物の内にて左に鏡、右に扇を持ち、出端一段聞て諷ひ出す。

○「鬼神に横道」仕手は此地にて作り物の後より出るなり。

○「鬼神に横道」此地はすらりと進み諷ひ、「顯はれたり」と靜めて確かりと諷ふべし。

○「恐ろしやうちひかゝやく」此處は懸て諷ふべし。

○「恐れ給はゞ歸らんと」此處は强くずかりと諷ふべし。

○「鬼神は塚に入らんとすれば」此處は「すれば」と三字を寄せて强く、詞の「出し」の如くに出してずかりと諷ふべし。

○「臺嶺の雲をしのぎ」此地は具合を付けてすらりと運て諷ふべし。

○「東方降三世明王も」此處は左の如くに諷ふべし。

△△△△○○●○△△△△△○○●○
東方ヲヽ　降三世ヱ明王も

○「まづ地獄道」此處は少し靜めて諷ふべし。

○キリは强みにさら〳〵と諷ふべし。

氷室

脇、大臣三人

氷室

○脇次第名乘共高砂の通り、

○「花の名のしら玉椿」此處は少し懸てさらりと諷ひ出し「雲路の末の」より替へて諷ふべし。

前仕手

面、小尉、尉髮、小格子、大口、水衣、腰帶扇、エブリ

連男

面、直面、放髮、厚板、水衣、大口、腰帶、扇

○眞の一聲高砂通り

○二の句其外總て高砂の通り

○「かはらぬや氷室の山の深綠」此處はすらりと諷ひ出し、「霜の翁の」より替へて諷ふべし、茲にて仕手と連と入り替る事常の通り。

○「昔御獵の廣野に」此語りは句讀の息繼を寛たりと確かり諷ふべし。

○「袖ひちて結びし水の氷れるを」此初同は餘り重くならぬ樣すらりと謡ひ、「ましてや春過夏たけて」より替へて謡ふべし。

○クリ地は引立てさち〳〵と謡ふべし。

居曲

○此曲は確かりと謡ふべし。

○「げに我ながら身の業の」此處より替へて謡ひ出し、上端後の地は引立てすらりと謡ふべし。

○仕手はクリ地より下に居、「手に取るからにゆらく玉の」より立て型あり。

○論議は寛たりと確かり謡ひ「人社しらぬ此山の」より位を付け締めて謡ひ、地も亦締めて確かりと謡ふべし、仕手は此地にて作り物へ中入するなり。

天女

面、小面、鬘、鬘帶、黒垂、天冠、箔、長絹

大口、腰帶、扇

○天女は出端二段聞て扇を持て出、一の松にて兩露を取るときに「樂にひかれて古鳥蘇の」と地より謡ひ掛け、天女は内へ入り常座にて開き達拜して舞になる。

○天女の舞三段

後仕手

面、大飛天、唐冠、赤頭、厚板、狩衣、半切

腰帶、扇、氷

○「曇りなき、御代の光もあまてらす」此處は仕手作り物の内にて床机に掛り、氷を兩手に持ち、天女の舞留め打上聞て確かりと謡ひ出すなり。

○「長じては又」此處は乘りを外して謡ふべし。

○「山河も震動し」此地は引立て確かりと強く謡ひ出し、次第にすらりと謡ひ、「さえかゝやきてぞ」より段々靜めて謡ふべし。

○「谷風水邊」此處は少し靜めて謡ふべし。

○「霰は横ぎりて」此處より次第に進て謡ひ、「深井の氷に閉付らるゝを」と確かりと締めて、「引放し〳〵」とずかりと謡ひ、「浮み出たる」より進て謡ふべし。

○「かしこき君の御調なれや」此處は少し靜めて謡ひ、返しの地よりさらりと謡ひ「袂に添て」より押へて確かりと、「花の都へ雪をわけ」より替へて引立てすらりと、「すはや都も」より一層さらりと運て謡ふべし。

熊坂

脇、着流僧、一人

○脇、次第名乘道行共寛たりと謡ふべし。

○「山越て近江路なれや海水の」此處はすらりと謡ひ出し「野路篠原に」より替へて謡ひ出し、「色付」と入クリ謡にふべし。

前仕手

面、直面、角帽子、熨斗目、水衣、腰帶、珠數、扇

○呼び掛け

○「御弔ひを身にうけば」此初同は濕とりと謡ひ「受よろこばゞ」と輕くさらりと、「それこそ主よ」と緩めて心持を付け「廻向は草木」より替へて謡ふべし。

○語りは強みにさらりと謡ひ、句讀の息繼を確かりと謡ふべし。

○「なんぼう淺ましき」此處は「なんぼう」とたつぷりと「淺ましき世を捨者の」とさらりと運び「所存候」と靜めて謡ひ「師匠なき手がら」と調子を替へて謡ふべし。

○「似あはぬ僧の腕だて」此處はさらりと謡ひ、「か

様の物語」より改めて諷ひ出し、「眠藏に」と押へて張り「入るよと見えつるが」とすらりと、「かたちも」と入グリに「草村と」とたつぷりと「夜を明したる」より段々静めて諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○詩謠は寛たりと諷ふべし。

後仕手

面、長霊癋見、長範頭巾、厚板、法被、半切腰帯、長刀

○後仕手は長刀を持ち出端一段にて出、一の松にて開き諷ふ。

○「東南に風たつて」此處は強みに確かりと諷ふべし。

○「月は出ても朧夜なるべし」此地は乗て諷ひ出し、次第に運て諷ひ、「淺ましや」と静めて確かりと諷ふべし。

○「扨も三條の吉次信高とて」此處は引立てすらりと諷ふべし。

○「引場も四方に」此處は「四方に」と扨て諷ふべし。

○「すこしもふさで有けるを」此邊より次第に詰めてさらりと諷ひ「いれと」と捨て諷ふべし。

○「いふこそ程も久しけれ」此地はすらりと諷ひ出し、次第に進て諷ひ「然れども牛若子」と替へて静め、「しゝふしん虎亂入」邊より次第に進み「熊坂いう樣」と又替へて少し静め「あら笑止や」と少し具合を付けて諷ふべし。

○「熊坂思ふよう」此處は替へて少し静めて諷ひ返しより次第に運て諷ひ、「中に抓で」と烈しく「討れたる者どもの」と少し緩め、「牛若子は御覽じて」より替へて諷ひ、「いらつて熊坂左足を踏み鐵壁も通れと」と烈しく、「こゝやかしこと」より又替へて諷ふかし。

○「打物わざにてか、ふまじ」此處より乗て諷ひ出し「追駈おつゝめ」より次第に進て諷ふべし。

○「蜻蛉いなづま水の月かや」此處は「いなづま」の「ま」の引より弱めて諷ひ「手にとられず」と少し静め、「次第〳〵に重手はおひぬ」より替へて「弱り行て」と静めて確かりと諷ふべし。

○「此松が根の」此處は乗を外してすらりと諷ふべし。

○「苔の露霜と」此處はずかりと諷ひ「消しむかしの」よりさらりと諷ひ「夜もしら〳〵と」より段々静めて諷ふべし。

吉野静

脇、掛素袍

○「定めなき世の中々に」此脇の次第は蟬丸のより

は輕くさらりと諷ふべし。

○脇名乗及び狂言との掛合の所はさら〳〵と諷ふべし。

○「御はからひのよしの山」此初同はさらりと諷ふべし。

仕手

面、増、鬘、鬘帶、箔、長絹、緋大口、腰帶扇。静烏帽子

○仕手はアシライにて出、一の松にて止り諷ふ。

○此仕手は華やかに輕くさら〳〵と諷ふべし。

○「すこぶる忠勤を抽て私の省みさらになし」此處は「さらになし」と當らずに中に下げて諷ふべし。

舞曲

○此曲は静かにさらりと諷ひ「されば義經は」より替へて諷ひ出し「防矢」と入グリに諷ふべし。

○中の舞三段
○「しづや賤」此處は寛たりと謡ふべし。
○「大かた舞の面白さに」此地は乗てさら〳〵と謡ふべし「心しづかに」此處は入グリに謡ふべし。

小鍛冶

脇、烏帽子、掛素袍

○大臣常の通り
○大臣名乗其外さらりと謡ふべし。
○脇は確かりと謡ふべし。
○「此上は兎にも角にも」此處は確かりと謡ひ出し、返しの地より弱めて謡ふべし。
○「御劍の刄の」此處はずかりと謡ひ「の」の字を消し廻しに謡ひ「みだるゝ心」と緩めて謡ひ「去ながら御政道」より替へて謡ふべし。
前仕手

面、童子、黒頭、白鉢巻、箔、水衣、腰帶、扇

○呼び掛け
○此仕手は輕くさら〳〵と謡ふべし。
○仕手は脇の「されば社夫れに付ても」と云ふ詞の邊にて長短見合せ内へ入るなり。
○「壁に耳岩の物いふ」此地はすらりと謡ひ出し「唯たのめ此君の」より替へて謡ふべし。
○クリ地は引立てさらりと謡ふべし。
居曲　二段曲
○此曲はさらりと謡ふべし。
○「頃は神無月」此處より替へて謡ひ「夷四方をかこみつゝ」とすらりと謡ひ「枯野の草に」より段段運び「尊つるぎを拔て」と少し靜め、返しの地よりさらりと運で「炎も立ち退けと」より次第に進て謡ひ「其後四海治まりて」より替へて少し緩め「心易くも」より段々靜めて謡ふべし。

○仕手は「尊つるぎを拔て」の返しより立て型あり。
○「其時我を待給はゞ」此處は「待給はゞ」と出して強みにずかりと謡ふべし。
○「通力の身を變じ」此地は確かりと謡ひ出し、「夕雲の稻荷山」より進て謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。
○「宗近勅に隨て」此處は確かりさらりと謡ひ、「幣帛を捧」と捨てゝ謡ひ「あをぎ願はくば」より替へて謡ふべし。
○「ねがはくは」此處より棄て確かりと謡ふべし。
○祝詞は常の通りすらりと謡ひ、句讀を確かりと謡ふべし。
○「謹上再拜」此處は張てすらりと謡ふべし。
後仕手

面、小飛天、赤頭、狐立載、厚板、法被、扇上、半切、腰帶、槌

○仕手は右に槌を持ち早笛二段聞て出、内へ入り常座にて正へ開くを見て、地より「いかにや宗近」と謡ひ出すなり。
○「いかにや宗近勅のつるぎ」此地は懸て謡ふべし。
○「童男壇の上にあがり」此處は働き濟み打上を聞て少し靜めて謡ひ出すなり。
○「さて御劍のかねはと問ば」此處より別に出して懸て謡ふべし。
○「打たて申すみつるぎの」此處は少し緩めてたつぷりと謡ふべし。
○「天下第一の」此處は「天下」と確かりと「第一の」とさらりと謡ふべし。
○「五穀成就も」此處より少し張て謡ひ「稻荷の峰

「にぞ」より段々静めて謡ふべし。

鶴　龜

仕手。

面、直面、唐冠、色鉢巻、狩衣、厚板、半切、腰帯、團扇

○初に大小座着て作り物を出し、狂言の口明濟み、眞の來序にて仕手出、内へ入り、常座の上にて止め左へとり臺へ上り正面して床机に掛け、打上を聞て謡ひ出すなり。

○此仕手は充分位を取り寛たりと謡ふべし。

○「庭の砂は金銀の」此初同は静かに濕とりと謡ふべし。

鶴

面、直面、鬘、鬘帯、黒垂、鶴箔、大口、唐織、坪折、腰帯、扇、

龜

面、直面、黒垂、色鉢巻、龜厚板、大口、腰帯、厚板、坪折、扇、

○中の舞　三段

○「千代のためしの數々に」此地は確かりと謡ひ出し、「帝も御感の」より段々静めて謡ふべし、

○樂、五段

○大臣、脇三人

○「月宮殿の白衣の袂」此地は柔かく華やかにさら〳〵と謡ふべし。

春　榮

○脇、直垂、上下

○「是は高橋權頭家次にて候」此脇の名乘は句讀の息繼を寛たりと確かり謡ふべし。

仕手。

面、直面、放髪、厚板、大口、掛素袍、扇、腰帯、小刀、笠、守

○連男

素袍、太刀持

○子方

放髪、箔、長絹、扇、文

○子方は初めに大小座着て出、脇座へ行き下に居る。

○仕手は文を懐中して笠を着、次第二段聞て太刀持と出、橋掛りにて向き合ひ謡ふ。

○地次第にて笠を取り「是は武藏國の住人」と名乘り、名乘濟みて笠を冠り「住なれし」と道行を謡ふ。

○次第道行とも濕とりと謡ふべし、「名にのみ聞し」より替へて謡ふべし。

○「何迚りようじなる事をば」此處は强みに少し懸て謡ふべし。

○「やあいかに春榮めづらしや」此處は懸て謡ひ「扨も今度」より替へて緩めて謡ふべし。

○「猶も家人とくだすかや」此處は取て寛たりと謡ひ「深山木の」よりすらりと謡ふべし。

○「山皆そむる時雨にも」此處は寛たりと謡ふべし。

○「あふ是は逆罪たるべきに」此處は懸て謡ふべし。

○「いや、とにかくに命を捨る迄ぞ」此處は懸て謡ひ、「刀は參らせず」とずかりと「なふ御芳志に」と懸て謡ふべし。

○「命を助け申さんとてこそ」此初同はさらりと謡ふべし。

○「種直も春榮も」此地は押へて濕とりと謡ひ「四人守護の」よりさらりと謡ふべし。

○「や、何と申ぞ」此處は驚きたる具合に「や」と謡ひ、少し間を置て「何と申ぞ」と懸て謡ひ「あら何ともなや」と外して替へて謡ひ、「又鎌倉より」と氣を替へて懸て謡ふべし。

○「扨は力なき事」此處は輕く謡ひ「某をも諸共に」と落付て謡ふべし。

○「如何に春榮」此處は取て謡ふべし。

○「汝は故郷に歸り」此處は靜かにおさめて謡ふべし。

○口説は句讀を確かりと切り具合を付けて濕とりと居付かぬ樣にさら〳〵と謡ふべし。

○「荒さだめなや」此處は調子を押へて濕とりと謡ふべし。

○「歎き給はん母上の」此地は靜かにさらりと謡ふべし。

○クリ地は調子を少し控へてすらりと謡ふべし。

居曲

○此曲は淋しくさらりと謡ふべし。

○「殊更此國は」此處より替へて謡ひ、「所を思ふも賴もしや」より以下濕とりと謡ひ、「ふたゝび」とずかりと運て切り、句讀に謡ひ「花やさきぬらん」とすらりと謡ひ短かく確かりと謡ひ止むべし、

○「靜まり給へ高橋殿、鎌倉よりの早打なり」此處は間の抜けぬ樣地謠へ掛けて謡ひ出すべし。

○「すは又早打來れるは」此處は少し間を置て謡ひ出し、「遲しきれとの御使か」と懸て謡ふべし。

○「あゝ嬉しし〳〵先讀ん」此處は懸て謡ひ、句讀を確かりと置て別に「何々苦宮別當の」と謡ひ出すべし。

○「殘りは先々讀みても無益」此處は上より出して懸て謡ふべし。

○「早助くるぞ春榮と」此處は强く懸て謡ひ出し

「春榮と」と出してずかりと謡ふべし。

○「太刀の下より引立て」此地は引立てすらりと謡ふべし、茲より無常の心を替へて祝言となるに付浮やかにさら〳〵と謡ふべし。

○「重て千秋萬歲の」此處は「萬歲の」と出して謡ふべし。

○「なほよろこびの盃の」此地は陽氣にさら〳〵と謡ひ、「猶々廻る盃の」より替へて謡ふべし。

○男舞「達拜掛り」三段

○「千代の蔭そふ」此地は打上頭に付て謡ひ出し乘て陽氣にさら〳〵と謡ふべし。

碓

○素袍脇、一人

連女

面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流

○大小座着連女出、内へ入り地の上に角カヶ下に居、夫より脇出内へ入り常座に立て名乘を謡ふ。

○此脇は位を取り確かりと謡ふべし。

○連は「必ず今年の暮には御下りあらふずるにて候」と謡ひ、立て常座へ行き正面して道行を謡ひ、「芦屋の里に着にけり」にて大小へ着き「先々案内を申さうずるにて候」と謡ひ一の松へ行き、幕へ向き、「如何に誰か御入候」と謡ひ後見座へ寃ぐなり。

前仕手

面、深井、鬘、鬘帶、箔、扇

○仕手はアシライにて出、三の松にて止め正面してサシを謡ひ出すなり、此謡ひ出しには口傳あり。

○「夫鴛鴦の衾の下には」此處は淋しく濕とりと謡ふべし。

○「比目の枕の上には浪を隔つる愁あり」此處は「愁あり」と出してたつぷりと押へて心持を付けて諷ふべし、「袖に餘れる涙の雨の」仕手は茲にてシオル型あり、故に茲は心持を付けて諷ひ、「晴間まれなる」と締めて心持を付けて諷ふべし。

○「何夕霧と申か」此處は怨慕の風情を諷ふべし、茲は少し調子を押へて諷ひ、「恨めしながら珍らしや」より替へてはつきりと諷ふべし。

○「鄙の住居に秋のくれ」此處は淋しく濕とりと諷ふべし。

○「三年の秋の夢ならば」此地は靜かに押へて濕とりと諷ひ、「實や僞りの」より替へて諷ひ、「愚の心やな」より一層締めて諷ふべし。

○「荒ふしぎや」此處は物音を聞く型あり、輕く諷ふべし。

○「げにや此身のうき儘に」此處は取て濕とりと諷ひ出し、「唐土に蘇武と云ひし者」より變てはつきりと諷ふべし。

○「いざ〳〵礑うたんとて」此處よりは前と全く替へて引立てはつきりと諷ふべし、茲は後見作り物を持ち出し正先へ置き、仕手は肩脱ぎ扇を持ち作り物を篤と見て諷ひ出すべし。

○「衣に落て松の聲」此次第は押へて濕とりと諷ふべし、仕手は此處にて窕ぎ、地取にて正面して「音信の」と諷ひ出すなり。

○「きうろう高くたつて」此處は引立て高くすらりと諷ふべし。

○「蘇武が旅寐は北の國」此地はさら〳〵と諷ひ出し、「吹をくれと」と心持を付けて少し靜め「まどほの」と句頭に諷ひ、「衣うたふよ」と靜めて諷ふべし。

○「舊鄉の軒端の松も心せよ」此地はさらりと諷ひ出し、「君がそなたに」と切て呼吸を取り、「ふけや風」と締めて諷ひ、「餘りに吹て」より替へてさらりと諷ひ出し、「衣はたちも」と少し靜め「夏衣」とずかりと、「うすき契りは」よりさら〳〵と「彼織女の」より替へて諷ひ出し、「あふせ甲斐なき」と少し靜めて確かりと、「梶の葉もろき」とたつぷりと「水かけ草ならば」と乘てすらりと諷ふべし。

○「文月七日のあかつきや」此處はすらりと諷ひ出し「人にしらせばや」と靜め「月の色」とずかりと諷ひ「風のけしき」と緩め「影にをく霜迄も」より締め「礑の音」とずかりと諷ひ、「夜嵐」と緩め「まじりて落る」と切て呼吸を取り「露涙」と靜めて諷ひ「はろ」と輕く寄せて切り呼吸を取り「はろはら〳〵」と輕く諷ひ「はらと」と靜めて確かりと諷ひ、夫より次第に靜めて諷ふべし。

○「恨めしや責ては年の暮をこそ」此處は押へて濕とりと諷ひ出し「扨は」とずかりと諷ひ、「はや」と心持を付けて緩め以下段々靜めて諷ふべし。

○「思はじと思ふ心も」此地はめつて濕とりと諷ふべし。

○「聲も枯野の虫の音の」此地は締めて濕とりと諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○「むざんやなさしも契りし」此脇の詞は重く確かりと諷ふべし。

○「先だつぬ悔の八千たび」此待謠は締めて確かりと諷ふべし。

後仕手

面、痩女、白練、坪折、大口、杖、腰帶、扇、

○後仕手は杖をつき出端にて出、常座にて踏み止

め諷ふ。

○此後仕手は凄みを持ち柔かに諷ふべし。

○「びようばい花の」此處はすらりと柔かに諷ひ出し「去ながら我は邪淫の」より少しさらりと諷ひ「獄卒」と押へてたつぷりと張り玆より靜めて諷ふべし。

○「うてやゝ〳〵と」此處は初を強みに跡を弱めに諷ひ「むくひの礎」と作り物を見る型あり、玆は押へてたぷりと張て心持を付けて諷ふべし。

○「因果の忘執」此處は「因果」の「い」の字を下より出し「ん」の字を押へて張り「の」の下げより強みに引て「忘執」と弱く押へて諷ふべし。

○「火焔と成て」此處より以下強みに確かりと諷ふべし。

○「羊のあゆみ」此地はさらりと諷ふべし。

○「恥かしや思ひ妻の」此邊よりすらりと運び、「末の松山」とたつぷりと張り、「あらよしなやそらごとや」とずかりと諷ひ、「そもかゝる人の」と少し具合を付け、「心か」とずかりと諷ふべし。

○「烏鳥おふそどりも心して」此處より替へて引立て諷ひ、「萬里の南國に」より次第に運び、「淺からざりし」と入グリに諷ひ、「夢とも」と突込て強みに諷ひ「思ひしらずや」と靜め、「恨めしや」と心持を付けてずかりと諷ひ、確かりと止めて諷ふべし。

○「法華讀誦の力にて」此地は前と全く替へて調子を低く押へて確かりと締めて諷ふべし。

○「うちしきぬたの聲のうち」此處は「聲のうち」と別に出して締めて諷ひ「ひらくる法の」と替へて充分に調子を押へて確かりと諷ふべし。

車僧

脇、大口僧、一人、

○脇次第道行其外何れもさらりと諷ふべし。

前仕手

面、直面、角帽子、放髪、頭巾、篠掛、厚板、大口、水衣、腰帶、珠數、少刀、扇、

○呼び掛け

○此仕手は強みにさらりと諷ふべし。

○「偖お僧のすみかは」此處は仕手内に入り常座に立て諷ふ。

○「三界無安猶如火宅をば」此初同はすらりと諷ふべし。

○「めぐるも直なる道なりけりあふ」此處は「あふ」と出してずかりと短かく諷ひ止め、少し呼吸を取り「乘り得たり〳〵」と諷ふべし。

○「乘り得たり〳〵」此處は初めを具合を付けて緩めて諷ひ、返しをずかりと諷ひ、廻しを消して息繼に諷ひ「見聞人」と諷ひ出すべし。

○「見聞人こゝろ空なる雲水の」此地はすらりと諷ひ出し「よばゝりて夕山の」より進て諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、大癋見、赤頭、大頭巾、厚板、狩衣、半切、腰帶、打杖、羽團扇、

○後仕手は打杖を後に挿し羽團扇を持ち大癋二段聞て出、内へ入り常座にて開き諷ふ。

○「愛宕山、樒が原に雪積り」此處は確かりと諷ふべし。

○「善惡二つは兩輪の如し」此地は寛たりとたつぷり諷ふべし。

○「佛あれば衆生もあり」此處は打上を聞て乘て諷ひ出すべし。

○「祈らば祈るべし」此處も打上を聞て諷ひ出し段

段に懸て「行競せん」とずかりと懸て諷ふべし。
○「などかはひかで」此處は心持を付けて確かりと諷ふべし。
○「拂子をあげて虚空をうてば」此處は懸て諷ひ出し「うてば」と強く出してずかりと諷ふべし。
○「ふしぎやな此車の」此地はすらりと諷ひ出し具合を付けて乗てさらりと諷ひ「車とぞ成たりける」の廻しを消して息繼に諷ひ、「小車の」と諷ひ出すべし。
○論議はさらりと諷ふべし。
○「うてどもゆかず」此處は確かりと諷ひ「とむれば進む」よりすらりと諷ひ「まことに奇特の」より替へて諷ひ「合掌しいてこそ」より段々靜めて諷ふべし。

羅生門

脇、折烏帽子、掛素袍、
○連、脇と同じ。
○脇次第其外總て確かりと諷ふべし。
○「曇りなき君の御影は」此處はすらりと諷ひ出し、「やしまの浪も」より替へて諷ふべし。
○「つくづくと春の詠めの淋しきは」此初同はすら〳〵と諷ふべし。
○「軒の玉水音すごく」此處は「音すごく」と締めて諷ひ、「獨詠むる」とずかりと出して諷ひ、「とり〳〵と入グリに諷ふべし。
○曲はさらりと諷ひ上端より引立て諷ふべし。
○「いや」此處は懸て諷ひ出し「保正に對し」より替へて柔かに諷ふべし。
○「綱はしるしを給はりて」此處は確かりと諷ひ出し、返しの地よりさらりと諷ひ、「こもれる鬼をしたがへずは」と引て彈て止め、「二度又人に」と

替へてずかりと諷ひ、「是まてなりと」より次第に運て諷ひ、「やたけ心ぞ」より懸て諷ふべし、脇は此地にて中入するなり。
仕手。
面、顰、赤頭、厚板、法被、半切、腰帶、打杖、
○脇、中入後仕手は打杖を持ち作り物へ入り、大小の前へ出、床机に掛る。
○後脇は確かりと立派に諷ふべし。
○「春雨の音も頻りに更る夜の」此地はすらりと諷ひ出し、「俄に吹くる風の音に」より進て諷ふべし。
○「其時馬を乗はなし」此處より乗てさらりと運て諷ふべし。
○「かくて鬼神は怒りをなして」此處は少し靜めて諷ひ出し、返しより次第にさらりと運て諷ふべし、仕手は「かくて鬼神は怒りをなして」にて作り物の後より出、左に頭、右に打杖を持ち「持ちたる甲をかつぱと投すて」にて脇へ向て頭を投げ捨て、夫より働きとなる。
○「綱はさはがず太刀さしかざし」此脇は少し靜めて諷ひ、地の返しよりさら〳〵と諷ふべし。

弱法師

素袍脇、一人、
○脇、名乗其外何れも句讀の息繼を確かりと諷ひ、すら〳〵と諷ふべし。
仕手。
面、弱法師、黒頭、厚板、大口、坪折　厚板、腰帶、白鉢卷、扇、杖、
水衣着流にて演ずる事もあり。
○仕手は扇を挿し、杖をつき、一聲越して出、幕離れにて正へ踏み止め諷ふ。

○仕手と脇との掛合は、仕手は總て、聞てから謡ひ出す心持に謡ふべし。

○「えぞしらぬ」此處は心持を付けて謡ふべし。

○「夫鴛鴦の衾の下には」此處は碪と略ぼ同型なれども碪よりは輕く謡ふべし。

○「憂年月の」此處は、「つき」と寄せて謡ひ、「流れては」とすらりと謡ふべし。

○「吉野の川の」此處は輕くずかりと謡ひ出し、「よしや」と心持を付けて緩め「よしとも」とすらりと「思ひの涙」と輕く「かき曇り」と心持を付けて靜めて謡ふべし。

○「傳へ聞彼一行の」此地は確かりと押へて濕とりと謡ひ「かの」の「の」へ浮かさずに產み字を出して確かりと當てゝ謡ふべし。

○「九曜の曼荼羅の光明」此處はクリの直りを確かりと當てゝ謡ふべし、大原御幸の「修羅道の戰」と云ふ所と同樣の謡ひ方なり。

○「今も末世といひながら」此處より仕手は歩み出し、「石の鳥居」と仕手柱に杖を當て、「爰なれや」と少し引き、考へる心あり、「立よりて參らん」と氣を替へて內へ入るなり、故に茲は「石の鳥居」と謡ひ切り呼吸を取て「爰なれや」と謡ひ、「立寄りて參らん」と氣を替へてすらりと謡ふべし。

○「頃は二月時正の日」此處は確かりと謡ふべし。

○「實有難き御利益」此處は取て輕くさらりと謡ふべし。

○「うけ參らせ候はん」此處は輕く謡ひ出し、「や」と上にて是も輕く謡ひ、少し呼吸を取て、「花の香の聞え候」とすらりと謡ひ、「如何樣此花散りがたになり候な」と心持を付けて謡ふべし。

○「二月の雪は衣におつ」此處は押へて張り「の」と輕く下げ「ゆ」と確かりハネ「き」と輕く下げ

「衣におつ」とさらりと「荒面白の」と具合を付け緩めて謡ひ「花の匂ひやな」と輕くさらりと謡ふべし、仕手は「荒面白の」と右受杖へ左の手を添へ前へつき聞く型あり。

○「袖をひろげて」此處は「ひろげ」と出して大きくたつぷりと謡ふべし。

○「花をさへ受くる施行の」此處は引立てすらりと謡ひ出し、「もるまじき」とずかりと、「難波の海」と乘て謡ひ出し、「實や盲龜の」と改めて謡ひ出し「我等まで」とずかりと謡ひ「みる心ちする」よりさら〳〵と謡ひ、靜めずに止めて、クリ地を謡ひ出すべし。

居曲

○此曲は靜かに濕とりとさらりめに謡ふべし。

○「水上清さ西天の」此處より乘を付けて謡ひ、「難波の寺の鐘の聲」と仕手は右受けて聞く型あり、茲は「鐘の聲」と確かりと謡ひ、「こと浦々」と入クリに謡ひ、「あまねき」とたつぷりと張り「おしてる」と突込で「海山も」とずかりと「皆成佛の」より段々靜めて謡ふべし。

○「是成者を如何なる者ぞと」此處は獨言なれば其心持にてさらりと謡ひ、「やあ如何に日想觀を」と替へて柔かに懸て謡ふべし。

○「實々日想觀の」此處は取て謡ひ出し、「心あてなる」と具合を付けてすらりと謡ふべし。

○「東門に、向ふ難波の西の海」此處は少し押へて確かりと謡ふべし。

○「何うたがひも難波江の」此處はすらりと謡ひ出し、「江月照し」よりさらりと謡ふべし。

○「永夜のせうせい何のなす所ぞや」此處は「所」と輕く下げ、「ぞ」と確かりと謡ひ「住吉の」と替へてすらりと謡ひ「淡路」と切り「島山と」と謡ふべ

し、茲は仕手「淡路」と謠の切れめへ杖を一つ突く型あり。

○「詠しは月影の」此處は「月落かゝる」の地より調子を下げて諷ふべし。

○「日想觀なれば」此處は二つ共カンに諷ひ、跡のクリの直りよりさら〳〵と輕く運で諷ひ「滿目青山は」と切て、「心」と抱へて具合を付け「あり」と出して强みに諷ふべし。

○「あふ」此處は地の謠を受けて强みにずかりと諷ひ、「見るぞとよ」と心持を付けて確かりと諷ひ、返しをさらりと輕く諷ひて地へ渡すべし。

○「扨難波の浦の」此地はさらりと諷ふべし。

○「南はさこそとゆふ波の」此處は「さこそ」と當らずに下げて諷ふべし。

○「ひがしの方は時を得て」此處は初めのクリを確かりと跡のクリを輕く諷ふべし。

○「春の綠の草香山」此處は「はる」の「は」の字へ扱て當り「春の」と寄せて輕く諷ひ「綠の」と「の」の字を浮かして拔き、「草香山」と具合を付けて諷ひ出すべし。

○「北はいづく」此處は替へて諷ふべし。

○「難波なる」此處は少し緩めて諷ふべし。

○「かなた、こなたと」此處は「かなた」と輕くずかりと「こなた」と柔かに具合を付けて諷ひ、「盲目のかなしさは」より懸て諷ひ、「貴賤の人に」と切り句讀に諷ひ「行あひの」とすらりと以下さら〳〵と運て諷ひ、「實も誠の」とたつぷりとクリて諷ふべし。

○「人は笑ひ給ふぞや」此處は「わらひ」の「わ」の字より浮かして諷ふべし。

○「思へば恥かしやな」此處は替へて具合を付けて諷ふべし、茲は「恥かしやな」と當らずにいきなり下げて「今は狂ひ候まじ」とずかりと進で諷ひ「今よりは更に」より段々靜めて諷ふべし。

○論議はさらりと諷ふべし。

○「こはゆめかとて俊德は」此處は懸て諷ひ出し、「俊德は」と當らずにいきなり下げて確かりと諷ふべじ。

○「親ながら恥かしとて」此處はすらりと諷ひ出し、「父は追付」とたつぷりと諷ひ、「手を取りて」と當らずにいきなり下げて確かりと諷ふべし。

○「明けぬさきにといざなひ」此處は返しより段々靜めて諷ふべし。

夜討曾我

前仕手

面、直面、折烏帽子、厚板、直垂上、大口、腰帶、少刀、扇、守、弓矢、

十郎

面、直面、折烏帽子、厚板、直垂上、大口、腰帶、少刀、扇、文、弓矢、

連男　太刀持　二人

二人共　素袍男

○次第二段にて仕手、十郎、團三郎鬼王と出、内へ入り向合ひて諷ふ。

○次第は懸てさらりと諷ふべし。

○「名殘を殘す我宿の」此處はすらりと諷ひ出し、「我あしがらや」より替へて諷ふべし。

○「さん候我等が幕の内ほど物寂たるは有まじく候」此處は靜かに淋しく諷ひ「扨彼あらましは候」と勢よく少し懸て諷ふべし。

○「荒御情なや」此處は靜かに諷ひ「彼祐經が事は候」と確かりと諷ふべし。

○「ふつゝと歸るまじきか」此處は少し强みに諷ふ

べし。

○「なふ五郎殿あれを御歸し候へ」此處は懸て强みに諷ふべし。

○「しかと歸らうずるな」此處は確かりと諷ふべし。

○「兄弟の者罷り歸らうずると申候」此處は靜かに諷ふべし。

○「いざさらば指違えう」此處は懸てずかりと諷ふべし。

○「かきくどきの給へば」此初同はすらりと運で諷ひ、「云聲の下よりも」とずかりと諷ひ少し呼吸を取り「不覺の涙」と靜めて諷ふべし。

○此連「十郎」は仕手より少し重く諷ふべし、然れども連たる事を忘るべからず。

居曲

○此曲は靜かにさらりと諷ひ、「其時時宗も」より替へて少し寛たりと諷ふべし。

○「既に此日も入相の」此處は調子を少し控へて確かりと諷ふべし。

○「文のひぬ間にと」此處はずかりと諷ひ、「詠ぜし人の」よりすらりと「今更思ひ」より乘て諷ひ、「かゝるや」と入グリに諷ひ、「泣てとゞまる」と切て呼吸を取り「哀さよ」と締めて諷ふべし、地謠濟て早鼓になり、十郎、仕手と二人共中入するなり。

立衆　四人

放髪、厚板、大口、側次、腰帶、白鉢卷、太刀、

○一聲本越し、立衆古屋、五郎丸一同出、橋掛りにて立並び諷ふ。

○「鬨を作つて、騷ぎけり」此處にて一同中へ入り、脇座より順に立ち並び角カケ立ち居る。

後仕手

面、直面、直垂シボリ、太刀、松明、

○後仕手は左に松明、右に太刀拔き持ち早笛にて幕上、松明二つ振り出、幕離れにて松明を上げて見、一の松に行きかゝりふ諷。

○「荒夥しの軍兵やな」此處は懸て諷ひ出し、「十郎殿〳〵」と替へて確かり諷ひ、「宵に新田の四郎と」より替へて諷ひ「口惜しや死なば一所と社」と又替へて强みにすらりと諷ふべし。

○「物思ふ春の花盛」此處はすらりと懸て諷ひ、「無念さよ」と具合を付けて確かりと諷ふべし。

○「味方の勢は是を見て」此處はすらりと諷ひ出しさら〳〵と諷ふべし。

○「荒はか〳〵しや」此地はすらりと諷ひ出し、返しより段々に進て諷ひ、「譽ぬ人こそ」と具合を付けて諷ひ「かゝりける所に」より替へて少し緩め、返しより次第に進で諷ふべし。

○「かゝりける所に」此處より乘てさらりと運で諷ひ、「今は時致も運つき弓の」と少し靜めて諷ふべし。

○「おのれは何者ぞ」此處は强みに懸て諷ひ、「其時大勢」より少し替へてすらりと引立て諷ふべし。

須磨源氏

脇、黑風折、

○脇次第名乘道行其外何れもさらりと諷ふべし。

○「旅衣思ひ立ぬる」此處はすらりと諷ひ出し、「浦々過てはる〳〵と」より替へて諷ふべし。

前仕手

面、笑尉、尉髪、熨斗目、水衣、腰帶、杖、

○仕手は一聲にて杖をついて出、內へ入り常座に立て諷ふ。

○此仕手は總て品能くさら〳〵と謡ふべし。
○「聞にも袖をうるほして」此處はすらりと謡ひ出し、「おもきにも」の「も」の字より弱めて謡ひ「彼古墳ぞと」より替へて謡ふべし。
○「關よりも花にとまるか」此初同は餘り重くならぬ樣靜かにさらりと謡ふべし。
○「小萩がもとの」此處は押へて張て謡ふべし。
○「はごくみ給ひし」此處はすらりと謡ひ、「御惠み」と靜めて謡ふべし。

居曲

○此曲は靜かにさらりと謡ひ「十二にてうひ冠」と押へて謡ひ、「箒木の卷を初め」より强吟に謡ふべし。
○「正三位に叙せられ」此處は六文字の合方なり。
○此曲は亂曲として謡ふ事もあり。
○論議は靜かにさらりと謡ふべし。
○「天に住給へば」此地はすらりと謡ふべし、仕手は茲より立つなり。
○「か樣に申翁も」此處より替へて少し靜めて謡ひ、「失にける」と確かりと止め呼吸を取り、「雲がくれして失にけり」と具合を付けて謡ふべし、仕手は茲にて中入するなり。

後仕手

面、中將、色鉢卷、初冠、箔、指貫、込大口、扇、單狩衣、

○後仕手は扇を持ち出端二段聞て出、一の松にて開き謡ふ。
○後仕手は乘て輕くさら〳〵と謡ふべし。
○「天もうつるや」此處は打上を聞て乘てさらりと謡ふべし。

早舞　「達拜掛」

○論議は前の論議よりさら〳〵と謡ひ「扨は名にしおふ」より靜めて確かりと謡ふべし。
○「ほんどやくしわうの」此處よりさらりと浮やかに謡ふべし。

西王母

脇、唐冠、
脇連、大臣、

○脇サシ其外何れも位を取て確かりと謡ふべし。
○「北辰の輿ずる數々の」此初同は寛たりと確かり謡ふべし。

前仕手

面、泣增、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、桃枝、

○前仕手は桃の枝を持ち一聲越し濟で出内へ入り常座に立て謡ふ。
○「三千年になるてふ桃の」此處はすらりと謡ふべし。
○論議はさらりと謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、泣增、天冠、黑垂、箔、大口、長絹、腰帶、扇、太刀、

連女

面、泣增、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、側次、桃實

○後仕手は扇を持ち下り端二段聞て連を先に立てて出、一の松にて開き、連は桃臺を持ち仕手より先に内へ入り中へ行き正面を向き立ち居る。
○「面白や〳〵」此處は下り端濟て打上を聞て謡ひ出すべし。
○中の舞、三段
○「花もゑくるや盃の」此處より乘て浮やかにさら〳〵と謡ふべし。

大佛供養

前仕手

面、直面、放髮、段鬚斗目、掛素胞、大口、腰帶、少刀、扇、笠、

○初めに大小座着、連出、脇座へ行き下に居、夫より次第打出す。

○仕手は笠を冠り次第二段聞て出、内へ入り、大小へ向き諷ふ。

○此仕手は次第名乗道行其外總てさらりと諷ふべし。

○「三笠の森の蔭たのむ」此處はすらりと諷ひ出し「神も敎へ」より替へて諷ふべし。

連女

面、曲見、鬘、鬘帶、箔、唐織着流

○此連はさらりと諷ふべし。

○「寢もせて夜半をあかしかね」此初同はすらりと運て諷ひ出し、「景清が心のうち」とずかりと、「母も哀と」と緩めて具合を付けて諷ふべし。

○「一門の船の中」此地はさらりと諷ふべし。

○「實有がたき母の御慈悲」此處は具合を付けてすらりと諷ふべし。

○「柞の森の雨露の」此地はさらりと諷ひ出し、「いつしか親心」より替へて諷ひ「涙と共」と諷ひて切り、「別れけり」と心持を付けて靜めて諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり、連も跡に付き中入するなり。

賴朝

黑風折、厚板、大口、腰帶、長絹、少刀、扇

立衆

梨子折、白鉢卷、厚板、側次、大口、腰帶、太刀、扇

脇

直垂、上下

○一聲にて子方、脇、立衆と出、内へ入り向合ひ諷ふ。

○子方は引立てさらりと諷ふべし。

○「大伽藍の御供養」此處は勢よくすらりと諷ひ出し「法の御聲の」より替へて諷ふべし。

後仕手

面、直面、翁烏帽子、厚板、寄狩衣、大口、側次、腰帶、太刀、箒

○後仕手は箒を持ち頭越し一聲にて出、一の松にて開き諷ふ。

○後仕手は懸て確かり諷ふべし。

○「宮人の、姿をしばし狩衣」此處はすらりと諷ふべし。

○「塵にまじはる宮寺の」此地は懸てすらりと諷ふべし。

○「こは何者なれば御前まぢかく參るぞ」此處は懸て諷ふべし。

○「是は春日の宮造なるが」此處は落付てさらりと諷ふべし。

○「春日祭にあらばこそ」此處は懸て諷ふべし。

○「なふ水波の隔と聞時は」此處は少し懸て諷ふべし。

○「さやづまりたる」此地はさらりと運て諷ひ「顯れたりと思ひつゝ」と少し緩め、「さらぬやうにて」より又懸てさらりと諷ふべし。

○「如何にやいかに警固の兵」此處は懸て確かりと諷ふべし。

○「抑是は、平家の侍」此處は引立てすらりと確かり諷ふべし。

○「名のりもあへずあざ丸を」此地は少し緩めて諷

ひ出し、返しよりさらりと運び「中に若武者進み出て」と具合を付けて緩め「走りかゝつて」より又さらりと運て謡ふべし。

○「今は景清是迄なり」此處は少し緩めて謡ひ、返しよりさらりと運て謡ふべし。

六浦

着流僧、三人

○脇、次第名乗道行其外總て餘りさら〳〵と謡はず寛たりと確かり謡ふべし。

○「逢坂の關の杉むら」此處はすらりと謡ひ出し「いくよな〳〵の草枕」より替へて謡ふべし。

○「又是によしありげなる寺の候を」此處より替へて謡ひ出し、「荒面白の所々や」より又替へてさらりと謡ひ「又是なる庭に」と又具合を替へて謡ふべし。

前仕手

面、曲見、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、扇

○呼び掛け

○「いかにして此ひともとに時雨けん」此處は中音にてすらりと謡ふべし。

○「手向の爲にかくばかり」此處にて仕手は長短見合せて内へ入るなり。故に此處迄は歩みながら謡ふ所に付き乘を持て謡ふべし。

○「功成名遂て身退くは」此處は中聲にてすらりと謡ふべし。

○「今は何をかつゝむべき」此處ははつきりと謡ふべし。

○「夕部の空も冷じく」此初同は靜かに濕とりと謡ひ「千種の花をかきわけて」と具合を付けて謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○「千種の花を」此處は入グリに謡ふべし。

後仕手

面、曲見、鬘、鬘帶、長絹、色大口、腰帶、扇、天冠

○後仕手は扇を持ち一聲越して出、内へ入り、常座にて開き謡ふ。

○「不思議やな月澄わたる庭の面に」此處は懸て謡ふべし。

○「唯雲とのみ」此處は押へて張て謡ふべし。

舞曲

○此曲は靜かにさらりと謡ふべし。

○「時うつり夏くれ」此處より替へて謡ひ「言葉を」と入グリに謡ふべし。

○「更行月の」此處はコヽ合を聞て謡ひ出し、靜かにすらりと謡ふべし。

○序の舞三段「太鼓あり」

○「所は六浦の」此地は羽衣の如く陽氣に謡はず乘て靜かにさらりと謡ふべし。

歌占

連、素袍男

子方

面、直面、放髮、箔、長袴、扇

○次第二段にて子方連と出、内へ入り、向合ひ謡ふ。

○此連はさら〳〵と謡ふべし。

仕手

面、若男、尉髮、翁烏帽子、厚板、大口、寄狩衣、腰帶、扇、弓に短冊を付る

白垂、直面にて演ずる事あり、此時は折烏帽子

○仕手は扇を挿し弓に短冊を付けて右に擔ぎ、片越一聲にて出、一の松にて止め謡ふ。

○仕手は餘り重くならぬ樣若くさら〳〵と諷ふべし。

○「加樣に候」此處は連が仕手の前へ行き、短冊を兩手に持ち「北は黃に、南は青く東白、西ぐれなゐの染色の山」と諷ひて立ち跡へ下り下に居て「加樣に候」と諷ふなり、故に此處は素謠の時も少し間を置て諷ふべし。

○「委しく判じて參らせうずるにて候」此處は取て諷ひ出し、仕手は弓を左の手へ持ち替へ右の手にて扇を拔き持ち「夫れ今度の」と諷ひ出すなり、故に此處より改めて諷ひ出し「扨こそ南は青くとは」と懸て諷ひ「此處に又父の思の高き事」より改めて諷ふべし。

○「加樣に候」此子方の詞も前の連の所と同樣の型あり、故に茲も少し間を置て諷ふべし。

○「鶯にあふ言葉の緣あり」此處は取て諷ふべし。

○「去りとては占に僞り有るべからず」此處は取てさらりと諷ひ出し、「時も卯月、程時も逢ひにあへり」と考へ案ずる具合を諷ふべし。

○「や。今鳴くは」此處は「や」と少し呼吸を取て諷ひ出し、少し間を置て又呼吸を取り「今鳴くは」と諷ひ出すべし。

○「面白し〳〵」此處は懸て諷ひ出し「扨ことはたそ」と呼吸を取て諷ひ出し、具合を付けて諷ふべし。

○「是こそ父にて有ぞとよ」此處は「ぞとよ」と扱て中に下げて諷ふべし。

○「子は子なりけり」此處より弱く諷ふべし。

○「程へて今ぞ廻り逢ふ」此初同は懸てすらりと運て諷ひ、「一見の浦かたの」とずかりと諷ひ「まさしき親子」と少し緩め、「實や君が住む」より替へて少し緩めて諷ひ出し「越の白山」よりさら〳〵と運て諷ふべし。

○「現なき有樣見せ申さん」此處はずかりと諷ふべし。

○「月の夕の浮雲は」此次第は押へて確かりと諷ふべし。

○クリ地はさらりと諷ふべし。

○「誰か百年の齡を期せん」此處は「期せん」と扱て中に落して諷ふべし。

舞曲

○此曲は確かりと諷ふべし。

○「時うつり事去て」仕手は此處より立て型あり。

○「三界無安猶如火宅」此處は引立てすらりと諷ひ出すべし。

○「いはんや下劣」此處は「下劣」と出して强くずかりと諷ひ「などか其罪かろからん」と少し懸てすらりと諷ひ「業に悲しみ」と少し靜めて「猶そふる」とずかりと「ざんずい地獄の」と緩めて「苦しみは」とすらりと「きうちうにて」よりさらりと諷ひ「一日の其中に」より替へて「せきくはつ」と又替へて少し緩め「地獄の苦しみは」よりさらりと「罪人を碎く」とずかりと諷ひ「次の火盆」より緩め「頭に火焰をと」替へて靜め、「載けば」よりさらりと「焰々たる火を出す」と緩めて確かりと諷ひ「或時は焦熱」より替へてさらりと運び「大焦熱の」と心持を付け「氷に」と大きく諷ひ「閉られ」と心持を付けて緩め「鐵杖頭を碎き」よりさらりと諷ふべし。

○「飢ては」と强くずかりと諷ひ「渴しては」より確かりと諷ひ「餓鬼の」と出して確かりと諷ひ「苦しみも無邊なり」よりさらりと「我等にいかて」と心持を付けて緩め、「身より出せる」より

さらりと「月の夕のうき雲は」より静めて謡ふべし。

○「胸のかゞみよ心にごすな」此處は乗て確かりと謡ふべし。

○「荒悲しや唯今參り候に」此處は弱く懸て謡ひ「お責有ぞ」と強みに「荒悲し」より具合を付け剛吟にずかりと懸て謡ふべし、此處は仕手カケりになり角へ行き左へ廻り脇座より橋掛りへ行き一の松にて振り返り舞臺を見、左へ廻り正面を見て謡ひ出し「荒悲しあらかなしや」とシヲりながら内へ入り常座に立つ。

○「ふしぎやな又彼人の神氣とて」此處は懸て謡ふべし。

○「五體さながら苦しめて」此處は懸て確かり謡ふべし。

○「地に倒れて」此處はずかりと確かり謡ふべし。

○「神風の一もみもんで」此地は懸て進て謡ひ出し「振ひわなゝき立つ居つ」と強く「神はあがらせ」と緩め「給ひぬとて」よりさらりと進て「ばうゝゝと狂ひさめて」より替へて柔かに謡ふべし。

俊成忠則

脇、梨子打、直垂
連
角帽子、沙門、厚板、長絹、大口、腰帶、少刀、扇

○太刀持、素袍男

○大小座着、連太刀持と出、連は脇座に行き床机に掛り、太刀持は地の前に下に居、夫より脇出て常座に立て名乗を謡ふ。

○脇名乗其外總て確かりと謡ふべし。

○連はさらりと謡ふべし。

○「行暮て木のした蔭を」此處は、阿漕の「伊勢の海」と云ふ所と謡ひ方同樣なり。

○「痛はしや忠則は」此初同はさらりと濕とりと謡ひ、「船を得て彼岸の」とずかりと謡ふべし、仕手は此地謠の内に出、謠一パイに内へ入り常座に踏み止めて謡ふ。

仕手

面、中將、黒垂、梨子打、白鉢卷、腰帶、大口、太刀、扇

○此仕手はさらりと謡ふべし。

○「わが面影やみゆるらん」此處は替へて弱く謡ひ出し「命たゞ心にかなふ物ならば」より又替へて謡ふべし。

○「ふしぎやな夢現ともわかざるに」此處は懸て謡ふべし。

○「篠波や志賀の都は」此地はさらりと謡ひ出し「よみしもながき世の」とずかりと「ほまれを殘す」と緩め「詠歌かな」とすらりと「實や浮世は」より替へて謡ふべし。

○「唄へや」此處は入グリに謡ふべし。

舞曲

○此曲は静かにさらりと謡ふべし。

○「女と住給はんとて」此處は四ッ地の間なり、茲は「住給」と寄せて謡ふべし。

○「扨も我須摩の浦に」此處より替へて謡ひ「此歌の情なるべし」と餘り静めずに謡ひ止め、「荒名殘をしの」と込て謡ひ出すべし。

○「ふしぎや見れば忠則の」此處は懸て謡ふべし。

○「本の下界におつくだす」此處はずかりと謡ふべし。

○「すは敵陣は亂れあひ」此地はすらりと運て謡ひ「忠則あひ向て」と少し緩め「そのまゝ見えず」

よりさら〳〵と運び「やゝ有てさゞ波や」と少し緩め、返しの地より又さらりと運び「花をふむては」より替へて引立て謡ふべし。

草紙洗

脇

風折、單狩衣、大口

○脇は強みにはつきりと謡ふべし。

前仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、唐織、扇

○初めに大小座着、仕手内へ入り中にて床机に掛り夫より脇出て一の松にて名乘り直に後見座へ寃ぐを見て「夫歌の」と謡ひ出すなり。

○「夫歌のみなもとを尋ぬるに」此處は調子を少し控へて品能く寛たりと謡ふべし。

○「聖德太子は救世の提闍」此處は「救世の提闍」とたつぷりと謡ふべし。

○「面白や水邊の草と云題にうかひて候は如何に」此處は「如何に」と謡ひつゝ少しく曇りて案ずる心持ありて「まかなくに」と謡ひ出すなり、故に此歌は其心持にて少しさらりと謡ひ出し「波のうねゝ〳〵」と心持を付けて謡ひ「おひしげるらむ」と靜めて謡ふべし。

○「此歌を短籍に寫さばやと思ひ候」仕手は此處にて立ちアシライにて中入するなり。

後仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、色大口、唐織、坪折腰帶、扇

子方

初冠、箔、單狩衣、大口、腰帶、扇

立衆

黑風折、厚板、長絹、大口、腰帶、扇

○仕手は物着にて前折烏帽子を着る。

○後仕手は次第二段にて短籍懷中、王、貫之及連三人、脇と出内へ入り向合ひ謡ふ。

○「めでたき御代の歌合せ」此處は確かりと謡ふべし。

○王はさら〳〵と謡ふべし。

○貫之は王よりは確かり謡ふべし。

○「ほのゞと、あかしの浦の」此處は引立てすらりと謡ひ「船をしぞ思ふ」と確かりと靜めて謡ふべし。

○「實島がくれ入月の」此初同は確かりと寛たり謡ひ「其歌人の名所も」より替へて謡ふべし。

○「水邊の草」此處は貫之「畏て候」と謡ひて立て机の前へ行き下に居短冊を取り兩手に持ち「水邊の草」と謡ひ出すなり、故に茲は少し間を置て謡ひ出すべし。

○「まかなくに」此處はさらりと謡ひ「おひしげるらん」とずかりと靜めずに謡ふべし。

○「愧かしの御詞候や」此處は引立てさらりと謡ふべし。

○「作者は誰にてましますぞ」此處は輕くさらりと謡ふべし。

○「其さま賤しき身ならねば」此處は確かりと謡ふべし。

○「不思議や上古も末代も」此處は引立てさらりと謡ひ「宣旨度々」より替へて謡ひ「ましてや小町が心のうち」より締めて謡ふべし。

○「ましてや」此處は入グリに謡ふべし。

○「恨めしの御事や」此處はすらりと浮やかに謡ふべし。

○「さだかならざる心かな」此處は少し靜めて謡ひ「此草紙を取上みれば」と改めて謡ひ出し「此萬

葉に入筆」と引立てはつきりと謡ひ「おぼへたり」と静め「餘りに恥かしう」より替へて「みかは水の」よりさら〳〵と謡ひ「結び上げ」と静め、「此草紙を洗はゞやと」と替へて押へてすらりと謡ふべし。

○「とにかくに思ひまはせども」此處は濕とりと謡ふべし。

○「泣々立てすご〳〵と」此地も静かに濕とりと謡ふべし。

○「如何に小町」此處は、仕手は「泣々立て」の地にて立ち橋掛へ行くを貫之より謡ひ掛けるなり。

○「其時御前の人々は」此處はさらりと謡ふべし。

○「綸言なればうれしくて」此處は引立てすらりと謡ふべし。

○「かりがねの翅は文字の數なれど」此地はすらりと謡ひ出し「耳を洗ひしは」と少し静めて謡ふべし。

○「涙は袖にふりくれて」此處は少し緩めて謡ふべし。

○「洗ひ〳〵て取上て」此處より替へてさらりと運て謡ひ「入筆」とたつぷりと謡ひ「文字は一字も」と緩め「有難や〳〵」と少し静めてすらりと謡ふべし。

○「なふ〳〵暫く」此處は乗て懸てさらりと謡ふべし。

○「實有難きみぎんかな」此處はさらりと謡ひ出し「笏拍子を」と緩めて「うち」と別に出して謡ひ「座しきを」の「き」のハネを小さくハネて謡ふべし。

○「笏拍子」此處は昔は「笏」と寄せて確かりと張て謡ひたれども、現今は「しやあァ」と產み字を出してたつぷりと張て謡ふ。

○「春來ては」此處は引立て華やかにすらりと謡ふべし、茲は仕手物着濟み黑風折烏帽子を冠り立て正面へ向き謡ひ出すなり。

○中の舞三段

○「日影に見ゆる」此處は古來より七ッ拍子に取りて謡ふ、即ち普通の八拍子に一つ不足するなり、此地はすらりと謡ひ出し「大和歌のおこりは」と少し緩め其跡さらりと謡ひ「花の都」と入グリに謡ふべし。

松　蟲

脇、素袍

○脇、名乘其外何れもさらりと謡ふべし。

前仕手

面、直面、放髮、段鬚斗目、掛素袍、大口、腰帶、扇、笠

連男、二三人

素袍

○仕手は笠を冠り次第二段にて連と出、内へ入り向合ひ謡ふ。

○此仕手はさらりと謡ふべし。

○「たとへ暮るとも」此地もさらりと謡ふべし。

○「昔此阿部野の松原に」此處は仕手中へ行き正面に下に居て謡ふ。

○語りはさら〳〵と謡ひ「彼者草路にふして空しくなる」と此一句を確かりと静めて謡ひ「死なば一所とこそ思ひしに」より具合を付けてすらりと謡ふべし。

○「其まゝ土中に埋れ木の」此地はさらりと謡ふべし。

○「今も其友をしのびて松蟲の」此地はさらりと謡

ひ「愧かしや是迄なり」より替へて諷ふべし。

○論議はさらりと諷ふべし。

○「有難や是ぞまことの友を」此處は「有難や」と乗てたつぷりと諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、三ヶ月、黒頭、白鉢卷、厚板、唐織、法被肩取る、半切、腰帶、扇

○後仕手は扇を持ち一聲にて出、内へ入り常座にて開き諷ふ。

○後仕手は強みにさらりと諷ふべし。

○「はや夕影も深みどり」此處は懸て諷ふべし。

○「古鄕に住しは同じ難波人」此地はさらりと諷ふべし。

○「忘れえぬ友ぞかしあら」此處は「あら」と強みに出して確かりと諷ふべし。

○「なつかしの心や」此處は「心や」と強みに諷ふべし。

○「春の山邊や秋の野の」此處は「春の山邊」と「秋の野」とを分けて諷ふべし。

舞曲

○此曲は靜かにさらりと諷ふべし。

○「されば蘆山の古へ」此處より替へて諷ひ「夫は賢きいにしへの」と押へて諷ふべし。

○「萬木皆紅葉せり」此處は押へて張り引きの尻にて浮かして諷ひ、「只松蟲の」と入グリに諷ふべし。

○「さかづきの」此處はずかりと諷ふべし。

○「雪を廻らす花の袖」此地はさらりと諷ふべし。

○中の舞三段

○「おもしろや」此處はさらりと諷ふべし。

○「きり、はたりちよう」此處は「きり」と寄せて彈て諷ひ切り「はたりちよう」とすらりと諷ふべし。

○「蟬脫」此處は走らずに字を拾て諷ひ「わきて我しのぶ」より引立て「りん〳〵りん〳〵」と柔かに押へて諷ふべし。

○「すはや難波の鐘も明かたの」此處より引立て諷ふべし。

石橋

脇、沙門、大口

○脇、名乘其外總て重く確かりと諷ふべし。

連

面、童子、黒頭、白鉢卷、箔、水衣、腰帶、杖、員柴

○連は杖をつき員柴を攜ぎ一聲にて出、内へ入り常座に立て諷ふ。

○此連は普通の連の如く輕く諷はず、位を取り確かりと諷ふべし。

○「入つるかたも白波の」此處は確かりと諷ひ出し「實や誤て」より替へて諷ふべし。

○「御覽候へ此瀧波の」此處は懸て重く諷ひ「雲より落て數千丈」と諷ひ、少し間を置き「瀧つぼ迄は」と諷ひ出し「身の毛もよだつ」と確かりと諷ふべし。

○「御覽候へ此瀧波の」此處は仕手上を見て諷ひ「瀧つぼ迄は」と下を見る型あり、故に茲は諷ひ樣を替へて諷ふべし。

○「うはの空なる石のはし」此初同は靜かに確かりと諷ひ「下は」の「た」へ產み字を出して當り「泥梨も」と押へてたつぷりと諷ひ「あやうしや目もくれ」より替へて少し靜め「おぼろけの行人は」と具合を付けて一層締めて諷ふべし。

居曲

○此曲は位を取て確かりと諷ふべし。

○「石橋と名を」此處は押へてたつぷりと「谷のそこばく」と強みに確かりと諷ひ「上には瀧の糸」より替へて少しさらりと諷ふべし。

○「下は泥梨も」此處は「泥梨」と押へてたつぷりと諷ひ「橋のけしきを」と替へて乘て諷ひ出し「虹をなせる姿」と懸てずかりと「又弓を引ける」と締めて確かりと諷ふべし。

○「しばらく待せ給へや」此處の「や」は「や」斯の如く諷ふべし。

仕手

面、獅子口、赤頭、厚板、唐織、法被肩取る

半切、腰帶

○「獅子とらでんの舞樂のみぎむ」此地はすらりと進て諷ふべし。

○「花に戯れ」と確かりと烈しく「枝に」と少し緩め「ふしまろび」とすらりと諷ひ、句讀を息繼にして「實も上なき」と少し緩めて大きく「獅子王の勢」より烈しく進み「なほりけれ」の「けれ」を引かずに短かく彈て止めて諷ふべし、茲は謠濟て拍子殘るなり。

松尾

脇、大臣、三人

○脇　次第名乘道行其外何れもさら〳〵と諷ふべし。

前仕手

面、小尉、尉髮、小格子、大口、水衣肩取る

腰帶、扇、杉箒

連男

放髮、厚板、水衣、大口、腰帶、扇

○眞の一聲高砂の通り

○「春見しは花の都の雲霞」此處はすらりと諷ひ出し「往來も繁き諸人の」より替へて諷ふべし。

○「松尾の山は梢の秋ならで」此初同は餘り重く諷はず、確かりとさらりとしたる所を諷ふべし。

居曲

○此曲は靜かにさらりと諷ふべし。

○「されば」にや此社」此處より替へて諷ふべし。

○論議は濕とりと諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり、連も此地にて中入するなり。

後仕手

面、邯鄲男、黑垂、透冠、色鉢卷、厚板、狩衣、大口、腰帶、扇

○後仕手は出端二段聞て出、內へ入り常座にて開き諷ふ。

○「光りもちるや」此地は乘てすらりと諷ふべし。

神舞

○「秋の夜神樂聲澄て」此論議は前の論議よりさらりと諷ふべし。

橋辨慶

前仕手

面、直面、厚板、大口、水衣、腰帶、少刀、珠數

連

素袍男、太刀持

○大小座着仕手は左に珠數、右に扇を持ち太刀持を從へて出、內へ入り常座に立て名乘を諷ふ。

○此仕手は寬たりと強く確かりと諷ふべし。

○「おつ取りこむれば」「おつ拂ふ」此邊より次第に懸て詰めて諷ふべし。

○「神變奇特ふしぎなる」此初同は確かりさらりと

謡ふべし。

○「ゆふべ程なく暮がたの」此地は寛たりと謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

子方

放髪、白鉢巻、厚板、大口、白練、腰帯、太刀

○牛若は太刀を持ち衣をかつぎ、一聲越して出、内へ入り、常座にて開き謡ふ。

○「扨も牛若は」此處はすらりと謡ひ「夕雲の」より懸てさらりと謡ふべし。

○「面しろの氣色やな」此地は確かりとさらりとしたる所を謡ふべし。

後仕手

面、長靈癋見、長範頭巾、厚板、法被シボリ

半切、腰帯、長刀

○後仕手を直面にて演ずる事もあり。

○後仕手は長刀を擔ぎ、頭越し一聲にて出、一の松にて開き長刀つき謡ふ。

○「辨慶かれを見付つゝ」此處は「つゝ」と捨てゝ謡ひ、イロエにて仕手と牛若の切合あり。

○「言葉をかけんと思へども」此處は少し輕く謡ひ「思ひ煩らひ過て行」と具合を付けて確かりと二段に出して謡ふべし。

○「すは」此處は強くずかりと捨てゝ謡ふべし。

○「しれものよ物見せんと」此處は「物見せんと」と強く出して謡ふべし。

○「長刀纏てとりなほし」此地はさらりと謡ひ出し返しより次第に運び「薄衣引のけつゝ」と少し緩め「つゝさゝへたる」より次第に進み「しさつて」と確かりと謡ふべし。

○「荒物々しや」此處は少し緩めて謡ひ出し、返しより又さら〳〵と運で謡ひ「うちおとされて力なく」と少し緩め「組んとすれば」よりさらりと運び「詮方なくて辨慶は」と少し緩めて具合を付けて謡ふべし。

○論議はさら〳〵と謡ひ「互に名乘あひ」と替へて少し緩め、返しよりさら〳〵と謡ひ「辨慶は長刀打かついで」より改めて確かりと謡ふべし。

葛城

山伏脇、三人

○脇、次第名乘道行其外何れもさらりと謡ふべし。

前仕手

面、曲見、鬘、鬘帯、箔、白水衣、腰巻、腰帯、扇、杖、笠、笠にて雪を付ける

○前仕手、呼び掛け

○此仕手は餘り重くならぬ樣に濕とりと謡ふべし。

○「ましてやしらぬ旅人の」此處は中聲にてすらりと謡ふべし。

○「嬉しくも仰せ候ものかな」此脇の謠の内に長短見合せて内へ入るなり。

○「肩上の笠には」此初同は靜かに濕とりと謡ひ「歸る麥や」邊より少しさらりと「雪こそくだれ」と乘て謡ひ出し「柴の庵に着にけり」と仕手大小の前へ着き、脇の「心得申候」と謡ふを聞て後見座へ寃ぎ笠を脱ぎ杖を捨て屁柴を取り扇を持ち、柴の枝一枝左に持ち仕手柱の先に立て脇へ向き「餘りに夜寒に候程に」と謡ひ出すなり。

○「しもとゆふ葛城山に降る雪は」此地はさらりと謡ひ出し、「餘所にのみみし白雪や」と乘て謡ひ出すべし。

舞曲

○此曲は靜かに確かりと謡ふべし。

○「明るわびしきかづらきの」此地は靜かに濕とり謡ふべし、「神に五衰の」と仕手は立ち、「祈り加持してたび給へと」と脇へ一足すゝみ「岩橋の」と右へ廻り「神がくれにぞ成にける」にて中入するなり。

後仕手

面、女增髮、天冠、箔、色大口、腰帶、黑垂扇

○後仕手は扇を持ち出羽にて出、内へ入り常座にて開き謡ふ。

○後仕手は乘て引立て濕とりと謡ふべし。

○「不思議やな峨々たる山の常蔭より」此處は懸て謡ふべし。

○「葛城山の岩橋の」此地はさらりと謡ひ出し、「見苦しき顏ばせの」とずかりと「神姿は恥かしや」と緩めて心持ちを付けて謡ひ「よしや芳野の」より改めて謡ひ出し、「神樂歌はじめて」より靜めて謡ふべし。

○「降る雪の」此處は締めて謡ふべし。

○「標ゆふ花の」此處は「花の」といきなり高く張て謡ふべし。

○序の舞、三段

○「高天の原の岩戸の舞」此地は引立てすらりと謡ひ出し「面はゆや」と心持を付けて靜めて謡ふべし。

放下僧

前連

素袍男

○大小座着、連出て内へ入り常座に立て謡ふ。

○連はさら〳〵と謡ふべし。

前仕手

面、眞面、角帽子、小格子、水衣、腰帶、珠數

○前仕手は幕上げ出ながら連へ向き謡ふ。

○「扨唯今は何の爲の御出にて候ぞ」此處は仕手「先此方へ御入候へ」と謡ひて連と入り替り内へ入り地の前へ行き下に居、連は中へ行き下に居仕手の方へ向くを見て謡ひ出すなり故に茲は素謡の時にも少し間を置て謡ひ出すべし。

○「故鄕の名殘も嘸な有明の」此初同は確かりとさらりとしたる所を謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり、連も仕手の跡に付き中入するなり。

脇、掛素袍

○「歩みを運ぶ神がきや」此次第はさらりとはつきり謡ふべし。

後仕手

面、直面、沙門帽子、厚板、大口、水衣肩取る腰帶、扇、錫杖、團扇を付る

物着にて鞨鼓付る

後連

面、直面、梨子打、白鉢卷、厚板、大口、側次、腰帶、太刀、弓矢

○後仕手は錫杖に團扇を付けたるを持ち一聲にて出一の松にて開き謡ふ、後連は弓矢を持ち仕手の跡へ付き出、二の松にて止まり謡ふ。

○後仕手はさらりと謡ふべし。

○「朝のあらし夕べの雨」此地はさらりと謡ひ、「水のうたかた」より少し靜めて謡ふべし。

○「四魔の軍を破り給ふ」此處は懸て勢よく謡ひ出し「破り給ふ」と出して確かりと謡ふべし。

○「されば我等も是を持」此地は懸てすらりと謡ひ出し「放さぬ矢にて」より進で「はづさざりけりと」とずかりと謡ひ「かやうに讀む歌もあり」

より改めて諷ひ出し「しらずな物なのたまひそ」と輕くずかりと諷ひ、返しを少し靜めて諷ふべし。

○「たゞ一葉のひるがへる」此處はすらりと諷ふべし。

○「切てさんだむとなす」此處は輕く懸てずかりと諷ふべし。

○「あゝ暫く」此處は懸て諷ひ出し「切てさんだんなすとは」と替へ靜めて諷ひ「お騷ぎある社」と輕くさらりと諷ひ出し「おろかなれ」と出してずかりと諷ふべし。

○「何と唯中々に」此地は具合を付けてさらりと諷ひ出し「南無三寶」と輕くずかりと諷ひ、呼吸を取て「をかしの人の」と外して諷ふべし。

○「されば大小の根氣をさらはず」此仕手狂言の說賦濟み寃ぎて錫杖を捨て扇を持ち中へ出、下に居て諷ひ出すなり、茲はすらりと諷ふべし。

舞曲

○此曲はさらりと確かりと諷ふべし。

○「田面に落る」此處は引立て諷ふべし。

○「月のためにはうき雲の」此處は輕くさらりと諷ふべし。

○「種とこゝろや、成ぬらん」此地も仕手の謠を受けてさらりと諷ふべし。

○羯鼓三段

○「面白の」此處は充分調子を張て高く諷ふべし、是より以下の地を總て、トリに諷ふ人と片地に諷ふ人とあり。

○「此年月のうらみの末」此處は引立てすらりと諷ふべし。

○「かくて兄弟念力の」此地は浮やかにさら〳〵と諷ふべし。

○此曲は二人靜、千引と共に「品により仕舞にのみ相勤め申候」とあり、故に絕體の廢曲にあらざれば茲に記す事とせり。

○脇次第名乘道行其外何れも强みにさら〳〵と諷ふべし。

○「雲水の行へも遠き東路に」此處はすらりと諷ひ出し「假寐の夢を」より替へて諷ふべし。

○「いづくにも」此一聲は濕とりと諷ふべし。此仕手は姥の面を掛けるなり其心にて諷ふべし。

○「有難しとも中々に」此處は能の時は脇より梛の葉を左にて受取り、梛の葉を見て諷ふ所なり茲は確かりと諷ふべし。

○「老眼にて蟲ぐひの文字さだかならず」此處は少し間を置て諷ひ出すべし。

○「さらばよみて聞せ申候べし」此處は取て諷ひ出し「何々蟲喰の御歌は」より替へて諷ふべし。

○「何なふ道とほし」此處は少し懸て諷ひ出し「年もやう〳〵」より替へて諷ひ「われもわすれじ」と心持を付けて諷ふべし。

○「有難や〳〵」此初同は靜かに寬たりと諷ふべし。

○「又あれに野原の見えて候をば」此處は替へて諷ひ出し「又こなたに」と又替へて諷ふべし。

居曲

○此曲は靜かに濕とりと諷ふべし。

○「中にも本宮や」此處より替へて諷ふべし。

○「受られ申」此處は入グリに諷ふべし。

○「謹上再拜」此處は確かりと諷ひ「仰願はくは」より替へて諷ふべし。

○「ふしぎやな老女が捧る」此處は少し懸て諷ふべ

し。
○「人は神の德をしるべとして」此處より乘て諷ふべし。
○「國々迄も」此處は乘を外して諷ふべし。
○「さいなんを去つゝ」此處より乘て諷ふべし。
○「貽金兩部の密敎たり」此處は「みつ敎」と詰めて諷ふべし。
○「然るに本よりも」此處より以下總て確かりと諷ふべし。

金札

脇、大臣、三人

○脇次第名乘サシ道行其外何れもさら〳〵と諷ふべし。
○「青丹よし奈良の葉守の神心」此處はすらりと諷ひ出し、「大内山の蔭高さ」より替へて諷ふべし。

前仕手

面、小尉、尉髮、翁烏帽子、厚板、寄狩衣、大口、腰帶、杖、扇、金札

○仕手は扇を挿し杖をつきアシライにて出。内へ入り常座にて止め諷ふ。
○「千代をこめたる竹の杖」此地はさらりと諷ふべし。
○「春は花山の木をきれば」此地もさらりと諷ふべし。
○論議はすら〳〵と諷ふべし。
○「是は神の宿り木」此處は「木」の產み字を呑て上げて句讀に諷ふべし。
○「人しらぬ事なり」此地は濕とりと諷ひ出し「金の札を」より引立て諷ふべし。
○「是は伊勢太神宮の御つかはしめ」此處も引立てすらりと諷ふべし。

○「重て宮居を作り崇むべしと」此處は「崇むべしと」と出して確かりと諷ふべし。
○「迦陵頻伽の聲ばかり」此處はすらりと引立て諷ふべし、仕手は此地にて作り物へ中入するなり。

後仕手

面、天神、黑垂、色鉢卷、金札載、厚板、法被肩上、半切、腰帶、弓矢、扇

○後仕手は出羽一段聞て作り物の内にて諷ふ但し祝言の時は扇挿し弓矢を持ち出端にて出、内へ入り常座にて開き諷ふなり。
○「かぎらじな〳〵」此處より乘て諷ふべし。
○「唯おもくせよ」此處は乘を外して確かりと諷ふべし。
○「重くすべしや」此處より又乘てさらりと諷ふべし。
○「左も右も神力の」此邊より懸て諷ふべし。

三山

○脇、大口僧、三人
○脇、次第名乘道行其外何れも確かりと諷ふべし。
○「住馴し小原の里を立出て」此處はすらりと諷ひ出し「宇治の中宿」より替へて諷ふべし。

前仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、唐織、扇、

○前仕手は呼び掛けて出、内へ入り「よく〳〵問せ給へとよ」にて脇へ踏み止める。
○「香久山は夫畝火みゝなし山は女なり」此處は「香久山」「畝火」「みゝなし山」と三つを分けて諷ふべし。

○「先南に見えたるは香久山」「西に見えたるは畝火山」此處は初の句と跡の句とを諷ひ樣を替へて諷ふべし。

○「ひとつ世に二道かけて三山の」此初同は靜かに濕とりと諷ひ「わがみゝなしや」と乘て出し「うねひ山」と靜め「あらそひかねて」より改めて諷ひ出すべし。

○「みゝなしの里へはらざりけり」此處は「こざりけり」の「り」にて當らずに扱て中に下げて諷ふべし。

居曲

○此曲は靜かにさらりと諷ふべし。

○「去る程に起もせず」此處より改めて諷ひ出し、「身を投げ」と入グリに諷ふべし。

○「南無阿彌陀佛」此處は確かりと諷ふべし。

○「若我成佛」此處は靜かにさらりと諷ふべし。

○「是迄なりや名帳の」此地は靜かに諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○「いくたび」此處は入グリに諷ふべし。

○「みゝなしの池の玉藻の濡衣」此處は寛たりと諷ふべし。

連女

面、小面、鬘、鬘帶、腰卷、箔、水衣肩取る、腰帶、櫻の枝、扇、

○連は櫻の枝を持ち一聲にて出、內へ入り中にて脇へ向き踏み止め諷ふ。

○此連は引立てさらりと諷ふべし。

○「さりとては上人よ」此處は乘てすらりと諷ふべし。

後仕手

面、女增髮、鬘、鬘帶、腰卷、箔、水衣肩取る、腰帶、桂の枝、扇、

○後仕手は桂の枝を持ち連の謠の內に出、一の松にて連へ向き踏み止め諷ふ。

○「花の餘所目もねたましや」此處は「ねたましや」と心持を付けて輕くずかりと諷ふべし。

○「盛とて」此處も輕くずかりと諷ふべし。

○「恨みぞ增る」此處は確かりと心持を付けて諷ふべし。

○「花もちりなば」此地は輕くさらりと諷ふべし。

○「盡ぬ恨みを御前にて」此處は少し心處を付けて確かり諷ふべし。

○「彌生に」此處は輕くずかりと諷ひ、輕く地へ渡すべし。

○「又花の咲くぞや」此地はさらりと諷ひ出し、「松風春風も」と乘て懸て諷ひ出し「吹きよせよ吹きよせよ」よりさら〳〵と連て諷ひ「ほえ」と強みに確かりと止め「叫び腦み」より懸てさらりと運て諷ひ「偖こりや」と強みに諷ひ、「荒よそめをかしや」と替へて緩め「因果の報ひは」と少し靜め「一時の」とずかりと「うらみを」と入グリに「すみやかに」とずかりと「有明ざくら」より次第に靜めて諷ふべし。

竹の雪

素袍脇

○脇、名乘其外總て句讀の息繼を寛たりとはつきり諷ふべし。

子方

放髮、箔、長袴、唐織、坪折、扇、笠、

○「實や世の中に月若ほど果報なき者」此處は脇の名乘濟み狂言との說賦あり、狂言の呼び出しありて子方は扇を持ち出、內へ入り中へ行き下に居、玆に又狂言の說賦あり、狂言の入るを見て

謡ひ出すなり。

前仕手

面、曲見、鬘、鬘帯、厚板、扇、

○仕手は扇を持ちアシライにて出、橋掛にて正面へ踏み止め謡ふ。

○「此ほどは松吹く風もさびしくて」此サシは濕とりと淋しく謡ふべし。

○「何月若と申か」此處は少し懸て謡ふべし。

○「あゝ暫く」此處は懸て謡ひ出し、少し間を置て「名のらずは如何でそれとも」と輕くすらりと謡ひ出し「面影かはる」と心持を付けて謡ふべし、仕手は「あゝ暫く」と左の手を子方の肩へ掛け「面影かはる」とシヨル型あり。

○「哀や實」此處より靜かにすらりと謡ふべし。

○「身に着る衣は只鶉の」此處は子方を見る型あり、故に茲は少し具合を付けて靜めて謡ふべし。

○「所々もつゞかねば」此處より靜かにすらりと謡ふべし。

○「いづくに風のたまりつゝ」此處は濕とりと謡ふべし「寒をふせぎ」と仕手シヨル型あり。

○「みじか夜のゆめかや見れば驚くは」此地は濕とりと淋しく謡ふべし、此地の返しにて子方仕手と内へ入り子方は地の前に行き下に居、仕手は中へ出て下に居るなり。

○「尋ねて來る心ざし」此處より替へて謡ふべし。

○「何父御の召れ候とや」此處は輕く謡ひ「荒かなしや」と替へて謡ふべし、茲は「何父御の」と狂言へ向き謡ひ「荒かなしや」と子方へ向て謡ふなり、故に茲は謡ひ樣を替へて謡ふべし。

○「又此程に來りて母を慰め候へ」此處にて仕手は中入するなり。

○仕手幕へ入りて狂言子方を引立、中へ出、子方下に居る、夫より狂言の說賦ありて子方の坪折を脱がせ笠ゥ子方へ渡し竹の雪を拂へと命じて入る、子方は狂言の入るを見て笠を持ち、立て「去とては拂はでかくて有るならば」と謡ひ出すなり。

○「去りとては拂はでかくて」此地は子方の地なればさらりと謡ふべし。

○「長松の風」此處は「母上も姉御前も思ひは」と切りて少し呼吸を取りて締めて謡ひ出し、打切に謡ひ「みにしむばかり」と替へて謡ひ出し「荒さむや」と込てクリ、「月若助けよ」とずかりと謡ひ「實や無常の」より改めて謡ひ出すべし。

後仕手

面、曲見、鬘、鬘帯、腰卷、箔、水衣、腰帯、笠雪付ル、エブリ、扇、

姫

面、小面、鬘、鬘帯、腰卷、箔、水衣、腰帯、笠、雪付ル、エブリ、扇、

○仕手は笠を冠りエブリを持ち姫を先に立てゝアシライにて出、姫は一の松、仕手は二の松邊に止まり「實々生を更くると」謡ひ出すなり、姫も仕手と同樣笠を冠りエブリを持つ。

○「實々生を受る類ひ」此處は靜かにさらりと謡ふべし。

○「子を思ふ」此處は引立てすらりと謡ふべし。

○「花は根に」此處は替へて輕くすらりと謡ふべし。

○「歸らん事も」此處は乘て具合を付けて謡ふべし。

○「忘れて年をふる雪の」此處は靜かに濕とりと謡ふべし。

○「愧かしやいづくやり」此地は餘り調子を押へず静かにすらりと謡ふべし。

○「習はぬわざをすがみのは」此地は静かに確かりと謡ひ出し「笠の雪の重さよ」と心持を付けて謡ふべし、茲は左手、左の手を笠へ添へて曇る型あり、故に「重さよ」と心持を付けて確かりと謡ふべし。

○「今我は引かへて」此處は懸てすらりと謡ひ出し「引かへて」と强みに確かり止めて地へ渡すべし。

○「子の別れ路を悲しひて」此地は懸てすらりと進て謡ひ出し「孟宗にはかはりたり」とずかりと謡ひ「嬉しからずの」と改めて静めて確かりと謡ひ出すべし。

○「思ひの多き年月も」此處は静かにさらりと謡ふべし。

○「尾をふむ峯の竹には」此處の「は」の廻しを下げて謡ふ人と、中廻しに謡ふ人とあり、前者の方が正し。

○論議はさらりと謡ふべし。

○「よべども叫べども」此處よりすらりと運て謡ふべし。

○「何れも親にてましませども」此處は中聲にてさらりと「唯父御こそ恨めしう候へ」と静めて下の二に謡ふべし。

○「身をうつばりのつばめのならひ」此處は静かに濕とりと謡ふべし。

○「此月若をばころしけむ」此處は口傳のある所なり、心持を付けて謡ふべし。

○「餘所の歎きは一たんの思ひ」此處より替へてさらりと謡ひ出し「命惜しとも思はれず」と少し静めて謡ふべし。

○「身はしら雪と」此處はすらりと謡ふべし。

○「理りや面目なや」此地はさらりと謡ひ出し「思はぬ外の歎きかな」と静めて謡ふべし。

○「二人の親の悲しひの」此地はすらりと運で謡ひ出し「日々にそふ」とずかりと謡ひ「かくて親子にあひ竹の」より替へて謡ふべし。

○「ふかしぎなる憐みにや」此處は六文字の合方に謡ふ。

○「かくて親子にあひ竹の」此處はさら〳〵と謡ふべし。

鷺

大臣、直垂、上下、
立衆、直垂、上下、
脇、　直垂、上下、

○大臣、立衆、子方共何れもさらりとはつきり謡ふべし。

○脇は確かりとはつきり謡ふべし。

王

初冠、箔、單狩衣、指貫、込大口、腰帶、扇、「長絹、大口にて演ずる事もあり」

○「鷺の居る池の汀に松立て」此初同はすらりと謡ひ出し確かりと謡ふべし。

○「或は詩歌の舟をうかへ」此處より替へて謡ひ出し「手先」と入グリに謡ふべ。

仕手

面、直面、白垂、鷺載、白鉢卷、白箔、大口、白練、坪折、腰帶、扇、

○仕手は初同の内静かに出、橋掛りに止まり居る。

○「ねらひより」此地は確かりと謡ひ出し「此鷺驚き」より替へて弱吟にすらりと謡ひ「いだきとり」よりさらりと運て「皆人感じけり」と静め

「實や佛法」より改めて謡ひ出すべし。

○「猶々君の御惠み」此處は論議の心にて乘てさらりと謡ひ出し「鷺の藏人」とずかりと「召出されて」と緩めて謡ひ出し「さも嬉しげに」と締めて謡ふべし

○「洲崎の鷺の羽をたれて」此處は寛たりと謡ふべし。

○「松もそなるゝ、氣色かな」此地は仕手の位を更けて寛たりと謡ふべし。

○鷺の亂

○「賢き惠みは君道の」此處より乘てさらりと謡ひ出し「神妙〳〵」より輕くさら〳〵と「心うれしく飛あがつて」より段々と靜めて謡ふべし。

弓八幡

○脇、大臣、三人

○脇、次第名乘道行其外何れもさら〳〵と謡ふべし。

○「四つの海波靜なる時なれや」此處はすらりと謡ひ出し「廻る日影も」より替へて謡ふべし。

前仕手

面、小尉、尉髮、小格子、水衣肩取る、大口、腰帶、扇、弓袋に入る、

連男

放髮、厚板、水衣、大口、腰帶、扇、

○眞の一聲高砂の通り。

○二の句其外何れも高砂の通り

○「松高き枝もつらなる鳩の嶺」此處はすらりと謡ひ出し「君萬歳と祈るなる」より替へて謡ふべし、茲にて仕手と連と入れ替り內へ入り仕手は中に立ち、連は常座に立つ。

○「桑の弓とるや蓬の八幡山」此初同はすらりと謡ふべし。

○此曲は脇能中にても高砂志賀と共に位最も早き曲なり。

○クリ地はすらりと謡ふべし。

居曲

○此曲はさらりと謡ふべし「豐前の國、宇佐の郡」此處は少し緩めて謡ひ「れんだいじの麓に」よりさらりと「八重旗雲を」と又少し緩め「されば神功皇后も」より替へて謡ふべし。

○論議はさらりと謡ふべし。

○「只今爰に」此處より替て引立て謡ひ「八幡大菩薩の」より確かりと謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○待謠はすらりと謡ふべし。

後仕手

面、邯鄲男、黑垂、透冠、色鉢卷、厚板、狩衣、大口、腰帶、扇、

○後仕手は扇を持ち出端二段聞て出、內へ入り常座にて開き謡ふ。

○後仕手はさら〳〵とはつきり謡ふべし。

○「袖の白木綿返す〳〵も」此處は乘てすらりと謡ふべし。

神舞　四段

○「實や末世といひながら」此處は前の論議よりさらりと謡ふべし。

○「月のかつらの」此處は乘て謡ひ出し「さやけき影は」より少し緩め「皆神體と顯はれ」より寛たりと謡ふべし。

經政

脇　大口僧　三人

○脇名乘サシ其外何れも確かりと寛たり謡ふべ

し。

○「ことに又彼青山と云琵琶を」此處は餘りさらさら諷はず寛たりと諷ふべし「日々夜々の法のかど」より替へて諷ふべし。仕手は此初同の内に見合せ出、内へ入り常座に立て諷ふ。

仕手

面、十六、梨子打、白鉢卷、箔、黒垂、長絹、大口、太刀、腰帶、扇、

○仕手は扇を持ち初同の謠の内に見合せ出、内へ入り常座に立て諷ふ。

○此仕手は總て若くさらりと諷ふべし、

○「風枯木を吹ば晴天の雨」此處の「天」の字は澄て諷ふべし、但し雨月にては濁て諷ふ。

○「ふしぎやなはや深更に」此處は懸て諷ふべし。

○「まぼろしの常なき身とて經政の」此地は初同よりさらりと諷ふべし。

○「生をこそへだつれども」此處は輕くすらりと諷ひ「我は人を」と緩めて「實や吳竹の」より替へて諷ふべし。

○「よし夢なりとも現なりとも」此處は中聲にすらりと諷ひ出し「荒」と强く「ふしぎの事やな」と弱く諷ふべし。

○「今も引かるゝ心ゆへ」此地は靜かにさらりと諷ふべし。

○「されば彼の經政は」此地はさくりと諷ふべし。

○「月にならびの岡の松の」此地はすらりと諷ひ出し、具合を付けてさらりと運て諷ふべし。

舞曲

○此曲はさらりと引立て諷ふべし。

○「第三第四の絃は」此處より少し替へて諷ふべし。

○「荒名殘をしの」此處は込てクルベし。

○「また瞋恚の起る恨めしや」此處はすらりと諷ふべし。

○「さきに見えつる人影の」此處は懸て諷ふべし。

○「燈火をそむけては」此地はさら〳〵と輕く運て諷ふべし。

胡蝶

脇、着流僧、三人

○脇次第名乘道行其外何れも「藤」の脇と大差なし、寛たりと諷ふべし。

○「三芳野の高根のみゆきまださへて」此處は靜かにすらりと諷ひ出し「霞むそなたや」より替へて諷ふべし。

○「又是なる所を見れば」此處より替へて諷ひ、「むかし忍ぶの忘れ草」と中音にすらりと諷ひ「御車よせのほとりなる」より又替へて諷ふべし。

前仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、唐織、扇、

○よびかけ。

○「雲の上人春ごとに」此處はすらりと諷ひ出し「雲の」の「の」の字へ產み字を出して輕く當てて諷ふべし。

○「梅が香に昔をとへば」此初同はすらりと諷ひ出し「昔こひしき」より替へて諷ひ「海士の」と入ぐりに諷ふべし。

舞曲

○此曲は靜かにさらりと諷ふべし。

○仕手は曲の内「昔語りを夕暮の」より立て型あり。

○「昔語りを」此處は込てクルベし。

○「やどらせ給へ」此處は入グリに諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○待謠は寛たりと謡ふべし。

後仕手

面、増、鬘、鬘帶、長絹、緋大口、腰帶、扇、黒垂、天冠蝶を戴く、

○後仕手は扇を持ち一聲にて出、内へ入り常座にて開き謡ふ。

○後仕手は浮やかにのんびりと謡ふべし。

○「有明の月も照そふ」此處は懸て謡ふべし。

中の舞、三段

○「四季折々の花ざかり」此地は乗てさらりと謳ひ出し「雪をめぐらす舞の袖」よりすらりと運で謳ふべし。

○「春夏秋の花もつきて」此處は少し靜めて謳ひ返しの地よりさらりと謳ひ「あけゆく」と入グリに謡ふべし。

鳥追

前仕手

面、深井、鬘、鬘帶、箔、唐織、扇、

子方

面、直面、放髮、厚板、長袴、扇、

○初めに仕手子方と出、仕手は脇座へ行き下に居、子方は地の前へ行き下に居るなり。

素袍脇　一人

○脇名乗其外何れひ句讀の息繼を寛たりと謡ひ、さらりと確かり謡ふべし。

○「扨も此日暮の里と申は」此處は替へて謡ふ「又頼み奉る日暮殿は」より又替へ「如何に花若殿の御座候か」と替へて「やあ如何に花若殿」と少し懸て謡ひ「某が參りたると」と少し靜めて謡ふべし。

○「なふ〳〵花若殿」此處は懸て謡ふべし「必ず御出有て鳥を御追候へ」と謡ひて脇は中入するなり。

○「をちぶれはて、淺ましや」此處にて仕手シオル型あり、此處は心持を付けて謡ふべし。

○「賤がなるこだひきつれて」此地は濕とりと謡ふべし。

○「ともに涙の露しげき」此初同は靜かに濕とりと謡ふべし、此地にて子方と仕手と二人共中入するなり。

○脇連は次第にて出、「秋もうからぬ」と次第を謡ふ事常の通り。

○脇連の次第名乗其外何れもさら〳〵と謡ふべし。

後仕手

面、深井、鬘、鬘帶、腰卷、箔、腰帶、水衣

肩上る、扇、笠

後子方

放髮、腰卷、腰帶、撥、扇

○初めに舟の作り物を常座へ出し、一聲になり仕手は扇を持ち笠を冠り、子方は扇を挿し右に撥を持ち一聲二段聞て、子方、仕手、脇と出、子方は船首へ、仕手は胴の間へ、脇と共に乗り、三人共正面して、「面白や」と脇、謡ひ出すなり。

○「我等かわざこそ、うつゝなき」此處は仕手、子方二人共にシヨル型あり、故に茲は心持を付けて謡ふべし。

○「實や夢の世のなにか譬にならざらん」此地は餘り押へずにすらりと謡ひ出し、「此頃は」と替へてずかりと謡ひ「猶秋雨の」よりさらりと謡ふべし、仕手は「此頃は」にて左の手を笠へ掛けて左の方を高く見る型あり。

○「さるにても殿は此秋の頃」此處は靜かにすらりと謡ひ出し「たゞ花若が果報なきこそうたてし

う候へ」と具合を付けて諷ふべし。

○「たとひ訴訟はかなはずとも」此處は靜かに濕とりと諷ふべし。

○「いつまでか」此地は靜かに濕とりと諷ひ出し「はかなく袖をぬらすべき」と心持を付けて諷ふべし。

○「餘所の舟にも」此處は「舟にも」と出して諷ひ彈て地へ渡すべし。

○「うつ皷」此地は懸て諷ひ出し「花若よ悲しくとも」と心持を付けて諷ひ「いとせめて」より替へて諷ふべし。

○「しどろ、もどろになる皷の」此處は拍子を踏む型あり、茲は「しどろ」と寄せてずかりと諷ひ、少し呼吸を取て「もどろに」と具合を付けて諷ふべし。

○「やあ如何にあれに羯皷鳴子かざりたる舟を」此處は懸て諷ふべし。

○「あゝ存外なる者かな」此處は「あゝ」と強みに扱て「存外なる者かな」とずかりと出して諷ふべし。

○「やあ〳〵あの舟よせよとこそ」此處は懸て諷ひ出し「よせよとこそ」と強みにずかりと諷ふべし。

○「や。是は日暮殿にて御座候か」此處は呼吸を取て「や」と驚たる樣を諷ひ「是は日暮殿にて御座候か」と少し懸て諷ひ「扨御訴訟は候」と替へてふべし。

○「言語道斷」此處は強みにずかりと諷ひ「夫弓取の子は」より替へて諷ひ「唯是と申も」より替へて「如何に左近の尉」と又替へて諷ひ出し「何とて物をばいはぬぞ」と強みにずかりと諷ふべし。

○「只ねがはくは此程の」此地はさらりと諷ひ出し「左近尉が身の科を」とずかりと諷ひ「親子にゆるし」と少し緩めて具合を付けて諷ふべし。

○「此上は、いなとは如何がいなむしろの」此處は「此上は」とずかりと諷ひ「いなとは如何が」と緩めて「いなむしろの」とさらりと諷ふべし。

○「扨其後に彼人は」此地はさら〳〵と諷ふべし。

大會

脇、大口僧、三人

○脇は位を取て確かりと諷ふべし。

○「鷲の太山をうつすなる」此初同は寛たりと確かり諷ふべし。

前仕手

面、直面、放髪、頭巾、篠掛、厚板、水衣、大口、腰帶、珠數、少刀、扇

○仕手は初同の地謠一バイに出、內へ入り常座に立て諷ふ。

○「月は古殿の燈をかゝげ」此處はすらりと諷ひ「滑らかなる」と少し緩めて確かりと諷ひ「苔路を歩み」よりさらりと諷ふべし。

○「返すゞも約諾し」此地はさらりと諷ひ出し「云かと見れば雲霧」よりすらりと運び「梢に翔り」より進て諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、大癋見、赤頭、大頭巾、厚板、狩衣、半切、腰帶、大會頭巾、經、羽團扇、珠數

○後仕手は左に經、右に珠數を持ち、出端二段聞て出、一の松にて開き諷ふ。

○後仕手は強みに確かりと諷ふべし。

○「ふしぎや虛空音樂響き」此地は乘て寛たりと確

かりと諷ふべし。

○「僧正其時忽に」此處よりさらりと諷ひ「俄かに臺嶺響き震動し」より進で諷ふべし。

連

面、天神、黒垂、色鉢卷、輪冠、厚板、側次半切、腰帶、打杖

○早笛にて連帝釋出、打上を聞て「刹那が間に」と地より諷ひ出す。

○「刹那が間に喜見城の」此處は少し靜めて諷ひ出し、返しより段々にすらりと運て諷ふべし。

項羽

脇、水衣、二人

○脇次第名乘道行其外何れもさらりと諷ふべし。

○「草かるをのこ心なく」此處はすらりと諷ひ出し「かへれば跡は」より替へて諷ふべし。

前仕手

面、三光尉、尉髮、熨斗目、水衣肩取る、腰帶扇、擢掉

○前仕手は左に擢掉を持ち一聲にて出、內へ入り常座に踏み止め諷ふ。

○此仕手は强みにさらりと諷ふべし。

○「露かりこめて秋卓の」此地は靜かにすらりと諷ひ出し「乘せつらん」の「ん」の字を消し廻しに諷ひ「天の川」とさらりと諷ひ出し「みなとに近き」と替へて乘て諷ひ出すべし。

○「扨も項羽高祖の戰」此處より「語」となる、玆は「語て聞せ申候べし」と諷ひて中へ行き正面へ向き床机に掛け花を捨てゝ扇を抜き持ち諷ふ故に玆は素謠の時も少し間を置て改めて諷ひ出すべし。

○「又望雲雕と云馬は」此處より替へて諷ふべし。

○「呂馬童は、恐れて近づかず」此處は押へて諷ひ出しさらりと諷ひ「望雲雕はひざを折り」より替へて諷ひ「今はつゝまじ我こそは」より引立て諷ふべし。仕手は此地にて中入するなり。

○「樣々に弔ふ法の聲立て」此待謠はすらりと諷ひ出し。「盤若の船の」より替へて諷ひ「一切有情」と又替へて靜めてすらりと諷ふべし。

後仕手

面、怪、黒頭、白鉢卷、唐織、厚板、法被肩脱ぐ、半切、腰帶、扇、鉾

連女

面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流

○後仕手は扇を挿し鉾を持ち、出端一段にて連を先に立てゝ出、連は內へ入り中に立ち、仕手は一の松にて鉾を突き立て開き諷ふ。

○後仕手は强みに懸てさらりと諷ふべし。

○「紫の雲間橫ぎる出立は」此處はすらりと諷ふべし。

○「各妓樂を奏しつゝ」此地は乘てさらりと諷ひ出し「又執心の責來るぞや」と替へて確かりと靜めて諷ひ「あら苦しの苦患やな」と心持を付けて諷ふべし。

○「身を投げ空しく成給へば」此處は進て諷ふべし。

○「項羽は虞氏が別れと我身の」此處は少し靜めて諷ひ「成ゆく草葉の露もろともに」よりすらりと運て諷ひ「哀なる」と確かりと諷ふべし。

○「哀苦しき」此處は少し靜めて諷ひ、返しの地より段々にさら〳〵と諷ひ「あらき聲々」と張て「いで物見せんと」より進で「取ては投げ捨て」と烈しく「又は引きふせ」と少し緩め「ねぢ首取々に」と烈しく「土中の塵とぞ」より靜めて

謡ふべし。

求塚

脇、着流僧、三人

○脇次第名乗道行其外何れも餘り重くならぬ樣にさらりと謡ふべし。

○「旅衣八重の汐路の浦傳ひ」此處はすらりと謡ひ出し「明し暮して行程に」より替へて謡ふべし。

前仕手

面、增、鬘、鬘帶、箔、腰帶、水衣肩取る、扇

連女、三人

總て仕手に同じ

○前仕手は扇を持ち一聲にて連三人を先に立てゝ出、連は一の松に止り、仕手は三の松邊にて踏み止めて連と向合ひ謡ふ。

○此仕手は論議の終り迄は輕くさらりと謡ふべし。

○「木の芽も春の淡雪に」此處は引立て輕くすらりと謡ふべし。

○「嵐ふく杜の木蔭」此邊より仕手、連一同内へ入り、連は脇正面して立ち、仕手は中へ行き正面して立つ。

○「實目前の所々」此處いすらりと謡ふべし。

○「求塚とは名には聞けども」此處は知て知らざる風を粧ふ所なれば其具合を謡ふべし。

○「何しにやすらひ給ふらん」此處は「ら」の廻しを中に下げると難も普通の中程には下げて謡はず、「花筐」の「其上名におふ蘇武が旅雁」及び「江口」の「むつかしや」と云ふ所と同樣の謡ひ方なり。

○「春日野のとぶ火の野守出て見よ」此初同はすらりと謡ひ出し「君がため」より替へて謡ひ「衣」と込て張り「ながら摘うよ」輕くすらりと謡ひ「澤邊なる」より改めて謡ひ出すべし。

○論議は前と具合を替へてさら〳〵と謡ふべし。

○「河風までも」此處は入グリに謡ひ「吹かるゝ」と當らずに柔かくたつぷりと張り「摘み殘して歸らん」と輕く謡ひ「若菜摘殘し」より段々と靜めて謡ふべし、此地にて連三人共入るなり。

○「先に御たづね候求塚を敎へ申候はん」此詞より少し調子を控へて重く謡ふべし。

○「是社求塚にて候へ」此處は仕手、脇へ向き「此方へ御入候へ」と謡ひて作り物へ向き出て「是社」と謡ひ出す所なれば少し間を置て謡ひ出すべし。

○語りは重く寛たりと謡ふべし、此處よりは前と全く別に位を付けて重く確かりと謡ふべし。

○「同じ日の」此處は扱て謡ひ「わりなき思ひの玉章を贈る」と心持を付けて謡ひ「彼女」と扱ひ「思ふ樣」と出し「獨りに靡かば獨りの恨」茲は分けて「獨りの恨」と心持を付けて謡ひ「一つの翅に中りしかば」と懸て謡ひ「其時童思ふ樣」より靜かに締めて謡ひ「住わびつ」より替へて謡ふべし。

○「是を最後の言葉にて」此地は押へて充分締めて謡ひ「指」と寄せて强くずかりと謡ひ「ちがへて」と緩めて具合を付けて謡ふべし、仕手は此地にて作り物へ中入するなり。

○「一夜臥すをしかの角の塚の草」此待謠は靜かに確かりと謡ひ、「南無幽靈」より締めて謡ふべし。

後仕手

面、檜垣女、坪折、大口、腰帶、箔、扇

○後仕手は塚の内にて扇を持床机に掛り、出端二

段聞て諷ひ出す。

○「あふ嘖野人稀なり」此處は強く靜かに諷ひ出し「骸を爭ふ猛獸は」より弱吟に諷ひ「さつて」と強くたつぷりと「て」の產み字より弱め「ま」と輕くハネ「殘る」と靜めて諷ひ「古墳多くは」より強く「少年」と押へてクリ「生田の名にも」より弱吟に諷ふべし。

○「去て久しき古鄕の人の」此處は強みに確かりと押へて諷ふべし。

○「御法の聲は有難や」此處は弱みに押へて諷ふべし。

○「あら闇浮戀しや」此處は前の調子を受けずに別に「あら」と充分に張て諷ふべし。

○「されば人一日一夜をふるにだに」此地は確かりと押へて諷ひ出し「我も」の「も」の字より弱めて諷ひ「再び世にも」より弱吟に諷ふべし。

○「荒いたはしの御有樣やな」此處は前と別に中音にて押へて確かり諷ひ「種々諸惡趣」より輕くさらりと「はや〳〵浮ひ給へ」と替へて引立てずかりと諷ふべし。

○「有難や此苦しみの隙なきに」此處は靜かに押へて諷ふべし。

○「怖しやをことはたそに」此處より少し具合を替へて懸て諷ふべし。

○「蓍足つるぎのごとく成が」此處は中聲にて強みにすらりと諷ひ「頭をつゝき」より調子を替へて諷ひ「こはそも童が」と具合を替へて諷ふべし。

○「火宅の柱に」此處は懸て諷ひ出し「はしらに」とずかりと諷ひ彈て止めて地へ渡すべし。

○「すがりつき取付ば」此地は懸てすらりと進て諷ひ出し「あら」と引て「あつや」と當らずにずかりと下げ「黑煙と成たるぞや」と締めて諷ふべし。

○「而うじて起上れば」此處より靜めて諷ひ、「足上」とたつぷりと諷り「頭下」と強みに「三年三月の」と靜かに諷ひ「少し苦患の隙かと思へば」と諷ひ、少し呼吸を取り「鬼もさり」とずかりと「火焰も消て」と靜め「有つる栖は」よりすらりと「闇さはくらし」と句切て少し呼吸を取り「あなたを尋ね」と諷ひ出し「草の蔭野の露消々と」より段々と靜めて諷ふべし。

岩船

脇、大臣、三人

○脇次第名乘道行其外何れもさら〳〵と諷ふべし。

○「なに事も心に叶ふ此時の」此處はすらりと諷ひ出し「こま唐土も」より替へて諷ふべし。

前仕手

面、童子、黑頭、白鉢卷、箔、水衣、腰帶、扇、珠

○前仕手は扇を挿し玉を兩手に持ち一聲にて出、內へ入り常座に踏み止めて諷ふ。

○此曲は翁付になる時は眞の一聲となる、但し此時には連出るなり。

○「市のちまたに、出るなり」此處は眞の一聲にあらざる時は「出るなり」の「り」の字を引て切らずに續けて次ぎの廻しを諷ふなり。

○「いざ〳〵市に出鹽の」此處は常の如く前と調子を替へて諷ふべし。

○「伊勢しまや鹽干にひろふたま〳〵も」此處はすらりと諷ひ出し「民豐かなる樂しみを」より替へて諷ふべし。

○「不思議やかな是なる市人をみれば」此處は懸て謡ふべし。

○「爰に御幸を住よしの」此地はさらりと謡ひ出し「めてたき」の「き」の廻しを消し廻しに謡ひ「千代迄と」と論議を謡ひ出すなり

○論議はさらり謡ふべし。

○「今は何をかつゝむべき」此地はすらりとはつきりと謡ひ出し「飛かける天の岩船」より乗て運て謡ひ「秋津島根は宮柱」より進て謡ひ「嵐と共に失にけり」の返しより静めて謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、黒髪、赤頭、白鉢巻、龍臺、厚板、法被

半切、扇、擢掉

○後仕手は出端にて出、一の松にて踏み止める時「久方の」と地より謡ひ出すなり。

○此曲を早笛にて演ずる事あり、此時は仕手は「久方の、天の採女か岩船を」の地謡一パイに内へ入り常座て開き謡ふ。

○後仕手は總て滞らぬ樣さら〳〵と謡ふべし。

○「寶をよする波の敷」此處は打上頭を聞て謡ひ出し「ていとうの拍子を打なりや」邊より次第に進て謡ふべし。

生田敦盛

脇、着流僧、一人

仕手

面、今若、黒垂、梨子打、白鉢巻、大口、唐織、長絹、腰帯、太刀、肩

○仕手は初めに藁屋に引廻しを掛けたる作り物に入て大小前へ出、子方は右に扇、左に珠數を持ち出、内へ入り中にて正面して立ち脇は跡に付き出、名乗る。

○脇は名乗其外何れもさら〳〵と謡ふべし。

○「有がたや所からなる御社の」此處は脇の名乗濟て正少し先へ出て下に居、合掌して謡ひ出すなり。

○「かくばかり祈る心の末とげば」此初同は静かに濕とりと謡ひ出し「誓ひたゞすの」より替へて謡ふべし。

○「山蔭の加茂の宮井を立出て」此處は静かにさらりと謡ひ「風も身にしむ」より改めて謡ひ出すべし。

○「爰かしこを詠め候程に」此處より替へて謡ふべし。

○「五蘊もとより是皆空」此處は子方脇座へ行き下に居て引廻しを卸して謡ひ出す。

○此仕手は滞ぬ樣に少し確かりめに謡ふ。

○「ふしぎなや是なる草の庵のうちに」此處は懸て謡ふべし。

○「敦盛が幽靈來りたり」此處はすらりと謡ふべし。

○「なふ敦盛とはわかれし父かと」此處は子方仕手へ行き仕手の左の袖へ手を掛るなり、此處は懸て謡ふべし。

○「身にも覺えず走りより」此處も懸て謡ひ出し「走り」と出して謡ひ「り」の字の廻しを小さく廻して彈で止めて地へ渡すべし。

○「袂にすがりたえこがれ」此地は懸てすらりと進て謡ひ出し「あふ事の嬉しさも」とずかりと謡ひ「うき身にあまる」と静めて具合を付けて謡ふべし、茲にて仕手子方二人共シヨル型あり、「かくは知れども」より改めて静かに謡ふべし。

○「むざんやな忘れがたみの撫子の」此處に柔かに

すらりと諷ひ出し「扨も御身孝行の心深き故」より替へて諷ふべし。

○「ふけゆく月のよもすがら昔をいざや語らん」此地は靜かにさらりと諷ふべし、此處の打切にて子方は立て脇座へ行き下に居、仕手は「しかるに平家の」にて作り物より出るなり。

舞曲

○此曲はさらりと諷ふべし。

○「ならはぬ旅の」此處より替へて諷ふべし。

○破掛、中の舞、三段

○「あれに見えたるは如何なる者ぞ」此處は懸て諷ひ出し「片時の」と緩めて「いとまと仰られしに」とさらりと「今迄の遲參心得ずと」と懸て「焔王いからせ給ふぞと」と强みにずかりと諷ふべし。

○「いふかと見ればふしぎやな」此地はさらりと運て諷ひ「物々し明暮に」と少し靜め「馴つる修羅の」より又段々に運び「月澄わたりて」と替へてすらりと弱く諷ふべし、玆にて仕手は太刀を捨て扇右に拔き持ち雲の扇を仕る型あり。

○「愧かしや子ながらも」此處は輕くさらりと諷ひ「ねんごろに」と入グリに諷ひ「泣々袂を引きわかれ」より靜めて諷ふべし。

攝待

連、素袍男、扇

○初めに大小座着て男出常座にて名乘を諷ふ、男は名乘濟て後見座へ寃ぎ、夫より大小次第打出す。

判官

放髮、水衣、大口、扇

立衆

放髮、水衣、大口、扇

脇

放髮、水衣、大口、扇

○右判官以下一同山伏の姿なり。

○次第二段にて判官、脇、兼房鷲尾以下連山伏都合十二人出、内へ入り向合ひ諷ふ。

○次第道行は「安宅」よりも靜かに乘て諷ふべし。

○道行は常の如く「其松島に」より替へて諷ふべし。

○脇は總て强みに大きく確かり諷ふべし。

○「何々佐藤の館に於て山伏攝待」此處は前と替へてさらりと諷ひ、少し呼吸を取て「是は一大事の御事にて候」と諷ひ「扨何と候べき」と又替へて少し懸て諷ふべし。

○「さあらば貝を立うずるにて候」此處にて判官は床机に掛り跡順々に並ぶ。

子方

放髮、箔、大口、少刀、腰帶、扇

○「如何に申上候」此處は前と氣を替へ押へて靜かに諷ひ「我等を始め」と替へてずかりと諷ひ、以下さら〳〵と諷ふべし。

仕手

面、姥、鬘、花帽子、箔、厚板着流、扇

○仕手は右に扇を持ちアシライにて出、二の松にて止るを見て子方立て仕手へ向き諷ふ。

○「山伏達はいくたり御着ありたるぞ」此處は具合を付けて諷ふべし。

○「かしまし〳〵」此處は子方の謠へ付けて諷ふべし。

○「さびしさよ」此處にて仕手はシヨル型あり、玆は心持を付けて諷ひ、サシより具合を替へて諷ふべし。

○「げにやはゞかりある身として」此處は調子を控へさらりめに具合を付けて謡ふべし。
○「餘りに〳〵御なつかしさ」此處より替へて謡ふべし、茲は初めをたつぷりと謡ひ、返しをずかりと謡ふべし。
○「御前に參りて、さむらふなり」此處は靜めて謡ひ「是は故佐藤庄司が後家」より替へてさらりと謡ふべし。
○「實や親子思愛の」此處は前と替へて引立て寛たりと謡ふべし。
○「またはうき身の愧をも」此處は「愧をも」と出して心持を付けて謡ふべし。
○「嫡子次信は八島にて討れ」此處は改めて謡ひ出し「晴ぬ思ひやなぐさむと」と心持を付けて謡ひ「札を立てより此方」より替へて少しさらりと謡ふべし。
○「ないし一人二人」此處は「ないし」と切り切らずに謡ふべし。
○「十二人は是が始めにて候」此處は段々に靜めて謡ひ「いづれが我君ぞ」より替へて謡ひ出すべし。
○「いづれが我君ぞ」此處は仕手左方より判官以下の山伏を見廻す型あり、茲は「いづれが」と少し懸て「我君ぞ」と緩めてたつぷりと、「いづれがそにてましますぞ」と輕くすらりと謡ふべし。
○「此姥が耳にそと御敎へ候はゞ」此處は仕手左の手を耳へ上げる型あり、「そと御敎へ」と心持を付けて確かりと謡ふべし。
○「空しく成りし次信を」此處は調子を替へて低くすらりと謡ふべし。
○「親子よりも主從は」此初同は靜かに濕とりと謡ひ「殊更御爲に」より替へて謡ひ出し「獨は母」と句切て「獨は子なり」と分けて謡ふべし。
○「身には」此處は入グリに謡ひ「あら恨めしの」とシヨル型あり、茲は心持を付けて謡ふべし。
○「なふ〳〵何とて皆々物をば」此處はシヨリの手を除けながら脇へ向き謡ひ掛くる所なれば具合を付けて少し懸て謡ふべし。
○「いや所詮まこと次信の母にて渡り候はゞ」此處より懸へて謡ふべし。
○「先われに渡り候山伏は」此處より替へて謡ふべし。
○「一の宿老はたそ」此曲中に「播磨の人はたそ」と「近江の人はたそ」と都合三ヶ所あり、此三ッの「たそ」は夫々謡ひ樣を異にせり。
○初　はたそ（一ツ一押）
○中　はたそ（一ツ押一押）
○終　はたそ（一ツ一押一押）

即ち中と終とは同樣に謡ふなり、茲は初と終とを同樣に謡ひ、中を替へて謡ふ人もあり。
○「あらけしからずの御風情や候」此處は少し間を置て「あら」と上より懸て謡ひ、「又あれにましますぞ客僧は」と替へて謡ふべし。
○「や。是は播磨の人の聲にて候」此處は「や」と下にて低く謡ひ「故庄司殿と契り」と少しさらりめに謡ひ「唯恨めしう候へ」とシヨル型あり、茲は心持を付けて謡ふべし。
○「されば我國の人の聲なれば」此處はシヨリの手を卸しながら謡ふ所なれば其心にて前と替へてさらりと謡ふべし。
○「いで此御供の中に播磨の人はたそ」此處は改めて確かりと謡ひ出し「是も思ひ出したり」と替へて謡ふべし。
○「此御聲こそ大事にて候へ」此處は脇の詞を聞て

諷ひ出すなり、故に少し呼吸を取り「此」と諷ひ面を直しつゝ「御聲こそ」と諷ふなり。

○「器量こつがら人に勝れ」此處は「器量」と強みにたつぷりと諷ふべし。

○「三塔一の惡僧」此處は「三塔」と扱て諷ひ「今は又」と上より懸て諷ひ「一人當千の武士よな ふ」とすらりと諷ひ、終りを引かずに短かく確かりと止めて地へ渡すべし。

○「武士も物の哀はしる物を」此地は懸てすらりと諷ひ出し「人目も知らず泣居たり」より段々と靜めて諷ふべし。

○「いや如何につゝませ給ふとも」此處はすらりと引立て諷ふべし。

○「疑ひもなき我君よ」此處は「我君よ」と出して諷ひ「よ」の字の廻しを小さく廻して彈て地へ渡すべし。

○「父たべなふとて走り寄れば」此地はすらりと進て諷ひ出し「泣々膝にいだきとる」と少し緩めて諷ひ「實や梅檀は」より改めて諷ひ出し寛たりと諷ふべし。

○「餘所のみるめまで」此處は少しずかりと諷ひ「皆涙をぞ」より段々と靜めて諷ふべし。

○「荒有難や候」此處は押へて確かりと諷ふべし。

○「此所は此祖母が計ひにて候程に」此處は具合を替へてさらりと諷ふべし。

○「如何に我君に申上候」此處は少し間を置て改めて諷ひ出すべし。

○「畏て候」此處は下て押へて諷ひ「御意と申御所望と云ひ」と確かり諷ひ「扨も」より「語り」となるなり。

○「扨も」此處は改めて強くずかりと諷ひ出し「小船に取乘り」とすらりと諷ひ「磯」と別に出し

て扱ひ「矢一筋參らせん」と強く懸て諷ひ出し「請て」と別に出して少し緩めて扱ひ「見給へとのゝしる」と具合を付けて諷ひ「かう申各を初めとして」と替へて緩め、「次信は心まさりの剛の武者にて」と強く懸て「義經是にありやとて」と茲も懸て諷ひ「につこと」と少し緩めて具合を付け「笑て」と扱ひ「控へ給ふ」とずかりと諷ひ「扨其時に敎經は」と緩め「彎まうけたる弓なれば」と強く大きく懸て諷ひ「矢坪をさしてひようど放つ」より「かけずたまらずつゝと射通す」迄強く懸てずかりと進で諷ひ「後に控へ給ふ我君の」と緩め「御着背の草摺にはつたと射止む」と懸て「扨其時に次信は」と緩め「馬の上にて」と諷ひて「乘直らん」と出し「乘り」と下て押へて「直らんと」と又出して「せしかども」とずかりと出して諷ひ「馬より下に」と懸て「どうど落つ」と具合を付けてずかりと諷ひ「やがて我君御馬をよせ」と緩め「如何に」と緩めて確かりと扱ひ、返しを輕く出して諷ひ「宜へども」とずかりと出して諷ひ「たんだ」と下で押へて扱ひ「よわりに弱り」と出して「空しくなる」とずかりと出し「なんぼう」と大きく諷ふべし。

○「わら愚や忠信は」此處は強く懸て諷ひ出し、以下さらりと強く諷ひ「菊王が眞中對通し」と強く懸て諷ひ「程なく船にてむなしくなる」と緩め「眼前」と扱ひ「兄の敵をば」とずかり〳〵出し「取て候ひしよ」と強くずかりと諷ひ捨つべし。

○「扨は平家も大將に」此處は靜かに押へて寛たりと諷ふべし。

居曲。

○此曲は靜かに具合を付けてさらりと謡ひ。「次信其時に」より替へて謡ひ「命のかろき身は」と少しずかりと謡ひ、少し呼吸を取り「露塵なにか惜からん」と具合を付けて謡ひ、「去ながら舊郷に」より替へて謡ふべし。

○「母は思ひに堪へかねて」此處は押へて靜かに濕とりと謡ふべし。

○「月の盃取出し」仕手は茲にて立ち「御酌にこそまゐりけれ」にて扇を開き判官へ向き中にて下に居て酌を仕て扇をたゝみ正を向く。

○「去程に夜もほの〳〵と明け行けば」此地は靜かに確かりと謡ひ出し「暇申て」より弱めて謡ふべし。

○「いかに菊王」此處は少し懸てすらりと謡ふべし。

○「さあらば思ひ出したり」此處も少し懸てすらりと謡ふべし。

○「辨慶涙を押へつゝ」此處は「辨慶涙を」と強みに確かり謡ひ「押へつゝ」と少し靜めて具合を付けて謡ひ「如何に申さん鶴若殿」より氣を替へて懸て謡ふべし。

○「我も迎ひに參らんと」此處はすらりと謡ひ出し「參らんと」と出して確かりと謡ひ地へ渡すべし。

○「面々聲々にすかされて」此處は靜かにすらりと謡ひ出し「心得て」とずかりと謡ひ、確かりと謡ひ止め、少し呼吸を取て「すこし言葉の」と具合を付けて謡ひ出し「よわりたる」と靜めて打切に謡ひ「折を得て客僧は」と改めて強く謡ひ「泣々宿を」と締めて弱く謡ふべし。

○「老尼は鶴若を抱き入れ」此處は前と離れて別に押へて確かりと締めて謡ふべし。

○「行は慰む方もあり」此地は仕手の調子を受けて靜かに濕とりと締めて謡ふべし。

滿仲

仕手

而、直面、折烏帽子、厚板、直垂、大口、腰帶、扇、太刀

滿仲

黒風折、厚板、長絹、大口、腰帶、少刀、扇

子方「美女」

金元結、箔、長絹、大口、腰帶、扇

子方「幸壽」

箔、長袴

○初めに滿仲狂言、太刀持出、滿仲は脇座へ行き床机に掛り、夫より大小共床机に掛り、美女、幸壽と出、後見座に窕ぐ。

○仕手は一の松にて名乗を謡ふ。

○「如何に申上候」此處は「只今御所へ參り候」と謡ひ、右へとり後見座へ窕ぎ、美女を引立て手を除け滿仲へ向き下に居、禮をしながら「如何に」と謡ひ出すなり、故に茲は少し間を置て謡ひ出すべし。

○「管絃は」此處はずかりと懸て謡ひ出し、少し間を置て「問へどもいはぬ」と懸て強みに謡ひ出すべし。

○「こはたが爲なれば」此初同はすらりと運て謡ひ出し「跡を付けぬ庭の雪」と段々に靜めて打切に謡ひ「人に見せんも」より改めて謡ひ出し「御佩刀を取り給へば」より懸て進て謡ひ「取付き」より弱めて謡ひ「危き美女御前の」とすらりと謡ひ「御身の程ぞ」より靜めて謡ふべし。

○「如何に仲光」此處は強みにずかりと謡ひ、「寺に

置てのかひは何事ぞ」と懸て強みに諷ふべし。

○「御諚尤にて候去ながら」此處は下て押へて靜かに諷ひ「折々の」と扱ひ「御折鑑にて社候へ」と出して諷ふべし。

○「仲光ともに其儘には置まじきぞ」此處は強みに懸て諷ふべし。

○「何事も御諚をば背き申間敷候」此處は靜かに諷ひ「言語道斷」と前と全く替へてずかりと諷ふべし、蓋し茲は獨言なれば其心持ちを諷ひ「いや〳〵何と仰せ候とも」と替へて諷ひ「如何に申上候」と改めて諷ふべし。

○「實々健氣成事を仰せ候ものかな」此處は落付て靜かに諷ふべし。

○「や。何と申ぞ」此處は「一先落し申さうずるにて候」と美女へ向き禮をなし、立て橋掛を見て「や」と諷ひ、少し呼吸を取り「何と申ぞ」と諷ふ所なれば其心持を諷ふべし。

○「又御使のたちたると申か」此處は懸て諷ひ、少し呼吸を取て「荒笑止や」と替へて「扨何と仕り候べき」と又具合を替へて諷ふべし。

○「實や何事も報ひ有ける浮世かな」此處はすらりと諷ふべし。

○「現世に纏て」此處は「現世に」とすらりと諷ひ出し「纏て」と出して諷ふべし。

○「報ひは人の咎ならじ」此地はさらりと諷ひ出し「互に憂事を」より替へて諷ふべし。

○「哀れ某御年の程にて候はゞ」此處は靜かに心持を付けて諷ふべし。

○「惜しからぬ命も」此處は靜かにさらりと諷ひ出し「心に任せぬ口惜さは候」と心持を付けて諷ふべし、仕手は茲にてシヨル型あり。

○「何と申ぞ」此處は引立てはつきりと諷ひ「さすはをしゝ」と出して諷ふべし。

○「心よわしや白檀弓」此一句は少し心持を付けて諷ふべし、此處は仕手太刀へ手を掛け美女へ進み行き又跡へ下る型あり。

○「思ひ切りつゝ親心の」此處は「思ひ切りつゝ」とすらりと諷ひ「親心の」と懸て諷ひ「闇打に」より進て諷ひ「我子を夢となしにけり」の返しより靜めて諷ふべし。

○「いしくも仕りたるものかな」此處は、はつきりと諷ふべし。

○「いやさは御座なく候」此處は下て押へて「いや」と扱ひ「さは御座なく候」と出して「少し」と扱ひ「たゞらひ候ところに」と出して「やあ」と大きく諷ひ「如何に仲光をくれたるかと」と前と具合を替へてはつきりと諷ひ、少し間を置き呼吸を取て「是を最後の御言葉にて候」と又

が仲光が子にて候」と込めて諷ひ「實々汝が首を取り」と詰めて「更ば御命に替り候へ」と茲も引立てはつきりと諷ひ、少し間を置て「時刻移りて叶ふまじと」と懸てずかりと諷ふべし。

○「なふ御主の命に替る事」此處は「なふ」と「御主」とを分けて諷ふべし。

○「此方は思ひ子」此處は幸壽を見て諷ふ所なれば其具合を諷ふべし。

○「身は是程にをしからじ」此地はさらりと諷ひ出し「猛き心にも」とずかりと諷ひ「弱り果たる」と具合を付けて締めて諷ふべし。

○「かなた此方も幼けなき」此處は右にて美女を指し、左の方幸壽を見て立ち、心迷ふて決せざる所なれば其具合を諷ふべし。

○「或は御主子はをしい」此處は「御主」と「子」とを分けて諷ふべし、茲は「或は御主」と切て「子

前と具合を替へて押へて確かりと謡ふべし。

○「心強くは云ひつれども」此處は締めて確かりと謡ふべし。

○「よしや王土に住むならひ」此處は靜かに濕りと謡ふべし。

○「實や親子の道なれば」此處も濕とりと謡ふべし。

○脇、大口僧、一人、

○「是は比叡山惠心の僧都にて候」此脇は總て確かりと謡ふべし。

○「されば」こそ猶未練なる美女なりけり」此處は懸て謡ふべし。

○「猛き心も弱々と」此地は靜かに濕とりと謡ひ出し「仲光餘りの嬉しさに」より替へてさらりと謡ひ「仙家に入りし身の」より引立てすらりと謡ふべし。

○「親子鸚鵡のさかづきの」此處はすらりと謡ふべし。

○達拜掛男舞、三段

○「鴛鴦の」此處はすらりと謡ふべし。

○「下安からぬ思ひこそあれ」此處は乘て靜かに謡ふべし。

○「哀れや實我子の幸壽があるならば」此處は靜かに押へて謡ふべし、蓋し茲は愁傷の心を持て謡ふべし。

○「唯今の涙を」此處は「ん」の字へ當てゝ「感涙と思はゞ」と心持を付けて謡ふべし。

○「思ひは涙餘所目は舞の手」此地は普通の乘地の如く浮やかに謡はず、靜めて濕とりと謡ふべし。

○「御暇申て歸りけるが」此處は終りの「が」の字を靜めて強みに確かり止め、「無悲や幸壽が御供ならばと」と締めて謡ひ出し「しばしは御輿を」より段々と少し運び「見送り申し」の終りの「し」の字を強めに確かりと止め「しばしは御輿を」と締めて謡ひ出し、以下段々と靜めて謡ふべし。

鐘馗

○脇、バサラ、側次、大口、

○脇名乘道行其外何れも句讀を確かりと切りはつきり確かりと謡ふべし。

○「終南山を立出て」此處はすらりと謡ひ出し「海路はるかに」より替へて謡ふべし。

前仕手

面、三ヶ月、黒頭、白鉢卷、厚板、水衣、腰帶、扇、

○前仕手、呼びかけ。

○「草虫露に聲しをれ」此初同はすらりと謡ひ出し「實や何事も」より替へて謡ふべし。

居曲

○此曲は靜かにさらりと淋しく謡ふべし。

○「傳へきく佛在世の」此地はさらりと謡ひ出し、「さら〳〵と走りさつて」より進て謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、小癋見、赤頭、唐冠、厚板、狩衣半切、腰帶、劔、

○後仕手は右に劔を持ち早笛二段聞て出、常座にて開き謡ふ。

○後仕手は強みにざくりと謡ふべし。

○論議はさら〳〵と謡ひ「御はしのもと迄も」と少し靜め返しより以下段々と靜めて謡ふべし。

巴

○脇、着流僧、三人、

○脇次第名乘道行其外何れもさらりと諷ふべし。
○「旅衣木曾の御坂を遙々と」此處はすらりと諷ひ出し「夜をかさねつゝ日をそへて」より替へて諷ふべし。

前仕手

面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織、扇、

○前仕手はアシライにて出、內へ入り常座に踏み止めて諷ふ。
○「面白や鳴の浦波靜かなる」此處は乘てさらりと諷ふべし。
○「不思議やな是成女性の」此處は懸て諷ふべし。
○「何事のおはしますとは知らねども」此處は中聲にてすらりと諷ひ「忝なさに涙こぼるゝと」とさらりと「加樣に詠じ給ひしかば」と替へて諷ふべし。
○「をろかと不審」此處は「をろかと」と强めに諷ひ「不審」より弱めて崩して諷ふべし。
○「ふしぎや僧は義仲の」此處は懸て諷ふべし。
○「古への是こそ君よ名は今も」此初同は濕とりと諷ひ出し「旅人も一樹の蔭」より替へて諷ひ「有難き値遇かな」より段々に靜めて打切に諷ひ、「去ほどに」より改めて諷ひ出し「入相の鐘の音の」と心持を付けて諷ひ「とはせ給へと」と入グリに諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

後仕手

面、孫次郎、黑垂、梨子打、白鉢卷、箔、大口、唐織、坪折、腰帶、太刀、長刀、煉小袖、笠、太刀、

○後仕手は長刀を擔ぎ一聲にて出、一の松にて開き長刀をつき諷ふ。
○後仕手は女武者なれば常の修羅者の如く輕く諷ふ。

○「罪も報も因果のくるしみ」此地は懸てすらりと諷ひ出し段々に運て諷ふべし。
○「ふしぎやな粟津が原の草枕を」此處は懸て諷ふべし。
○「恨みはなほも」此處より弱めて諷ふべし。
○「粟津の汀にて」此地はすらりと諷ひ出し「身は思のため」より替へて諷ふべし。

居曲

○此曲はさらりと諷ふべし。
○「されども時刻の到來」此處は引立てすらりと諷ふべし。
○「草の露霜と」此處は「露」と當らずに下げて、「つ」の字へ扱て當てゝ諷ふべし。
○論議は引立てさらりと諷ふべし。
○「たゞ通ひぢと汀をさして」此處より次第に運て諷ひ「薄氷の深田にかけてみ」と彈て「弓手も」と心持を付けて諷ふべし、此處は「深田にかけてみ」と正面右より左へ踏み込み、右より拍子二つ踏み「弓手も右手も」と右を引き下の左右と見廻し「手綱にすがつて」と左にて手綱取る型あり「かゝりし處に」より改めて緩めて諷ふべし、仕手は茲にて立ち「駈よせて見たてまつれば」と正面へ出、踏み止めて下を見、「重手はおひ給ひぬ」と右へ立かへり「乘り替へにめさせ參らせ」と正面へ出、「此松が根に御供し」と下に居、「涙にむせぶばかりなり」とシヲル型あり。
○「かくて御前を立上り」此處より替へてすらりと運て諷ひ「あますなもらすなと」より段々に進み「かたきは得たりと」より一層進み、「跡も遙かに」の返しより替へて緩めて諷ふべし、仕手は「かくて御前を立上り」より長刀を持て立ち

型あり。

○「今は是迄なり」此處は少し靜めて謡ひ、返しよりさら〳〵と謡ひ「死骸に」とたつぷりと張り「行どもかなしや行やらぬ」と心持を付け謡ひ「とは思へども」より替へて靜め「御小袖を引かづき」よりすら〳〵と「涙と巴は」と靜め以下段々と靜めて謡ふべし。

小督

脇、大臣烏帽子、狩衣、大口、

○脇名乘其外何れもさら〳〵と謡ふべし。

前仕手

面、直面、黒風折、厚板、直垂上下、込大口、少刀、扇、

○「誰にて渡り候ぞ」此處は大小座着て脇出、常座に立て名乘り、名乘濟て橋掛りへ行き幕へ向き「如何に仲國の渡り候か」と云ふ脇の詞を聞て幕上げ二の松にて踏み止め脇へ向き謡ふ。

○「やがて出るや秋の夜の」此初同はすらりと滯らぬ樣に謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

連女

面、小面、鬘、鬘帶、箔、唐織着流、

トモ女

連と同斷、

○連二人扇を持て出、内へ入り脇座へ行き下に居、トモ連は地の上に下に居るなり。

○「實や一樹の蔭に宿り」此處は作り物出て、狂言の說賦濟て謡ひ出すなり。

○此連は常の連の如く餘りさら〳〵と謡はず濕とりとすらりとしたる所を謡ふべし。

○「いざ〳〵さらば琴の音に」此地は靜かにさらりと謡ふべし。

○「責てやしばし慰むと」此地は靜かに濕とりと謡ふべし。

○「我も」此處は入グリに謡ひ「人にかたるな」と心持を付けて靜めて謡ふべし。

後仕手

面、直面、黒風折、厚板、大口、長絹、腰帶、扇、少刀、鞭、文、

○後仕手は文を懷中し扇を挿し鞭を持ち一聲にて出、一の松にて開き謡ふ。

○「荒面白の折からやな」此サシは乘てさらりと謡ふべし。

○「嵯峨野の方の秋の空」此處より「想夫戀なるぞ嬉しき」迄を駒の段と云ふ。

○「もしやと思ひ爰かしこに」此處は右受手網持つ仕形にて左受て出「駒をかけよせ〳〵て」と又右受出「ひかへ〳〵聞けどもと又左受正へ直して聞く型あり、茲は具合を付けて謡ひ「峯の嵐か」とずかとり謡ひ「か」の字を輕く止め「松風か」とすらりと謡ひ出し「尋る」と入グリに謡ふべし。

○「如何に此戸明させ給へ」此處は仕手後見座へ寃ぎ鞭を捨て扇を持ち作り物へ向て謡ひ出すなり

○「門さゝれては叶ふまじと」此處は込めて謡ひ「是は宣旨の御使」とすらりと謡ふべし。

○「所をしるも嵯峨の山」此地は靜かにすらりと謡ひ出し「主はいさしらず」と具合を付けてずかりと謡ひ、確かり止めて「調へは隱れ」と締めて謡ひ出すべし。

○「身の置所もしらねどもさらば」此處は「さらば」の「らば」を寄せて謡ひ「此方へと申候へ」より下二に謡ふべし。

○「勅定に任せ是迄參りて候」此處は「心得て候」

と諷ひて窕ぎ下に居て肩を入れ扇を開き、文を扇の上へ乗せ左に持ち中へ出、連へ向き出、下に居て諷ふ。

居曲

○此曲は静かにさらりと諷ふべし。
○「叡慮にかゝる」此處は入グリに諷ふべし。
○論議は濕とりと諷ふべし。
○「迎への舟車の」此處はずかりと諷ふべし。
○「酒宴をなして糸竹の」此處は引立てすらりと乗て諷ふべし。

男舞、三段、

○「木枯に」此處はさらりと諷ふべし。
○「引とゞむべき言の葉もなし」此地は打上頭に付けて諷ひ出すべし。
○キリは文句に應じて夫々緩急を付けて諷ふべし。
○「小督は見送り」此處は入グリに諷ふべし。

鐵輪

前仕手

面、靈女、鬘、鬘帯、箔、腰卷箔、坪折、腰帯、扇、

○前仕手は扇を持ち笠を冠り、次第二段にて出、内へ入り大小へ向き諷ふ。
○此仕手は餘り重くならぬ樣確かりと諷ふべし。
○「うちに報ひを見せ給へと」此處は強みに諷ふべし。
○「通ひ馴たる道のすへ」此處は確かりと諷ひ出し「みぞろ池」と輕くクリ「いけるかひなき」より段々と靜めて打切に諷ひ「きえん程とや」より替へて諷ふべし。
○「橋を過れば」此處のクリは輕く入グリに諷ふべし。

し。
○「是はふしぎの御告かな」此處は強みに確かりと諷ふべし。
○「いふよりはやく色かはり」此初同は強みに確かりと諷ふべし。
○「人に思ひしらせん」此處にて仕手は手に持てる笠を前へ投げ付け「うき人に思ひしらせん」にて中入するなり、茲は大に心持のある所なり注意肝要なり。
○「うき人に思ひしらせん」此處は「人に思ひしらせん」と諷ひて呼吸を取り「うき人に」と別に確かりと靜めて諷ふべし。
○男の詞はさら〳〵と諷ふべし。

脇

風折、寄水衣、

○脇は總て確かりと諷ふべし。
○「急て供物を御調候へ」此處にて脇は窕ぎ、此内に作り物臺を正面の先へ出す。
○脇の祈りは確かりとすらりとしたる所を諷ふべし。
○「謹上再拜」此處は締めて諷ひ「夫天開け」より替へて諷ひ「大小の神祇」と乗て緩めて諷ふべし。
○「諸佛菩薩」此地は締めて確かりと諷ふべし。
○「祈ればふしぎや」此處より替へて引立て確かり寛たりと諷ふべし。

後仕手

○橋姫、平元結、打杖、扇、
○後仕手は打杖を持ち出端にて出、一の松にて開き諷ふ。
○「夫花は斜脚の暖風にひらけて」此處はさらりと乗て諷ふべし。

○「忽ち報ひをみすべきなり」此處は强みに諷ふべし。
○「繼の身の」此處より替へて諷ひ「加茂川に」と確かりと走らずに文字を拾ふ樣に諷ふべし。
○「恨めしや御身と契りし其時は」此處はさらりと諷ひ「荒恨めしや」と心持を付けて確かりと諷ひ「捨られて」より替へて乘て寛たりと諷ふべし。
○「又は恨めしく」此處は「恨めしく」と出して强みに諷ふべし。
○「あしかれと思はぬ山の嶺にだに」此地はすらりと諷ふべし。
○「今更さこそ」此處は輕く諷ひ「悔しかるらめ」と彈て諷ひ「扨こりや思ひしれ」と强みに確かりと諷ふべし。
○「殊更うらめしき」此處は少し緩めて諷ひ出し、返しの地よりさらりと運て諷ひ「はらたちや」と確かりと諷ひ「思ふ妻をば」より又さら〳〵と運て諷ひ「時節を待べしや」より替へて諷ひ「いう聲ばかり」と入グリに諷ひ「目に見えぬ鬼とぞ」より次第に靜めて諷ふべし。

調伏曾我

前仕手
面、直面、梨子打、白鉢卷、厚板、直垂、少刀、大口、腰帶、扇、
頼朝
面、直面、黑風折、厚板、長絹、大口、腰帶、少刀、扇、
立衆、五六人

○立衆は仕手と同斷
○次第二段にて頼朝、立衆、仕手と出、內へ入り向合ひ諷ふ。
○頼朝はすらりと諷ふべし。
○「鎌倉山を朝立て」此處はすらりと諷ひ出し、「富士の高根の程をしる」より替へて諷ふべし。
○仕手は頼朝へ向き「頓て御社參あらうずるにて候」と諷ひて頼朝は脇座へ行き床机に掛り、立衆は其下に下に居、夫よりアシライにて子方を先に立て脇出、一の松に立ち、「此程の日數待れて」と諷ひ出すなり。

子方
面、直面、放髮、厚板、大口、腰帶、少刀、扇、太刀、
脇
大口僧、二人

○脇は總て確かりと諷ふべし。
○「祐經候か」此處は懸てずかりと諷ふべし。
○「荒珍らしや箱王殿」此處は締めて確かりと諷ふべし。
○「某がしわざとばつと風聞仕候」此處は「風聞」と大きく扱て諷ふべし。
○「某は存せず候」此處は仕手顏を正へ外して知らぬ風を粧ふ所なれば其具合を諷ふべし。
○「かまひて用ひ給ふなよ」此處は確かりと叮嚀に諷ふべし。
○「ないつ笑ふつすかされて」此處は「ないつ」と「笑ふつ」とを分けて二段に出して諷ふべし。
○「いとけなき身のかなしさは」此初同はすらりと諷ひ出し「心もよわ〳〵と」とずかりと諷ひ少し呼吸を取て「あきれ果たる」と締めて諷ふべし。
○「偖頼朝は御座を立ち」此地は確かりと諷ひ出し「御供のさふらひ」より弱めて諷ふべし、此地に

て頼朝立て先づ中入し、立衆も頼朝の跡に付き中入し、仕手は其跡より中入するなり。

○「同宿の太刀を盗とり」此處は懸て諷ふべし。

○「敵の跡をしたひつゝ」此地は懸てさらりと諷ふべし。

○「唯先づ歸り給へとて」此處は柔かに寛たりと諷ふべし。

○「手どり足取」此地も寛たりと諷ふべし。

後仕手

面、不動、白頭、蓮花臺、厚板、狩衣、半切、腰帶、釼、繩、

○後仕手は「別當の坊に、歸けり」の地謠濟て作り物へ引廻し掛け仕手入て大小前へ出す。

○狂言の間濟て、臺の上へ床机に衣かけ黒頭を上に置き鉢卷を結び脇座へ出す。

○「抑佛陀の御誓願」此處より脇は確かりと諷ふべし。

○「護摩の壇上をかまへつゝ」此地は締めて確かりと寛たり諷ふべし。

○「妙音聲を高く上げ」此處は改めて別に一層締めて諷ふべし。

○後仕手は左に繩、右に釼を持ち作り物の内にて床机に掛り出端一段聞て諷ひ出す。

○後仕手は乘て確かりと寛たり諷ふべし。

○「こんがらせいたかを始めとして」此處より乘て寛たりと諷ふべし。

○「五檀の上に」此處にて引廻しを卸す。

○「護摩の煙」此處は心持を付けて確かりと諷ふべし。

○「けしきもあらたに五大尊の」仕手は此處にて臺より下りて型あり。

○「山河草木震動し」此地は乘を外して確かりと締

めて諷ひ「中央の大聖不動」と張て諷ひ「利釼を振り上げ」と具合を付け「身の毛もよだちて」より替へて强みに確かりと諷ふべし。

七騎落

仕手

面、直面、梨子打、白鉢卷、厚板、法被、大口、腰帶、太刀、扇、

頼朝

面、直面、黒風折、厚板、大口、長絹、腰帶、少刀、扇、

子方

面、直面、梨子折、白鉢卷、厚板、側次、大口、腰帶、少刀、扇、

立衆

子方と同斷

○仕手は次第にて頼朝、子方、立衆、義實と出、内へ入り向合ひ諷ふ。

○仕手は强みにさらりと諷ふべし。

○「岡崎」は少し確かりと諷ふべし。

○「實平仰承り」此處は大きくすらりとはつきり諷ふべし。

○「實平候」此處は「さねひら」の「ね」の字へ當て諷ふべし。

○「此人々は君の爲」此初同は寛たりと諷ひ「何れを撰び出さんと」より替へて諷ふべし。

○「何と某に御舟よりをりよと候や」此處は懸て諷ふべし。

○「それがし船中一の老體なれば」此處も懸て諷ふべし。

○「いや左樣にてはなく候」此處は靜かに柔かに諷ふべし。

○「實面白くも述られたり」此處は懸て諷ふべし。
○「是は珍らしき事を承り候物かな」此處は少し强みに諷ひ「夫人は生ずるより死する迄」より改めて諷ひ出し「未聞ず候」と强みにずかりと諷ふべし。
○「さん候我等昨日まで」此處は具合を付けてさらりと諷ふべし。
○「見申せば土肥殿こそ」此處は改めて諷ひ出し懸て諷ふべし。
○「餘りの道理に」此處は押へて靜かに諷ひ「如何に遠平」と改めてはつきりと諷ふべし。
○「是はこざかしき事を」此處はさらりと諷ひ「御船より下り候へ」と强みに懸て諷ふべし。
○「日本一の大膽者」此處は强く諷ひ「それならば人手にはかけまじいぞ」と强く懸て諷ふべし。
○「いづくまでも某誤りて候」此處は靜かに諷ふべし。
○「なにと御舟よりをりやうずると申か」此處は少し懸て諷ふべし。
○「今社實平が子にてあれ」此處は緩めて靜かに諷ひ「父も名殘は惜しいぞとよ」と確かりと二段に出して別離の情を諷ふべし。
○「彼松浦さよ姫が」此地はすらりと諷ひ出し「別れに替らじと」とずかりと諷ひ「皆涙をぞ」と靜めて諷ふべし。
○「契り程なき早船を」此地は輕くさらりと諷ふべし。
○「早遠ざかる浦の浪」此地は子方の調子へ付けず、調子を替へて別に寛たりと諷ふべし。
○「舟のうちに」此處は確かりと諷ふべし。
○「實平はひたすらに」此處はすらりと諷ひ出し、「敵大勢見えたり」と大きく諷ひ「思愛の契りも」

と心持を付けて諷ひ「飛立ばかりに」より懸て諷ふべし。

脇。

黒風折、白鉢卷、掛素袍、大口、弓矢、

○一聲にて脇は弓矢を持ち出、舟の船首へ乘り子方は脇の跡より出、艫へ乘り諷ふ。
○「弓張月の西の空」此處は乘て懸てすらりと諷ふべし。
○「我もそなたの船かげを」此處は懸て諷ふべし。
○「是は内々申合せたる事の候間」此處は外して靜かに諷ひ「如何に和田殿に申候」と改めて諷ひ出し、悄れたる心持を諷ふべし。
○「そも何事にて候ぞ」此處は懸て諷ふべし。
○「昨日の暮ほどより我君を見失ひ申」此處は靜かにさらりと諷ふべし。
○「何と君は其御船には御座なきと候や」此處は懸て諷ふべし。
○「自害をせんと思ひつゝ」此處はすらりと諷ひ、「腰の刀に手をかくる」と懸てずかりと諷ふべし。
○「あゝ暫」此處は懸て諷ひ出し「君は此舟に御座候」と替へて緩めて諷ふべし。
○「偖は某が心を御覽せん爲候な」此處は懸て諷ふべし。
○「いや其儀にてはなく候」此地は靜かに落付て諷ふべし。
○「今は我君を拜み奉り」此處は靜かに諷ひ「如何に實平に申候」と改めて諷ふべし。
○「其時實平あきれつゝ」此處は懸て諷ふべし。
○「夢か現か」此地は懸てすらりと諷ひ出し「こはいかに」と强みに懸て諷ひ「覺えずいだきつき」と少し緩めて心持を付け「泣居たり」と靜めて

謡ふべし。

○「扨彼者をば何として是迄は召連られて候ぞ」此處は外して謡ふべし。

○「御芳志ともなか〳〵愚なり」此處は靜かに謡ひ出し「嬉し泣の涙は」と少し强みを持たせて靜かにすらりと謡ふべし。

○「主從共に悅びの」此處は引立て懸てすらりと謡ふべし。

○達拜掛り、男舞、三段

○「かくて時日をめぐらさず」此地は强みに乘て揚氣にさら〳〵と謡ふべし。

雨月

脇、着流僧、一人

○脇、次第名乘道行其外何れも位を取て重く寬たりと謡ふべし。

○「住馴し嵯峨野の奥を立出て」此處は寬たりと謡ひ出し「難波の御津の浦傳ひ」より替へて謡ふべし。

前仕手

面、小尉、尉髮、小格子、水衣、腰帶、扇

連

面、姥、鬘、鬘帶、姥髮、箔、厚板着流、水衣

○初めに作り物家臺へ引廻しを懸け仕手は扇を持ち連と共に入て脇座へ出し、脇の謠濟て謡ひ出す、又引廻しを掛けずに出し仕手連共に出て作り物へ入るもあり。

○「風枯木を吹けば晴天の雨」此處は靜かに押へて品能く謡ふべし。

○「荒面白の折からやな」此處は「しろの」と少し張て「し」の字へ當てゝ具合を付けて謡ふべし。

○連は常の連の如く浮やかにならぬ樣に謡ふべし。

○「月はいづれぞ雨はいかに」此處は「月はいづれぞ」と「雨はいかに」とを分けて謡ふべし、脇は「雨はいかに」と連を見る型あり。

○「賤が軒端を萱ぞわづらふ」此處は「賤が」と確かりと謡ひ「軒端を」と少しすらりと謡ひ、息を繼ぎ「萱ぞ」と具合を付をて謡ひ、「ぞ」の字へ產み字を出して輕く當り「わづらふ」と押へて具合を付けて確かりと謡ひ、少し間を置て「賤が軒端を」と返しを返し出すべし、返しは上の句を考へつゝ謡ふ所なれば其具合を謡ふべし。

○「月は漏れ、雨はたまれとともにかくに」此處は引立てすらりとふ謡べし。

○「面白の言の葉や」此處は離れて別に押へて謡ふべし。

○「折しも秋なかば」此初同は靜かに確かりと謡ふべし。

○「雨は又瀟湘の」此處は「瀟湘の」と具合を付けて確かりと謡ふべし。

○「なふ村雨の聞え候」此處は懸て謡ふべし。

○「吹き來るぞや」此處は「來」の字へ產み字を出して當り「ぞや」と張て確かり謡て地へ渡すべし。

○「雨にてはなかりけり」此地はすらりと謡ひ出し「雨をもきけとふく」とずかりと心持を付けて「閨の軒端の松の風」と少し靜めて謡ひ「こゝは住吉の」より改めて謡ひ出し「さらでも夢はよもあらじ」と靜めて打切に謡ひ「いざ〳〵碪」より改めて謡ひ出しさらりと謡ひ「身の爲はさもあらで」と具合を付けて謡ふべし。

○「木の葉衣の」此處はたつぷりと謡ひ出し「重ね

て」と入グリに謡ひ「色にもまじる」と確かり切り呼吸を取て「ちりひぢの」と靜めて謡ひ「つもる木の葉をかき集め」と具合を付けて謡ふべし。

○「はや夜も更けたり」此處は押へて確かりと謡ふべし。

○「爰は元來所から」此處は靜かに押へて謡ふべし。

○「老衰の眠深き故に」此地は確かりと押へて謡ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○茲にて狂言出て問語りとなり、間濟て幣臺へ幣を乘せ常座の少し先へ出す。

後仕手

面、舞尉、初冠、白垂、色鉢卷、厚板、狩衣腰帶、幣、扇

○後仕手は出端二段にて出で一の松にて開き謡ふ。

○後仕手は乘て品能くすらりと寛たり謡ふべし。

○「我をば誰とか思ふ」此處より改めて謡ひ出し少し懸て乘て運びを付けて寛たりと謡ふべし。

○「神詫まさに」此處は緩めて謡ひ「抑此神の」より改めてさらりと乘て寛たりと謡ひ「宜禰が頭に」より緩めて謡ふべし。

○眞の序の舞、四段

○「有難の影向や」此地は運びを付けてさらりと謡ひ「是迄なりや」より替へて引立て少し浮やかに謡ひ「もとの宮人となりて」より替へて締めて確かりと謡ふべし。

綾　皷

脇

黑風折、單狩衣、大口

○初めに大小座着、作り物舞臺の中の先きへ出し、連出て脇座へ行き床机に掛り、夫より脇出て名乘る。

○脇は名乘其外何れも餘り重くならぬ樣句讀の息繼を確かり置き寛たりと謡ふべし。

前仕手

面、三光尉、尉髮、熨斗目、水衣、腰帶、扇萩箒

連

面、小面、鬘、鬘帶、天冠、箔、唐織、坪折緋大口、腰卷、扇

○脇の語り濟て狂言說賦あり、說賦濟で仕手を呼び出すなり。

○「如何に老人」此處は仕手萩箒を持ち出、幕離れにて踏み止めるを見て謡ひ懸るなり。

○此仕手は前後共强みに確かりと謡ふべし。

○「實や承り及ぶ」此處は仕手、皷を篤と見て謡ひ出す所なれば其具合を謡ふべし。

○「夕部の鐘の聲そへて」此處の「聲」の下げは當らずに下げて謡ふべし。

○「後のくれぞとたのめをく」此處は押へて濕とりと謡ふべし。

○「さなさだに、闇の夜鶴の老の身に」此處は仕手次第にて萩箒を捨て扇を持ち正面に立て謡ひ出すなり。

○「草の袂に色そへて」此處は押へて確かりと張るべし。

舞曲

○此曲は靜かに濕とりと謡ふべし。

○「などされば是程に」此一句は少しずかりと謡ひ少し呼吸を取て「しらばさのみに」と締めて謡ひ「まよふらん」とすらりと謡ひ出し止めを確

かりと止めて仕手へ渡すべし、仕手は「しらばさのみに」の處にてシヨル型あり。

○「驚けとてや」此處は強みに確かり諷ふべし。

○「音に立たば」此處も強みに確かりと諷ふべし仕手は茲にて立ち右受けて「面影もしや」と少し進み出て「綾の鼓とは知らずして」と正面へ直して鼓を見ながら鼓の前へ行き「打てども」と鼓を一つ打ち「聞えぬは」と手を下げて聞く型あり、故に此處は「綾の鼓とは」とたつぷりと寛たり諷ひ、「打てども」とずかりと「聞えぬは」と靜めて具合を付けて諷ふべし。

○「きけども〳〵」此處は少し出ながら又聞く型あり、此處は「きけども」とずかりと諷ひ、返しを緩めて確かりと諷ひ「音せぬ物は」とたつぷりと張り「あやしの太鼓やなにとて」と右より一足出て止め、又左より一足出て鼓を篤と見て跡へさがり下に居る型あり、此處は「あやしの太鼓やなにとて」と強みに懸てずかりと諷ひ、少し呼吸を取て、「音は出ぬぞ」と締めて諷ふべし。

○論議は確かりと寛たりと諷ふべし。

○「鼓もならず」此處は強みに具合を付けて諷ふべし。

○「人も見えず」此處は寛たりと諷ひ「ず」の字を引かずに確かりと止め少し呼吸を取て「こは何と鳴る神も」と懸てずかりと進て諷ふべし、仕手は茲にて扇を捨て手を打合せ平臥する型あり、茲は鼓の打方にも習ある處なり。

○「かほどに緣なかるらんと」此處にて仕手は諸手シヨリする型あり、此處より替へて締めて諷ひ「かくては何の爲」とずかりと諷ふべし、仕手は茲にて立て常座へ行くなり、此處よりすらりと運て諷ひ「身を投げて失にけり」より段々靜めて諷ふべし、仕手は此地にて中入するなり。

○「如何に人々」此處は引立てすらりと諷ふべし。

○「荒面白の鼓の聲や」此處より狂亂の心なり替へて諷ふべし。

○「不思儀やな女御の御姿」此處は懸て諷ふべし。

○「聲ありて」此處は確かりと諷ふべし。

後仕手

面、大悪尉、白頭、厚板、法被、半切、腰帶

鐘木杖

○後仕手は打杖を挿、鐘木杖を持ち出端一段聞て出、一の松にて開き諷ふ。

○「又立歸る執心の恨み」此處は強みに寛たりと諷ひ「恨み」と心持を付けて諷ふべし。

○「恨みとも歎きとも」此處も強みに諷ひ「恨みとも」の「と」の字へ產み字を出して輕く當り「愚かなる」と緩めて具合を付けて強みに諷ふべし。

○「一念瞋意の邪婬の恨み」此地は乘て強みに寛たりと諷ふべし。

○「小山田の苗代水は絶ずとも」此處は強みにすら〳〵と諷ふべし。

○「ならぬ鼓の聲たてよとは」此處は「ならぬ」と押へて「鼓の」と當らずに押へて張て諷ふべし。

○「心づくしの木の間の月の」此處は乘て確かりと諷ふべし。

○「なる物か〳〵」此處は強く諷ひ出し「打て」と押へて「見給へ」と強く諷ふべし。

○「うてや〳〵と」此處も強く諷ひ出し「鼓はならで」と引て句切り少し呼吸を取て「かなしや〳〵と」と弱く諷ひ「叫びまします」より又強く諷ふべし。

○「冥途のぜつさあはうらせつ」此地も強みに確かりと諷ひ「扨何と」と充分強く諷ふべし。

○「因果れきぜんはまのあたり」此處は少し靜めて弱くすらりと謡ひ、以下具合を付けてさらりと謡ひ「程もなく死靈と成て」より懸て謡ひ「女御に付きたゝつて」と確かりと謡ひ「風渡り」とずかりと「雨おちて」と確かりと「紅蓮大紅蓮と成て」より強みに「鯉魚が躍る」と強く「かくやと思ひ白波の」と確かりと「荒恨めしや」と強く、返しの「荒うらめしや」より強く、靜めて謡ふべし。

繪馬

脇、大臣、三人

○脇、次第名乘道行其外總て句讀を確かりと切り、すら〳〵と謡ふべし。

○「風は上なる松本や」此處はすらりと謡ひ出し「瀨田の長橋打渡り」より替へて謡ふべし。

○「ふしぎやな夜は早夜半に過て候に」此處は懸て謡ふべし。

○「此方の事にて候か何事にて候ぞ」此處は闇夜にて脇の姿見えず、脇の聲をたよりに謡ふ處なれば其心して謡ふべし。

○「さん候我等が繪馬を掛候よ」此處は脇の詞を取て謡ふべし。

○「暫候」此處は懸て謡ふべし。

○「歌は八雲を先として」此處は懸てすらりと謡ふべし。

○「かけまくもかたじけなや」此初同はすらりと謡ひ出し「繪馬は掛たりや」とずかりと謡ひ「國土豐かに」と緩めて謡ひ出し「なさふよ」と靜めて打切に謡ふべし。

○「加茂のみあれのひをりの日」此地は靜かにさらりと謡ふべし。

前仕手

面、小尉、尉髮、小格子、厚板、水衣、大口腰帶、杖、白繪馬、

前連女

面、姥、鬘、鬘帶、姥髮、箔、厚板、水衣、黑繪馬

○初めに作り物を大小前へ出し、眞の一聲にて右に杖をつき左に白繪馬を持ち、連は右に黑繪馬を持ち出、内へ入り常座にて向合ひ謡ふ。

○眞の一聲高砂の通り。

○二の句其外何れも高砂の通り。

○「天津日嗣の代々ふりて」此處はすらりと謡ひ出し、治まる御代の我等まで」より替へて謡ふべし。

○此仕手は深夜に繪馬を掛けに來りたる所にて闇夜にて謡ふ心持を忘るべからず。

舞曲

○此曲は靜かにさらりと謡ふべし。

○仕手は打切にて中へ行き正向き下に居「信ずべし信ぜば」より杖を持て立ち「夜も明けゆかば」と脇へ向て進み「待えてまみえ申さんと」と右へ廻り「夜半にまぎれて失にけり」にて正へ開き中入するなり、連も此地にて仕手の跡より中入するなり。

後仕手

面、三日月、黑頭、唐冠、白鉢卷、厚板、狩衣、半切、腰帶、扇

後連男、二人

面、邯鄲男、金風折、單狩衣、厚板、色鉢卷黑垂、大口、腰帶、扇

二人共同樣、但し一人は幣、一人は榊の枝持つ

○仕手は扇を持ち連二人を先に立て、出端二段聞

て出、連は二人共内へ入り開き、仕手は一の松にて開く時「雲は萬里に」と地より謡ひ掛るなり。

○「されども誓ひは虚空に滿くる」仕手は此地にて舞臺へ入るなり、此地はすらりと乘て謡ふべし。

○「日神の御像」此處は「御像」と走らずに文字を拾ふ樣に謡ひ確かりと靜めて謡ひ「有難や」と確かりと謡ふへし。

○「所は齊宮の名にふりし」此處は緩めてすらりと謡ひ、返しよりさらりと謡ひ「あらはに神體」より乘を外してすらりと進て謡ふべし。

神舞

○「むかし、天の岩戸」に此處は「天の岩戸」より乘て靜かに確かりと謡ひ、返しの地より懸てさらりと謡ひ「常闇の夜」より締めて謡ふべし。

神樂

○「面白や」此處は打上頭を聞て謡ひ出すべし。

○「おもてしろやと覺えず岩戸を」此地は確かりと謡ひ出し「いつまで岩戸を」より少し懸て進て謡ふべし。

○「引連れ顯はれ」此處は「顯はれ」の「れ」の引きより弱めて謡ふべし。

花　月

脇、着流僧、一人

○脇次第名乘道行其外何れもさらりと寛たりと謡ふべし。

○「生れぬ先きの身をしれば」此道行は卒都婆小町と同一なれども此處は卒都婆小町より輕くすらりと謡ふべし。

○「憐むべき親もなし」此處は、卒都婆小町にては殘して謡へども此處は然らず。

○「千里を行くも」此處より替へて謡ふべし。

仕手

面、小喝喰、喝喰髮、折烏帽子、箔、大口、水衣肩取る、腰帶、弓矢、扇

○仕手は扇を挿し矢を後に挿し弓を持ち狂言の呼び出しを聞て出、内へ入り常座の少し左へより立て名乘る。

○此仕手は若くさら〳〵と謡ふべし。

○「人是を聞て」此處はすらりと謡ふべし。

○「偖は末世のかうそ成とて」此初同はすらりと謡ひ出しさらりと謡ふべし。

○「其揚由にも劣るまじ荒面白や」此處は「ま」の字へ當てゝ謡ひ「荒面白や」と出して謡ふべし。

○「それは柳是は櫻」此地はすらりと謡ひ出し、具合を付けてさらりと謡ふべし。

舞曲

○此曲はさらりと謡ふべし。

○「吉野龍田の花紅葉」此處はすらりと謡ふべし。

○「さらしな越路の、月雪」此地もさらりと謡ふべし。

○「我はもとつくしの者」此處もすらりと謡ふべし。

○「七つの年天狗に」此處は「天狗に」と出して謡ふべし。

○「取られて往し山々」此地はさらりと謡ふべし。

○「天狗よりも恐ろしや」此處の打切は素謡の時に謡ふてもよし。

○「連まゐらせて」此處は入グリに謡ふべし。

紘　上

脇、着流僧

師長

面、直面、黒風折、厚板、長絹、腰帶、扇